

四国縦貫自動車道建設に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告

3

桜ノ岡遺跡（I）
桜ノ岡遺跡（III）

1993

徳島県教育委員会
財団法人 徳島県埋蔵文化財センター
日本道路公団

四国縦貫自動車道建設に伴う 埋蔵文化財発掘調査報告

3

桜ノ岡遺跡（I）

桜ノ岡遺跡（III）

1993

徳島県教育委員会
財団法人 徳島県埋蔵文化財センター
日本道路公団



桜ノ岡遺跡（I）全景（南より）



集石土壤（SK 1039）検出状況

序 文

本書は、四国縦貫自動車道（徳島～脇間）の建設に伴い、平成元年度と平成2年度に実施した阿波郡阿波町桜ノ岡遺跡（I）・（III）の発掘調査の成果をまとめたものであります。

遺跡は吉野川中流左岸の段丘上に位置しており、弥生時代を中心とする遺構が確認されました。特に弥生時代中期の竪穴住居跡や棟持柱をもつ掘立柱建物跡、また集石遺構などが検出され、これまで不明であった当該地域の弥生社会を把握するうえで良好な資料が得られたと考えております。

本書が調査研究の資料として活用され、文化財保護の一助となれば幸いです。

なお、発掘調査の実施、報告書作成にあたり、日本道路公団をはじめ、関係機関並びに地元の皆様に多大の御協力、御指導を頂きました。ここに深く感謝いたしますとともに、今後とも御支援賜りますようお願い申し上げます。

平成5年12月

財団法人 徳島県埋蔵文化財センター

理事長 近藤通弘

例　　言

- 1 本書は、平成元（1989）年度と平成2（1990）年度に調査を実施した四国縦貫自動車道建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書である。
- 2 本書には阿波郡阿波町桜ノ岡所在の桜ノ岡遺跡（I）および桜ノ岡遺跡（III）の調査報告を収録した。
- 3 発掘調査は日本道路公団高松建設局から徳島県が委託を受け、徳島県からの委託により、財団法人徳島県埋蔵文化財センターが実施した。
- 4 発掘調査および報告書の作成について実施期間は次のとおりである。

発掘調査期間 桜ノ岡遺跡（I）	平成元年11月25日～平成2年3月24日（1次）
	平成2年7月2日～平成3年3月26日（2次）
桜ノ岡遺跡（III）	平成2年1月30日～2月14日
基礎整理期間	平成3年4月1日～平成4年3月31日
報告書作成期間	平成4年4月1日～平成5年3月31日

- 5 遺構の表示は徳島県埋蔵文化財センターが定める発掘調査基準による略記号を用いている。

凡例

SA 堀立柱建物跡	SD 溝	SP 柱穴・小穴
SB 堅穴住居跡	SK 土坑・土壤	SX 不明遺構

- 6 本書の遺物番号は遺跡ごとに通し番号とし、本文・挿図・表・図版と一致する。
なお、桜ノ岡遺跡（III）は分量が極めて少ないため、当該遺跡の挿図等については遺跡名を付し、桜ノ岡遺跡（I）の遺構・遺物等については遺跡名を付していない。
- 7 方位は国土座標第IV座標系の北、高さは東京湾標準潮位（T.P.）を表す。
- 8 本書で用いた土層及び土器の色調は、小山正忠・竹原秀雄『新版標準土色帖』1989年度版によった。

9 第4図の地形図は建設省国土地理院発行1/25,000地形図「脇町」「西赤谷」を縮小・転載したものである。

10 発掘調査・整理期間を通じて次の機関・個人に御指導・御協力を得た。

徳島県教育委員会 日本道路公団高松建設局 同脇町工事事務所 徳島県土木部総貫道推進局 同中央事務所 阿波町 勝香川県埋蔵文化財調査センター 岡山県古代吉備文化財センター

石川直章 岩崎直也 阪井茂美 柴田昌児 正岡謙夫 森浩一 渡部明夫

11 自然科学的分析はパリノ・サーヴェイ株式会社に委託した。

12 本書の執筆は、菅原康夫がI-1を、他を湯浅利彦が担当した。

遺物の写真撮影は島巡賀二が行った。

本書の編集は湯浅が行った。

遺跡抄録

遺跡名	桜ノ岡遺跡(I)	桜ノ岡遺跡(III)
読み	さくらのおか	
所在地	阿波郡阿波町桜ノ岡91-2他	阿波郡阿波町桜ノ岡134-3
種別	集落	散布地
時代	弥生・中世	
主な遺構	建物跡・住居跡・集石遺構・土坑等	なし
主な遺物	旧石器・弥生土器・石器・中世土器	旧石器・弥生土器・石器

本文目次

I 調査の経緯	1
1 調査に至る経緯	1
2 調査の経過	6
(1) 調査の経過	6
① 桜ノ岡遺跡 (I)	6
② 桜ノ岡遺跡 (III)	6
(2) 発掘調査の方法	6
① 桜ノ岡遺跡 (I)	6
② 桜ノ岡遺跡 (III)	9
(3) 調査日誌抄	10
① 桜ノ岡遺跡 (I) 1次調査	10
② 桜ノ岡遺跡 (I) 2次調査	11
③ 桜ノ岡遺跡 (III)	13
II 遺跡の立地と環境	14
1 地理的環境	14
2 歴史的環境	14
III 調査成果	18
A 桜ノ岡遺跡 (I)	18
1 基本層序	18
2 遺構と遺物	23
(1) 旧石器・縄文時代	24
① 遺構に伴わない遺物	24
(2) 弥生時代	26
① 穂穴住居跡	26
② 掘立柱建物跡	70
③ 集石遺構	76
④ 土坑・土壙墓	131
⑤ 柱穴・小穴	150
⑥ 自然流路・不明遺構	154
⑦ 遺構に伴わない遺物	163
(3) 中世	178
① 掘立柱建物跡	178
② 溝	190

③ 土坑・土壤墓	193
④ 柱穴・小穴	197
⑤ 遺構に伴わない遺物	198
3まとめ	201
(1) 弥生土器の様相	201
(2) 弥生時代の集落構成	208
(3) 弥生時代の集石遺構	210
(4) 弥生時代の石器	213
4自然科学的分析 パリノ・サーヴェイ株式会社	218
(1) 土壌分析	218
(2) 炭化材同定	224
B桜ノ岡遺跡(III)	231
1基本的層序	231
2出土遺物	231
3まとめ	233

挿図目次

第1図 四国横貫自動車道(徳島～島)路線図	3
第2図 調査地位位置図	7
第3図 桜ノ岡遺跡(I) 調査区割・調査区配置図	9
第4図 周辺の遺跡分布図	15
第5図 桜ノ岡遺跡(II) 基本土層図	19
第6図 桜ノ岡遺跡(II) 遺構配置図	21
第7図 遺物包含層等出土遺物実測図(1)	24
第8図 遺物包含層等出土遺物実測図(2)	25
第9図 弥生時代の遺構配置図	27
第10図 SB1001遺構実測図	29
第11図 SB1001内集石遺構実測図	30
第12図 SB1001出土遺物実測図(1)	31
第13図 SB1001出土遺物実測図(2)	32
第14図 SB1001出土遺物実測図(3)	33
第15図 SB1001出土遺物実測図(4)	34
第16図 SB1001出土遺物実測図(5)	35
第17図 SB1001出土遺物実測図(6)	36
第18図 SB1001出土遺物実測図(7)	37
第19図 SB1002遺構・出土遺物実測図	38
第20図 SB1004遺構実測図	40
第21図 SB1004出土遺物実測図(1)	41
第22図 SB1004出土遺物実測図(2)	42
第23図 SB1004出土遺物実測図(3)	43
第24図 SB1004出土遺物実測図(4)	44
第25図 SB1004出土遺物実測図(5)	45
第26図 SB1004出土遺物実測図(6)	46
第27図 SB1004出土遺物実測図(7)	47
第28図 SB1004出土遺物実測図(8)	48
第29図 SB1004出土遺物実測図(9)	49
第30図 SB1005遺構・出土遺物実測図	50
第31図 SB1006遺構実測図	51
第32図 SB1006炉跡集石状況実測図	52
第33図 SB1006 P-8遺物出土状況実測図	53
第34図 SB1006出土遺物実測図	54
第35図 SB1006 P-8出土遺物実測図	55
第36図 SB1007遺構実測図	56
第37図 SB1008遺構実測図	57
第38図 SB1008出土遺物実測図(1)	57
第39図 SB1008出土遺物実測図(2)	58
第40図 SB1009遺構・出土遺物実測図	59
第41図 SB1010遺構実測図	60
第42図 SB1010内集石状況実測図	61

第43图	SB1010出土遗物实测图 (1).....	54	第86图	SK1016出土遗物实测图 02	
第44图	SB1010山上遗物实测图 (2).....	65		SK1051出土遗物实测图	110
第45图	SB1010出土遗物实测图 (3).....	66	第87图	SK1039遗物实测图	111
第46图	SB1010出土遗物实测图 (4).....	57	第88图	SK1039主要遗物出土地点图	112
第47图	SB1011遗物·出土遗物实测图.....	68	第89图	SK1039出土遗物实测图 (1)	113
第48图	SB1003遗物·出土遗物实测图.....	69	第90图	SK1039山上出土遗物实测图 (2)	114
第49图	SA2001遗物实测图.....	70	第91图	SK1039出土遗物实测图 (3)	115
第50图	SA2001主柱穴 土物出土状况实测图.....	71	第92图	SK1039出土遗物实测图 (4)	116
第51图	SA2001主柱穴 出土遗物实测图 (1).....	72	第93图	SK1039山上出土遗物实测图 (5)	117
第52图	SA2001主柱穴 出土遗物实测图 (2).....	73	第94图	SK1039出土遗物实测图 (6)	118
第53图	SA2001主柱穴 出土遗物实测图 (3).....	74	第95图	SK1045遗物实测图	119
第54图	SA2001主柱穴 出土遗物实测图 (4).....	75	第96图	SK1045出土遗物实测图	120
第55图	SA2002遗物实测图.....	76	第97图	SK1049遗物实测图	121
第56图	SK1008遗物实测图.....	77	第98图	SK1049出土遗物实测图 (1)	122
第57图	SK1008主要遗物出土地点图.....	79	第99图	SK1049出土遗物实测图 (2)	123
第58图	SK1008山上遗物实测图 (1).....	80	第100图	SK1061遗物实测图	124
第59图	SK1008出土遗物实测图 (2).....	81	第101图	SK1168遗物·山上遗物实测图	125
第60图	SK1008出土遗物实测图 (3).....	82	第102图	SK1178遗物实测图	125
第61图	SK1008出土遗物实测图 (4).....	83	第103图	SK1178出土遗物实测图 (1)	126
第62图	SK1008出土遗物实测图 (5).....	84	第104图	SK1178出土遗物实测图 (2)	127
第63图	SK1008山上遗物实测图 (6).....	85	第105图	SK1178出土遗物实测图 (3)	128
第64图	SK1014遗物实测图.....	86	第106图	SD1001遗物实测图	129
第65图	SK1014出土遗物实测图 (1).....	87	第107图	SD1001出土遗物实测图	130
第66图	SK1014出土遗物实测图 (2).....	88	第108图	SK1017遗物·出土遗物实测图	131
第67图	SK1014出土遗物实测图 (3).....	89	第109图	SK1028·SK1029遗物·出土遗物实测图	132
第68图	SK1014山上遗物实测图 (4).....	90	第110图	SK1034遗物·出土遗物实测图	133
第69图	SK1014出土遗物实测图 (5).....	91	第111图	SK1051遗物·出土遗物实测图	134
第70图	SK1014出土遗物实测图 (6).....	92	第112图	SK1057遗物·出土遗物实测图	135
第71图	SK1014出土遗物实测图 (7).....	93	第113图	SK1062遗物·山上遗物实测图	135
第72图	SK1014出土遗物实测图 (8).....	94	第114图	SK1063遗物·出土遗物实测图	136
第73图	SK1016遗物实测图.....	97	第115图	SK1068遗物·出土遗物实测图	136
第74图	SK1016主要遗物出土地点图.....	96	第116图	SK1069遗物·出土遗物实测图	137
第75图	SK1016出土遗物实测图 (1).....	99	第117图	SK1075遗物·山上遗物实测图	138
第76图	SK1016出土遗物实测图 (2).....	100	第118图	SK1082遗物·出土遗物实测图	138
第77图	SK1016出土遗物实测图 (3).....	101	第119图	SK1109遗物·出土遗物实测图	139
第78图	SK1016出土遗物实测图 (4).....	102	第120图	SK1111遗物·出土遗物实测图	139
第79图	SK1016出土遗物实测图 (5).....	103	第121图	SK1127遗物·出土遗物实测图	141
第80图	SK1016出土遗物实测图 (6).....	104	第122图	SK1129遗物·出土遗物实测图	142
第81图	SK1016山上遗物实测图 (7).....	105	第123图	SK1132遗物·出土遗物实测图	143
第82图	SK1016出土遗物实测图 (8).....	106	第124图	SK1133遗物实测图	143
第83图	SK1016出土遗物实测图 (9).....	107	第125图	SK1157遗物·出土遗物实测图	144
第84图	SK1016出土遗物实测图 00	108	第126图	SK1159遗物·出土遗物实测图	144
第85图	SK1016出土遗物实测图 01	109	第127图	SK1164遗物·山上遗物实测图	145

第12回	SK1171遺構火薬図	146	第17回	SA1002遺構・出土遺物実測図	181
第12回	SK1171出土遺物実測図 (1)	146	第18回	SA1003遺構出土遺物実測図	182
第13回	SK1171出土遺物実測図 (2)	147	第19回	SA1004遺構実測図	183
第13回	SK1174遺構・出土遺物実測図	148	第20回	SA1005遺構実測図	184
第12回	SK1175遺構・出土遺物実測図	148	第21回	SA1006遺構実測図	184
第13回	SK1176遺構・出土遺物実測図	149	第22回	SA1007遺構実測図	185
第14回	SK1188遺構・出土遺物実測図	149	第23回	SA1008遺構実測図	185
第15回	SP1313遺構・出土遺物実測図	150	第24回	SA1009遺構実測図	186
第13回	SP1371遺構・出土遺物実測図	151	第25回	SA1010遺構・出土遺物実測図	186
第12回	SP1609遺構・出土遺物実測図	151	第26回	SA1011遺構実測図	187
第18回	SP1748遺構・出土遺物実測図	152	第27回	SA1012遺構実測図	187
第12回	SP1762遺構・出土遺物実測図	153	第28回	SA1013遺構実測図	188
第1前回	SP1880遺構・出土遺物実測図	154	第29回	SA1014遺構実測図	188
第14回	柱穴・小穴 出土遺物実測図	154	第30回	SA1015遺構実測図	188
第12回	SR2001土層断面図	155	第31回	SA1016遺構実測図	189
第16回	SR2001出土遺物実測図 (1)	156	第32回	SA1017遺構火薬図	189
第14回	SR2001出土遺物実測図 (2)	157	第33回	SA1018遺構実測図	190
第16回	SR2001出土遺物実測図 (3)	158	第34回	SA1019遺構実測図	191
第16回	SR2001出土遺物実測図 (4)	159	第35回	SD1006遺構・出土遺物実測図	192
第10回	SR2001出土遺物実測図 (5)	160	第36回	SD1010遺構・出土遺物実測図	192
第16回	SR2001出土遺物実測図 (6)	161	第37回	SK1003遺構・出土遺物実測図	193
第16回	SR2001出土遺物実測図 (7)	162	第38回	SK1031遺構・出土遺物実測図	193
第10回	SX1005遺構・出土遺物実測図	163	第39回	SK1048山上出土遺物実測図	194
第15回	遺物包含層等山上遺物火薬図 (1)	164	第40回	SK1053遺構・出土遺物実測図	194
第15回	遺物包含形等出土遺物実測図 (2)	165	第41回	SK1056遺構・出土遺物実測図	194
第15回	遺物包含層等出土遺物実測図 (3)	166	第42回	SK1093遺構・出土遺物実測図	195
第15回	遺物包含層等出土遺物実測図 (4)	167	第43回	SK1106遺構・出土遺物実測図	195
第15回	遺物包含層等出土遺物実測図 (5)	168	第44回	SK1156遺構・出土遺物実測図	196
第15回	遺物包含層等出土遺物火薬図 (6)	169	第45回	SP1181遺構・出土遺物実測図	196
第15回	遺物包含層等出土遺物実測図 (7)	170	第46回	SP1342遺構・出土遺物実測図	197
第15回	遺物包含層等山上遺物火薬図 (8)	171	第47回	SP1483遺構・出土遺物実測図	197
第15回	遺物包含層等山上遺物火薬図 (9)	172	第48回	SP1494遺構・出土遺物実測図	198
第10回	遺物包含層等山上遺物火薬図 (10)	173	第49回	柱穴・小穴 出土遺物実測図	198
第16回	遺物包含層等出土遺物実測図 (11)	174	第50回	遺物包含層等出土遺物実測図 (1)	199
第16回	遺物包含層等山上遺物火薬図 (12)	175	第51回	遺物包含層等出土遺物実測図 (2)	200
第16回	遺物包含層等出土遺物実測図 (13)	176	第52回	桜ノ岡道路 (III) 地形・調査区配置図	232
第16回	遺物包含層等出土遺物実測図 (14)	177	第53回	桜ノ岡道路 (III) 調査区壁土層図	233
第16回	中世の遺構配置図	179	第54回	桜ノ岡道路 (III) 出土遺物実測図	234
第16回	SA1001遺構実測図	181			

表目次

第1表 四国震災自動車道埋蔵文化財調査地・観察表	4	第22表 SK1016出土遺物観察表	272
第2表 弥生時代堅穴住居跡・窓表	235	第23表 SP1051出土遺物観察表	281
第3表 弥生時代建物遺構・監査表	236	第24表 SK1039出土遺物観察表	281
第4表 弥生時代遺構・監査表	236	第25表 SK1045出土遺物観察表	285
第5表 中世建物遺構・監査表	239	第26表 SK1049出土遺物観察表	286
第6表 中世遺構・窓表	240	第27表 SK1168出土遺物観察表	286
第7表 遺物包含層出土遺物(旧石器・萬葉時代)観察表	243	第28表 SK1178出土遺物観察表	287
第8表 SB1001出土遺物観察表	244	第29表 SD1001出土遺物観察表	288
第9表 SB1002出土遺物観察表	248	第30表 土壙・土坑(弥生時代)出土遺物観察表	289
第10表 SB1004出土遺物観察表	248	第31表 柱穴・小穴(弥生時代)出土遺物観察表	293
第11表 SB1005出土遺物観察表	252	第32表 SR2001出土遺物観察表	295
第12表 SB1006出土遺物観察表	253	第33表 SX1005出土遺物観察表	298
第13表 SB1006 P-8出土遺物観察表	254	第34表 遺物包含層等出土遺物(弥生時代)観察表	298
第14表 SB1008出土遺物観察表	255	第35表 SA1002出土遺物観察表	304
第15表 SB1009出土遺物観察表	256	第36表 SA1003出土遺物観察表	304
第16表 SB1010出土遺物観察表	256	第37表 SA1010出土遺物観察表	304
第17表 SB1011出土遺物観察表	258	第38表 溝(中世)出土遺物観察表	305
第18表 SB1003出土遺物観察表	259	第39表 土坑・上塙(中世)出土遺物観察表	305
第19表 SA2001出土遺物観察表	259	第40表 柱穴・小穴(中世)出土遺物観察表	306
第20表 SK1008出土遺物観察表	262	第41表 遺物包含層等出土遺物(中世)観察表	306
第21表 SK1014出土遺物観察表	265	第42表 桜ノ岡遺跡(III)出土遺物観察表	308

図版目次

図版1 図版1 桜ノ岡遺跡(1) 全景(南より)	第11調査区西半完掘全景(南より)
集石土壤(SK1039)出土状況	図版8 第11調査区東半完掘全景(北より)
図版1 桜ノ岡遺跡(1)(II) 遠景(南より)	SB1001完掘状況(1次調査・北より)
阿波山脈中腹より遺跡所在方面を望む	図版9 SB1001内集石状況(北より)
図版2 桜ノ岡遺跡(1) 調査前状況(西より)	SB1004完掘状況(北より)
桜ノ岡遺跡(1) 調査前状況(南より)	図版10 SB1005伊半掘状況(南東より)
図版3 桜ノ岡遺跡(1) 1次調査全景	SB1005・1006削り下げ状況(東より)
第1・2調査区掘り下げ状況	図版11 SB1006完掘状況(北より)
図版4 第3調査区中央部掘り下げ状況	SB1006削上集石状況(西より)
第5調査区完掘全景(東より)	図版12 SB1006内小穴(P-8)・土器出土状況
図版5 第6調査区完掘全景(北より)	SB1007完掘状況(北より)
第7調査区完掘全景(西より)	図版13 SB1008完掘状況(西北より)
図版6 第8調査区完掘全景(東より)	SR1009完掘状況(南東より)
第9調査区完掘全景(東より)	図版14 SB1010完掘状況(北より)
図版7 第10調査区南半完掘全景(北より)	SB1010内集石状況(北より)

図版15	SB1011掘り下げ状況（西より） SB1063・SA2001掘り下げ状況（西より）	SR2001（第4調査区）掘り下げ状況（北より）
図版16	SA2001柱穴（P-1-1）上層土器出土状況（東より） SA2001柱穴（P-1）下層土器出土状況（西より）	SA1010検出状況（東より） SA1010中央柱穴（P-7）土器出土状況（東より）
図版17	SA2001柱穴（P-2）土器出土状況（西より） SA2001柱穴（P-4）土器出土状況（西より）	SD1006掘り下げ状況（北より） SK1031完掘状況（東より）
図版18	SK1008掘り下げ状況（北より） SK1008北端民化材出土状況（東より）	図版39 遺物包含層出土遺物（旧石器・绳文時代） SB1001出土遺物（1）
図版19	SK1008完掘状況（西より） SK1014検出状況（西より）	図版40 SB1001出土遺物（2）
図版20	SK1014掘り下げ状況（西より） SK1016柱穴状況（西より）	図版41 SB1001出土遺物（3） SB1004出土遺物（1）
図版21	SK1016検出状況（北より） SK1016完掘状況（東より）	図版42 SB1004出土遺物（2） 図版43 SB1004出土遺物（3）
図版22	SK1039検出状況（東より） SK1039掘り下げ状況（西より）	図版44 SB1003出土遺物 SH1006P-8出土遺物
図版23	SK1039土器・石器出土状況（南より） SK1039完掘状況（北より）	図版45 SB1008出土遺物
図版24	SK1049検出状況（北より） SK1049A坑削り下げ状況（北西より）	図版46 SH1009出土遺物 SB1010出土遺物（1）
図版25	SK1049A坑完掘状況（北東より） SK1049B坑掘り下げ状況（南より）	図版47 SB1010出土遺物（2）
図版26	SK1049B坑完掘状況（南より） SK1049完掘状況（南より）	図版48 SB1011出土遺物 SA2001柱穴出土遺物（1）
図版27	SK1061掘り下げ状況（北より） SK1061完掘状況（北より）	図版49 SA2001柱穴出土遺物（2）
図版28	SK1168掘り下げ状況（北より） SK1178掘り下げ状況（北西より）	図版50 SK1008出土遺物（1） 図版51 SB1008出土遺物（2）
図版29	SK1178完掘状況（西より） SD1001掘り下げ状況（西より）	図版52 SK1008出土遺物（3） SK1014出土遺物（1）
図版30	SD1001完掘状況（西より） SK1017完掘状況（東より）	図版53 SK1014出土遺物（2） 図版54 SK1014出土遺物（3）
図版31	SK1028・1029掘り下げ状況（西より） SK1127完掘状況（北より）	図版55 SK1014出土遺物（4） 図版56 SK1016出土遺物（1）
図版32	SK1159（手前）SK1156埋り下げ状況（北東より） SK1171上部出土状況（西より）	図版57 SK1016出土遺物（2） 図版58 SK1016出土遺物（3）
図版33	SK1174掘り下げ状況（南より） SK1175上部出土状況（東より）	図版59 SK1016出土遺物（4） SK1039出土遺物（1）
図版34	SK1188完掘状況（南西より） SP1343上部出土状況	図版60 SK1039出土遺物（2） 図版61 SK1039出土遺物（3） SK1045出土遺物
図版35	SP1609掘り下げ状況（南より） SP1762完掘状況	SK1049出土遺物 SK1178柱穴遺物 土壤・土坑出土遺物（弥生時代）（1）
図版36	SR2001（第10調査区）掘り下げ状況（西より）	図版63 土壤・土坑出土遺物（弥生時代）（2） 図版64 土壤・土坑出土遺物（弥生時代）（3） 柱穴・小穴出土遺物（弥生時代）
		図版65 SR2001出土遺物

図版66 遺物包含層出土遺物（弥生時代）（1）	図版70 遺物包含層出土遺物（中世）（2）
図版67 遺物包含層出土遺物（弥生時代）（2）	図版71 桜ノ岡遺跡（III）調査前状況（北より）
図版68 中世遺構出土遺物（1）	桜ノ岡遺跡（III）土層堆積状況
図版69 中世遺構出土遺物（2）	図版72 桜ノ岡遺跡（III）遠景（西より）
遺物包含層出土遺物（中世）（1）	桜ノ岡遺跡（III）出土遺物

写真目次

写真1 現地説明会風景	10	写真3 桜ノ岡遺跡（I）作業風景	12
写真2 アドバルーン撮影	11	写真4 桜ノ岡遺跡（III）作業風景	13

III-A-4 挿図・表・図版

図1 SK1008平・断面図および試料採取位置	219	表2 リン分析結果	223
図2 SK1016平・断面図および試料採取位置	220	表3 桜ノ岡遺跡（I）出土炭化材同定結果	225
図3 SK1039平・断面図および試料採取位置	221	図版1 桜ノ岡遺跡（I）炭化材（1）	229
表1 分析試料の一覧	222	図版2 桜ノ岡遺跡（I）炭化材（2）	230

付図

付図1 遺構図（第5調査区）	付図4 遺構図（第11調査区）
付図2 遺構図（第1・6調査区）	付図5 遺構図（第2・3・7調査区）
付図3 遺構図（第4・10調査区）	付図6 遺構図（第8・9調査区）

I 調査の経緯

1 調査に至る経緯

四国縦貫自動車道は「国土開発幹線自動車道建設法」及び「高速自動車国道法」に基づき、四国4県を連結する幹線道路として計画された。徳島県内では徳島～脇間については昭和48(1973)年10月19日「道路整備特別措置法」に基づき建設大臣から第7次の施行命令が出され(昭和54年3月2日整備計画変更、施行命令)、昭和55年12月19日実施計画の認可、昭和56年1月19日に路線発表がされた。

これは徳島市川内町の徳島I.Cを起点とし、吉野川に並行して西進し、板野郡板野町の沖横平野を横断した後、同郡上板町から阿波郡阿波町にかけて阿讃山麓を通過して脇I.Cを結ぶ、区間延長41.4km、用地取得面積259haに及ぶ事業である。

昭和61年4月24日道路局長通達により、暫定施工に変更され、62年11月6日徳島～脇間の起工式が行われた。昭和63年5月31日には、藍住I.C(追加I.C)の施行命令が出され、6月30日に実施計画が認可されている。

この間、徳島県教育委員会(以下「県教委」という)は昭和60～62年度にかけて脇～板野間、63年度には徳島～板野間の路線に係る分布調査を実施し、埋蔵文化財の実態把握につとめた。これと前後し、分布調査結果を基に県教委と協議を重ねた日本道路公団高松建設局(以下「公団」という)は、昭和63年6月17日、文化庁に脇～板野間に係る58遺跡の取扱いについて協議を申し入れ、平成元年3月30日、工事の施工に先立って発掘調査を実施する旨の協議を終了した。

一方、県教委では供用が第10次5ヵ年計画に取り入れられ、平成5年が目標となっていることを受けて、63年度に大規模開発に即応した調査体制の整備を図り、平成元年4月1日、財團法人徳島県埋蔵文化財センター(以下「センター」という)を発足させ、調査に対応することとした。センター発足当時には未確定であった徳島～板野間の調査については、平成2年1月22日に10遺跡の取扱いについての協議が終了し、路線内に68遺跡、約360,000m²(暫定分約340,000m²)事業地区面積のほぼ13%にあたる文化財対象地が確定した(第1表)。

県と公団との委託契約をふまえ、県とセンターとの委託契約は平成元年6月1日付で締結された。センターでは発掘調査にあたって、機械掘削等工事請負方式と空中写真撮影図化を導入することによって、調査の迅速化に努める方針で臨んだ。しかし、文化財対象地があくまで分布調査に基づくものであり、特に工事請負として設計・発注するためには掘削土量の把握が不可欠であるため、試掘調査を先行し、遺構の遺存状態及び層厚の把握に努めた。ま

た、用地取得状況を勘案しつつ、散布地・集落跡・古墳など、遺跡の性格・遺構の累積数に応じた調査工期について検討を行い、調査を実施した。前述したように、試掘調査を先行することによって層厚・調査範囲を絞り込んだことに加えて、徳島～板野間の沖積平野では現地表下3m以深に遺跡が存在することから、遺物の探査が行われなくとも慎重を期して微高地が調査対象地とされていたこともあり、最終の実掘面積は当初見込みに比べて減少した。

平成元年度には、14遺跡14,500m²、2年度は33遺跡76,390m²、3年度は30遺跡35,748m²、4年度は残件であった14遺跡6,826m²について、用地取得がなされた地区から調査を進め、当該区間の調査を完了した（第1表）。

それぞれの調査の進捗状況については、既刊の『徳島県埋蔵文化財センター年報』を参照されたい。

なお、桜ノ岡遺跡（I）では諸般の事情により、空中写真撮影による図化作業を断念せざるを得なかった。従って、本調査ではすべての実測図が担当職員の手作業となつたが、着手前に設定した工期の相当期間が遺構図・平面図の作成に費やされ、工事請負の調査工程との調整に検討課題を残した。

調査組織及び整理体制は以下の通りである。

事務局長	日下 昭（平成元・2年度）
	佐藤信博（平成3・4年度）
総務課長	吉田 寛（平成元・2年度）
	木内正幸（平成3年度）
	岡本一仁（平成4年度）
主 事	佐藤 韶（平成2～4年度）
研究補助員	扶川道代（平成元～4年度）
調査課長	桑原邦彦（平成元・2年度）
	羽山久男（平成3・4年度）
調整係長	菅原康夫（平成元年度）
	島巡賢二（平成2～4年度）
技 師	森長 進（平成元・2年度技術主任）
	堀江隆治（平成3・4年度）

調査係長 島巡賢二（平成元年度）
菅原康夫（平成2～4年度）

調査担当

桜ノ岡遺跡（I）

第1次調査

研究員 岸本 豊（当時） 湯浅利彦 井上章生（当時）

久保博正（当時） 笠井教光（当時）

研究補助員 赤穂英樹（当時）

第2次調査

研究員 松永住美（当時） 中野健次（当時） 鎌田幸二（当時）

米倉康博（当時）

研究補助員 佐藤誠二 大森秀樹（当時） 十川道雄（当時）

桜ノ岡遺跡（III）

研究員 高岡 裕（当時） 池測 茂（当時）

小泉雅彦（当時） 横畠道彦（当時）

整理担当

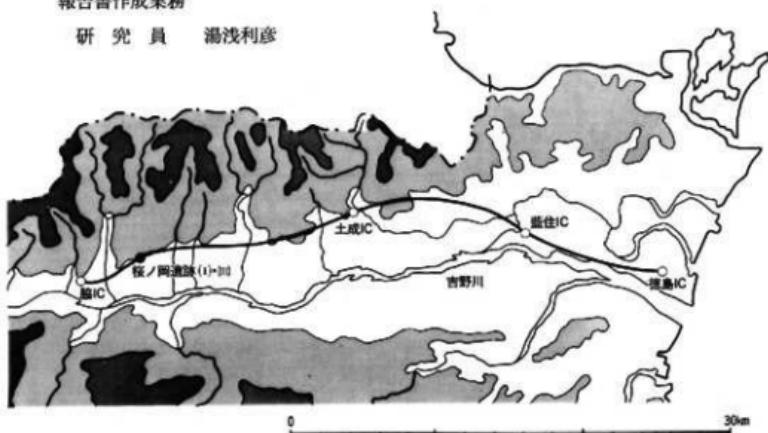
基礎整理

研究員 久保脇美朗 湯浅利彦

研究補助員 桑原千代美（当時）

報告書作成業務

研究員 湯浅利彦



第1図 四国縦貫自動車道（徳島～脇）路線図

第1表 四国縦貫自動車道(徳島~脇間)埋蔵文化財調査地一覧表

番号	遺跡名	所在地	面積 (m ²)				備考
			実測面積	元年度	2年度	3年度	
1	西長峰遺跡	阿波郡阿波町西長峰	170	170			
2	中長峰遺跡	阿波郡阿波町中長峰	100	100			
3	東長峰遺跡	阿波郡阿波町東長峰	30		30		
4	口吉谷遺跡	阿波郡阿波町口吉谷	4,080	1,840	2,240		
5	赤坂遺跡(Ⅰ)	阿波郡阿波町赤坂	800		800		報告書第1集所収
6	赤坂遺跡(Ⅱ)	阿波郡阿波町赤坂	50		50		報告書第1集所収
7	赤坂遺跡(Ⅲ)	阿波郡阿波町赤坂	1,600	600	1,000		報告書第1集所収
8	桜ノ岡遺跡(Ⅰ)	阿波郡阿波町桜ノ岡	8,000	2,690	5,310		本報告書所収
9	桜ノ岡遺跡(Ⅲ)	阿波郡阿波町桜ノ岡	240		240		本報告書所収
10	桜ノ岡~東庄広遺跡	阿波郡阿波町小倉	1,000		1,000		
11	山ノ神遺跡	阿波郡阿波町山ノ神	10		10		
12	山ノ神~八丁原遺跡	阿波郡阿波町山ノ神	30		30		
13	上石来遺跡	阿波郡市場町大保	1,160		900	260	
14	大保山城~大保字佐遺跡	阿波郡市場町大保	250			250	
15	上喜来蛭子~中佐古遺跡	阿波都市場町上喜来	12,560		11,720	840	
16	八坂遺跡(Ⅰ)	阿波都市場町尾開	11			11	
17	八坂遺跡(Ⅱ)	阿波都市場町尾開	360		360		
18	八坂遺跡(Ⅲ)	阿波都市場町尾開	114			83	29
19	八坂遺跡(Ⅳ)	阿波都市場町尾開	2,000		2,000		
20	口吉~金清遺跡	阿波郡市場町尾開	3,100	2,850		250	
21	古田遺跡(Ⅰ)	阿波都市場町切幡	60		60		
22	古田遺跡(Ⅱ)	阿波都市場町切幡	510	510			
23	坤山~觀音遺跡	阿波都市場町切幡	60			60	
24	乾山~觀音遺跡	阿波都市場町切幡	850			850	
25	乾山遺跡	阿波都市場町切幡	2			2	
26	金草~上井遺跡	板野郡土成町油池	2,730	2,730			報告書第1集所収
27	北原~火法寺遺跡	板野郡土成町土成	4,890		4,890		
28	前田遺跡	板野郡土成町土成	10,810		7,710	3,100	報告書第2集所収
29	櫻ヶ丸~芝生遺跡	板野郡土成町吉田	3,550		3,550		
30	北門~涼堂遺跡	板野郡土成町吉田	200			200	
31	広坪~宮ノ下遺跡	板野郡土成町宮川内	60		60		
32	向山古墳群	板野郡土成町宮川内	50			50	
33	轟ヶ丸遺跡	板野郡土成町高尾	1,400		1,400		
34	けやき原~林遺跡	板野郡土成町高尾	210		210		
35	西谷遺跡	板野郡土成町高尾	7,300		5,650	1,650	
36	法教川遺跡(Ⅰ)	板野郡土成町高尾	10		10		
37	十乘寺遺跡	板野郡土成町高尾	430		430		
38	安楽寺谷塗蓋群	板野郡上板町引野	2,140			2,140	
39	栗堤遺跡	板野郡上板町引野	20			20	
40	天神山遺跡	板野郡上板町引野	1,330		1,330		報告書第1集所収
41	青谷遺跡	板野郡上板町引野	3,980		3,110	870	報告書第1集所収
42	明神池古墳群	板野郡上板町引野	194		80	114	

遺跡番号	遺跡名	所在地	面積 (m ²)					備考
			実測面積	元年度	2年度	3年度	4年度	
43	柿谷遺跡	板野郡上板町泉谷	8,930		3,280	5,650		
44	新池遺跡	板野郡上板町泉谷	31			31		
45	神宮寺遺跡	板野郡上板町神宅	15,649			11,507	4,142	
46	菖蒲谷西山A遺跡	板野郡上板町神宅	460		130	330		
47	菖蒲谷西山B遺跡	板野郡上板町神宅	1,980			1,730	250	
48	菖蒲谷東山古墳群	板野郡上板町神宅	115			115		
49	山田古墳群A	板野郡上板町神宅	2,200			2,200		
50	山田古墳	板野郡上板町神宅	8			8		
51	山田古墳B	板野郡上板町神宅	775			525	250	
52	大谷古墳群	板野郡上板町神宅	30				30	
53	大谷薦闈遺跡	板野郡上板町神宅	180		180			
54	祝谷古墳	板野郡上板町神宅	90				90	
55	聖天山遺跡	板野郡上板町神宅	115				115	
56	黒谷窯跡	板野郡板野町黒谷	91				91	
57	松谷遺跡	板野郡板野町松谷	900		40	860		
58	蓮華谷古墳群(Ⅰ)	板野郡板野町大伏	353			65	288	
59	蓮華池遺跡(Ⅰ)	板野郡板野町大伏	340		340			
60	蓮華谷古墳群(Ⅱ)	板野郡板野町大伏	1,220		1,220			
61	蓮華池遺跡(Ⅱ)	板野郡板野町大伏	40	40				
62	黒谷川宮ノ前遺跡	板野郡板野町大伏	10,580	130	10,450			
63	古城遺跡	板野郡板野町古城	10,000	240	8,920		840	
64	西中富遺跡(Ⅰ)	板野郡板野町西中富	975			975		
65	西中富遺跡(Ⅱ)	板野郡板野町西中富	125			125		
66	東中富遺跡	板野郡齒住町東中富	760			560	210	
67	前須遺跡	板野郡齒住町德命	876			625	251	
68	新居須遺跡	板野郡齒住町德命	190				190	
計			133,464					

2 調査の経過

(1) 調査の経過

① 桜ノ岡遺跡（I）

昭和61（1986）年度の精密分布調査によって、弥生土器片・石器等を採集し、その密度から、かなり高い確率で遺跡の存在が予想された。発掘予定面積は8,000m²であった（第2図）。

平成元（1989）年度は1次調査として2,690m²の調査を行った。12月中旬、まず試掘で層厚を確認し、調査を進めた。3月初旬には、集石土壙を中心とした現地説明会の開催、アドバルーンを使った垂直写真の撮影を行い、3月24日すべての調査を完了した。

平成2（1990）年度は2次調査として5,310m²の調査が行われた。赤坂遺跡（I）～（III）の調査を併せて受け持ったので、赤坂遺跡（I）完了後の7月2日に着手したが、9月16日には一時中断し、赤坂遺跡（II）・（III）の調査に移行、11月2日再開、12月26日まで調査した後、家屋の移転を持って翌1月21日から3月1日まで、再び家屋の移転を待って3月12日から3月26日まで調査を行い、終了した。

② 桜ノ岡遺跡（III）

桜ノ岡遺跡（I）と同じく、昭和61（1986）年度の精密分布調査によって遺跡の存在の可能性が指摘された。

調査期間は平成2（1990）年1月30日～2月14日で実働10日間、発掘調査面積は240m²である。地形測量を先行し、発掘はF字状のトレンチを設定して行った（第2図）。

なお、桜ノ岡遺跡（I）と桜ノ岡遺跡（III）の間の段丘上で遺跡の存在が予想され、桜ノ岡遺跡（II）としたが、予想された地点は路線からはずれており、調査には至っていない。

(2) 発掘調査の方法

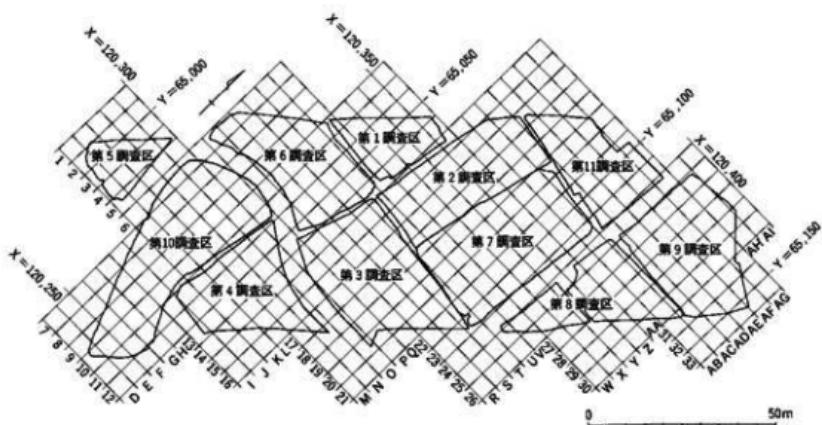
① 桜ノ岡遺跡（I）

調査区割りについては、発掘調査統一基準に従い、第IV系国土座標を基準とし、5m方眼を組み、それを最小の単位（グリッド）とした。グリッド名は、遺跡の推定範囲を包み込む南西隅から北にA、B、……Z、AA、…AIまで、東に1、2、……33の順に記号をふり、その組み合わせで表現するように設定した（第3図）。

また、便宜上調査地のまとまりを調査区として、第11調査区まで設定した。第1次調査時に、まず第1～4調査区を、第2次調査開始前に西から第5～9調査区を設定した。第10・



第2図 調査地位置図



第3図 桜ノ岡遺跡（I）調査区割・調査区配置図

11調査区は、調査中に用地が取得された部分である。

遺構記号・遺構番号は検出時に決定し、掘削後確実性に乏しいと判断されたものは欠番とした。これは遺構記号・遺構番号の変更による混乱を避ける目的であり、整理段階でいくつかの記号・番号変更を行っているが、変更は最小限にとどめることを旨とした。したがって、遺構番号の最大値が遺構数を表すものではない。遺構番号の連続性に関わる調査順は、1、2、3東半、4、3西半、8、7、6、9、5、10北半、11西半、10南半、11東半の順である。

試掘は、層位・層厚の確認であるが、遺物包含層上面で止め、遺物包含層の厚みは人力で確かめ、包含層の残りの悪い部分では遺構面下の確認を行うことを原則とした。2m×5mを基本とし、1次調査では各調査区の縁辺部で24カ所、2次調査は32カ所の試掘を行った。

包含層の掘り下げに際しては、遺物を1次調査はグリッドごとにとりあげ、2次調査は調査区ごとでとりあげた。時期の違う遺構群を検出しているが、遺構面は地山上面で一括して捉えた。なお、包含層で旧石器が出土したので、最終確認のため、1次調査は各調査区遺構等の調査終了段階で地山の堆積状況の良好な部分にトレンチをいた。2次調査では、調査と並行して調査区縁辺部にトレンチをいれ、または果樹の壕掘りを利用して確認した。遺構面下に旧石器時代の包含層は認められなかった。

② 桜ノ岡遺跡（III）

調査区割りについては、桜ノ岡遺跡（I）と同様、第IV系国土座標を基準とし、5mグリ

ドの記号も調査地を包み込む南西隅を基準にし、北にアルファベット、東に数字で表示した。

調査区の設定に際しては、当初、古墳、中世山城等の可能性があったため、南北に張り出す尾根に平行かつF字状に設定した。そして、地形測量を行い、掘削は地山面まで、場所によって小トレンチで下層の確認を行った。

(3) 調査日誌抄

① 桜ノ岡遺跡（I）1次調査

1989年

12. 11 第1～3調査区、試掘調査開始。
12. 14 試掘完了。
12. 18 第2調査区、機械掘削開始。
12. 21 第2調査区、人力掘削開始。
12. 22 機械掘削、第1調査区に移動。
12. 26 第1調査区、機械掘削完了。第2調査区、遺構検出開始。

1990年

1. 5 第2調査区、人力掘削・遺構検出続行。
1. 11 第1調査区、人力掘削開始。
1. 12 第4調査区、試掘調査。第1調査区遺構検出開始。第2調査区人力掘削完了。
1. 18 第2調査区、SK1016実測開始。第4調査区、機械掘削。
1. 19 第3調査区東半、機械掘削開始。
1. 22 第1調査区、人力掘削完了。集石土壙の検出・実測図作成開始。
1. 23 第3調査区、機械掘削完了。第4調査区に移る。第2調査区は遺構検出完了。

1. 24 第3調査区、人力掘削開始。
1. 25 第1調査区遺構検出完了。第4調査区、機械掘削完了。
2. 1 第3調査区、人力掘削完了、遺構検出開始。
2. 2 第1・2調査区、検出全景写真撮影。
2. 5 第1・2調査区、遺構掘り下げ開始。SK1016は平面固完了。
2. 13 第1・2調査区、小遺構の掘り下げ完了。
2. 14 第4調査区、人力掘削開始。
2. 20 第3調査区、遺構検出完了、検出全景写真撮影、遺構掘り下げ開始。
2. 24 SK1008・1016・1049の集石土壙の実測・土壤分析資料の採取等。
2. 28 第1～3調査区、遺構実測図作成続行。



写真1 現地説明会風景



写真2 アドバルーン撮影

- 3. 3 現地説明会。雨の中、参加者約80名。
- 3. 4 アドバルーンによる全景写真撮影実施。
- 3. 5 各調査区、実測図急ピッチで作成。第3調査区では、断ち割り設定、掘り下げ開始。
- 3. 6 第1調査区でも断ち割り開始。第3調査区東半の断ち割り作業完了。西半の機械掘削開始。SK1039を残して、東半の埋め戻し。
- 3. 7 第4調査区、流路部分掘り下げ完了。全景写真撮影。第2調査区、SB1001完掘。
- 3. 12 第3調査区西半の人力掘削完了。遺構検出完了。第2調査区も断ち割り作業開始。
- 3. 13 第4調査区も、断ち割り開始。第1調査区は調査終了。
- 3. 16 第2・4調査区の断ち割り作業も完了。埋め戻し作業開始。SK1039は調査続行。
- 3. 19 主な物品・出土遺物は収取。
- 3. 22 SK1039調査完了。埋め戻し、完了写真撮影。

② 桜ノ岡遺跡（1）2次調査

1990年

- 6. 18 第6・7調査区、耕作土の機械掘削開始。
- 6. 20 第5・6調査区、耕作土の掘削・除去。
- 6. 25 第7・8調査区、機械掘削。
- 6. 26 第7調査区、機械掘削完了。
- 6. 29 発掘調査資材搬入。
- 7. 2 全員赤坂遺跡から移動、本格着手。
- 7. 3 第8調査区南半、人力掘削開始。
- 7. 6 第8調査区南半、遺構検出完了。同区北半包含層掘り下げ開始。
- 7. 11 第7調査区も並行して包含層の掘削開始。
- 7. 12 第8調査区北半、遺構検出完了。
- 7. 17 第7調査区、包含層掘り下げ完了して、遺構検出開始。
- 7. 18 第8調査区、遺構掘り下げ開始。
- 7. 24 第7調査区、包含層掘り下げ完了。第6調査区、人力掘削にかかる。
- 7. 25 第7調査区、遺構検出完了。第8調査区、遺構半掘完了。
- 7. 26 第7調査区、遺構半掘開始。
- 7. 30 第6調査区、包含層・サブトレンチ掘削完了。
- 7. 31 第8調査区、遺構断面図終了。遺構完掘開始。
- 8. 3 第8調査区、遺構完掘終了。写真撮影、平面図作成開始。
- 8. 7 第8調査区南側、サブトレンチ掘り下げ。
- 8. 20 第7調査区、遺構断面図完了。第9調査区、試掘、Na17~24トレンチ。

8. 21 第9調査区、機械掘削開始。
8. 24 第9調査区、機械掘削完了。
8. 27 第9調査区、包含層掘り下げ開始。
8. 29 第6調査区、遺構検出開始。
9. 3 第7調査区、遺構掘り下げ、ほぼ完了。
9. 4 第6調査区、遺構検出完了。第7調査区、遺構内土器とりあげ、平面図等続行。
9. 7 第9調査区、包含層掘り下げ完了。
9. 10 第9調査区、遺構検出開始。第8調査区サブトレンチ掘削。
9. 11 第8調査区、サブトレンチ完了。第9調査区、遺構検出、サブトレンチ掘削開始。第7調査区、土器溜りの平断面図作成続行。
9. 13 第9調査区、遺構検出完了。
9. 14 第9調査区、サブトレンチ掘削完了。遺構半掘開始。
9. 17 台風対策、写真用足場等の補強・解体。
9. 20 台風被害の報告。写真用足場一部崩壊。本日より赤坂遺跡（II）の試掘に入る。しばらく休止。
11. 2 再開。資材運搬、台風による崩壊箇所・流れ込んだ土の除去。
11. 5 第9調査区、遺構掘り下げ開始。
11. 6 第9調査区、サブトレンチ掘り下げ再開。遺構掘り下げも続行。
11. 8 第9調査区、サブトレンチ掘り下げ完了。第6調査区、清掃。
11. 9 第6調査区、遺構半掘開始。第5調査区、人力掘削開始。
11. 13 第7調査区、清掃。
11. 15 航空写真撮影、全景斜め写真のみ。
- 第5調査区、人力掘削完了。
11. 16 第5調査区、遺構検出開始。第7調査区、断ち割り掘削開始。
11. 19 第5調査区、遺構検出完了。第7調査区、断ち割り完了。第9調査区、遺構断ち割り開始。
11. 20 第9調査区、土器溜り遺構実測図作成中。
11. 22 第5・6調査区、遺構半掘完了。
11. 26 第6調査区遺構完掘完了。
11. 29 第5調査区、遺構完掘完了。台風対策。
12. 3 第6調査区、遺構断ち割り開始。
12. 5 第9調査区、調査完了。第7調査区、SK1061実測図作成。第5調査区、平面図完了。
12. 6 第5調査区、遺構断ち割り、サブトレンチ掘り下げ開始。
12. 12 第7調査区、SB1008検出。



写真3 桜ノ岡遺跡（I）作業風景

12. 17 第7調査区、断ち割り完了。埋め戻し開始。
12. 20 第5調査区、掘り下げ完了。第6～9調査区、埋め戻し完了。
- 1991年
1. 21 家屋の撤去完了により、調査再開。基準杭打設等。

1. 23 第10調査区は2分割調査、北半を機械掘削。
 1. 24 第10調査区北半、人力掘削開始。
 1. 29 第10調査区北半、包含層掘り下げ完了。
 遺構半掘および断面図終了のものから完掘開始。
 2. 1 第10調査区北半、遺構完掘完了。
 2. 5 第11調査区も2分割調査。西半を機械掘削。
 2. 6 第11調査区西半、包含層掘り下げ完了。
 2. 7 第11調査区西半、遺構検出開始。
 2. 8 第11調査区西半、遺構検出完了、掘り下げ開始。
 2. 13 第10調査区南半、機械掘削開始。
 2. 14 第10調査区南半、機械掘削完了。
 2. 15 第11調査区西半、遺構半掘完了。土層断面図の完了したものから、完掘にはいる。
 2. 18 第10調査区南半、包含層掘り下げ開始。
 2. 19 第11調査区西半、遺構掘り下げ完了。
 2. 21 第10調査区南半、包含層掘り下げ完了。
 遺構検出開始。第11調査区西半、平面図完了、サブレンチ掘り下げ開始。
 2. 25 第10調査区南半、遺構検出完了。
 2. 26 第10調査区南半、遺構掘り下げ開始。
 2. 27 第10調査区南半、遺構掘り下げ完了。
 第11調査区西半、サブレンチ掘り下げ完了。
 2. 28 第10調査区南半、平面図等完了、サブレンチ掘り下げ開始。
3. 1 第10調査区南半、サブレンチ終了。
 家屋移転等の関係から、しばらく中断。
 3. 12 作業再開、第11調査区東半、機械掘削、人力掘削も開始。
 3. 14 第11調査区東半、遺構検出開始。
 3. 15 第11調査区東半、包含層掘り下げ完了。遺構検出も完了し、半掘開始。
 3. 20 第11調査区東半、遺構完掘完了。
 3. 22 第10調査区、埋め戻し開始。
 3. 23 第11調査区実測を進めながら、サブレンチ掘り下げ。第10調査区埋め戻し完了。
 3. 25 第11調査区東半、調査完了。
 3. 26 埋め戻し完了。現場撤収。

③ 桜ノ岡遺跡（III）

1990年



写真4 桜ノ岡遺跡（III）作業風景

1. 30 地形測量開始。
 2. 2 調査前状況写真。
 2. 5 地形測量続行。伐操作業。
 2. 6 人力掘削開始。
 2. 9 調査区精査。
 2. 13 精査。完掘状況写真撮影。
 2. 14 土層断面図作成。調査完了。

II 遺跡の立地と環境

1 地理的環境

桜ノ岡遺跡（I）は、徳島県の北部、阿波郡阿波町字桜ノ岡91-2他に、桜ノ岡遺跡（III）は、同134-3に所在する。いずれも字名をとって遺跡名としている。「桜ノ岡遺跡」の名称は旧石器の散布地として以前から呼称されている地点が別にある⁽¹⁾。

石鎚山系に端を発し、四国山地を横切った後、中央構造線に添って東流する吉野川は、楔状に広がる徳島平野を形成する。徳島県内では、吉野川の上・中・下流は東流以降の各地域を指しているが、中流の岩津地峡以西は幅2kmほどの谷底平野、以東は楔状に広がる沖積平野となる。吉野川には、北側に連なる1,000m級の阿讚山脈と、南側に連なる1,500m級の四国山地から合流する渓谷がある。阿讚山脈は和泉層群の隆起山地で、南流する各河川が扇状地形を発達させる。当地の長峰面などと呼ばれる段丘も、横谷である曾江谷川等の形成した扇状地が隆起し、吉野川の流れの変化が段丘を形成し、さらに小河川の開析作用によって、南北に細長く寸断されている。この段丘面上に、遺跡が立地する。

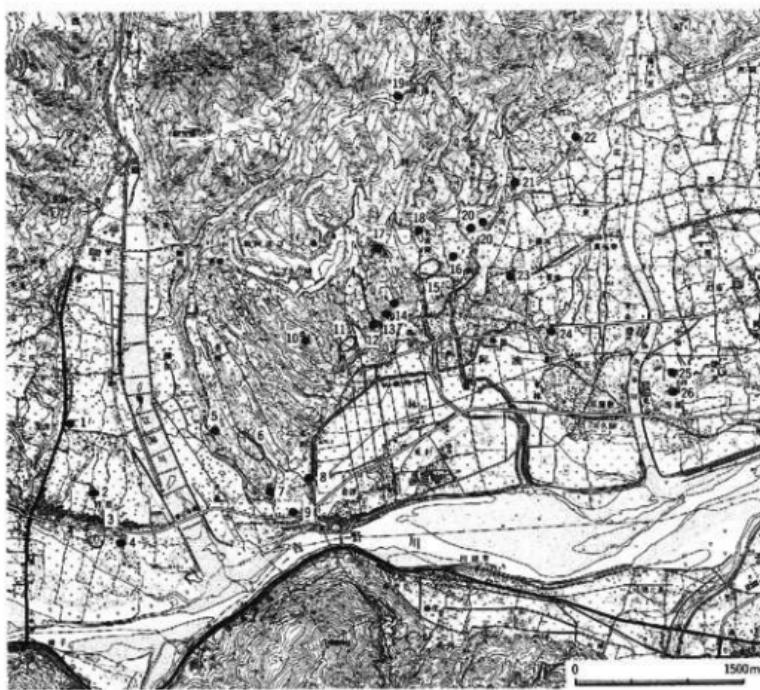
地質的には、四国山地北半の三波川変成帯と和泉層群の接する中央構造線が地下深く存在し、阿讚山脈南麓に父尾断層と土柱断層が東西にはしる。基盤層は岩津、切戸付近で結晶片岩が露出、父尾断層以北の和泉層群との間には吉野川本流性の結晶片岩・砂岩の円錐を同時に含む切戸疊層があり、その上に結晶片岩を含まない扇状地性の馬場疊層、さらに砂岩・泥岩重角疊を主体とする土柱疊層が被る。土柱疊層中には、砂・シルトの多い部分があり、遺構面を形成する。

気候は温暖な徳島県内で中位に属し、年平均気温16度前後、降雨量は県内では最も少ない年間1,500mm以下の中位に属する。植生は山麓地域ではアラカシなど常緑広葉樹、エノキなど落葉樹からなる暖帯林が多い。

交通路としては、吉野川を利用した水運、それに沿う東西の道があげられる。香川県との交流は、曾江谷川沿いに発り、清水越から、左にとって香東川沿いを下り高松平野西部に通ずる道と、右にとって、さらに時を越え鴨部川に沿って高松平野東部に通ずる道など幾本かの瀬戸内への道がある。近年には、旧石器の道として、尾根沿いの道の存在も指摘されている⁽²⁾。

2 歴史的環境

この地域は、まず旧石器時代の遺物散布の集中地域として知られている。桜ノ岡遺跡（I）



- | | | | | |
|----------|-----------|---------------|----------------|-------------------|
| 1. 北原古墳 | 6. 内長峰遺跡 | 11. 日吉谷遺跡 | 16. 桜ノ岡遺跡(III) | 21. 桜ノ岡古墳 |
| 2. 中坪原古墳 | 7. 北岡西古墳 | 12. 赤坂東遺跡(I) | 17. 赤坂東遺跡 | 22. 正広古墳 |
| 3. 拝原遺跡 | 8. 北岡東古墳 | 13. 赤坂遺跡(II) | 18. 名東岡遺跡 | 23. 吉野川北岸用水路関係調査地 |
| 4. 東坪原古墳 | 9. 西林古墳 | 14. 赤坂遺跡(III) | 19. 稲ヶ窪遺跡 | 24. 医王寺遺跡 |
| 5. 長峰古墳 | 10. 長峰東遺跡 | 15. 桜ノ岡遺跡(I) | 20. 桜ノ岡遺跡 | 25. 天王坂遺跡 |
| | | | | 26. 西原瓦窯 |

第4図 周辺の遺跡分布図

の周辺では、長峰東遺跡・赤坂東遺跡・名東岡遺跡・桜ノ岡遺跡・稲ヶ窪遺跡等が知られている⁽³⁾。また、四国縦貫自動車道の建設に伴う調査で明らかになった日吉谷遺跡で旧石器のブロックが県内で初めて検出された⁽⁴⁾。他にも医王寺・天王坂各遺跡で数点の旧石器が採集されている⁽⁵⁾。

縄文時代の遺物はこれまでこの地域ではほとんど知られていなかったが、西長峰遺跡で中期の土器がわずかではあるが出土している。

弥生時代については、四国縦貫自動車道・長峰工業団地関連の調査で大きな成果があがっている。中期中葉を中心とする桜ノ岡遺跡(I)をはじめ、中期前葉を中心とする日吉谷遺跡⁽⁶⁾、中期後半に営まれた西長峰遺跡⁽⁷⁾、中期末から後期初頭の赤坂遺跡(I)・(III)⁽⁸⁾

がそれである。これ以前は、この地域での発掘調査の経験は極めて少ないが、1982年、吉野川北岸農業水利事業に伴う発掘調査が、徳島県教育委員会によって字十善地で行われている。調査資料は未整理であるが、土壙・柱穴・住居跡などが検出され、弥生中期とみられる土器や、石鎚・磨製石斧・環状石斧などが出土している⁽³⁾。

また、弥生時代の祭器である銅鐸が阿波町東部久勝地区において1880年前後に出土したと伝える記事が2説ある⁽⁴⁾。銅鐸そのものは出土直後に行方不明になっているので、2個相前後して出土したものか、1個が異なって伝えられたものか不明である。曾江谷川右岸、脇町においても江原小銅鐸・伝脇町銅鐸が伝えられている⁽⁵⁾。また、銅鐸の鋳型の出土が近畿地方でみられるが、東大阪市・鬼虎川遺跡の石鋳型の原材については、脇町江原あるいは土成町宮川内の砂岩が最も近いという説もある⁽⁶⁾。

古墳時代には、長峰台地先端部に北岡東・西古墳⁽⁷⁾、長峰古墳⁽⁸⁾、西林古墳⁽⁹⁾が、東方の阿讃山麓に正広古墳⁽¹⁰⁾と桜ノ岡古墳⁽¹¹⁾が、曾江谷川下流の低平地に構築された北原古墳、中押原古墳、東押原古墳の押原古墳群が知られている。いずれも後期の構築とみられている。特に、北岡東・西古墳は「段の塚穴型」とグルーピングされる石室の構築法をとる東端の古墳であり、正広古墳は「忌部山型」石室をとる⁽¹²⁾。これは、背景となる造営氏族の違いを示すと捉えられており、領域等の検討に重要と考えられている。

また、押原古墳群に隣接する押原遺跡⁽¹³⁾では、弥生中期以降の遺構・遺物が出土しているが、6世紀後半の竪穴住居跡等が検出され、古墳群との関係が注目される。

古代の遺跡として、白鳳期～平安期の西原瓦窯⁽¹⁴⁾、奈良～平安前期にかけての西ノ岡の須恵器窯跡が知られている。

律令制時代に押師郷といわれたものが、鎌倉初期に東押師庄・西押師庄と分かれて成立したと考えられている。東西両庄の境は不明であるが、西押師庄の西限は、曾江谷川右岸に及んでいたとされる。字馬場の付近に、西林城跡の伝承がいくつもあるが、実態は不明である。桜ノ岡遺跡（I）のある段丘南端下に西福寺があり、長宗我部軍の兵火にかかった伝承を持っている。

参考文献

- 阿波町史編纂委員会『阿波町史』阿波町 1979
天羽利夫・岡山真知子『徳島市民双書19 徳島の遺跡散歩』徳島市立図書館 1985
菅原旗夫『日本の古代遺跡37 徳島』保育社 1988

注

（1） 天羽利夫「徳島県の遺跡」「日本の旧石器文化3」雄山閣 1976

- (2) 細川一徳「徳島県土柱周辺の旧石器」「旧石器考古学」39 1989
- (3) 前掲(1)、(2)
川井豊吉・高橋正則「阿波郡櫛ヶ窪遺跡出土の旧石器」「徳島考古」創刊号 1983
- (4) 財団法人徳島県埋蔵文化財センター「日吉谷遺跡」「徳島県埋蔵文化財センター年報 Vol.1」
1990
- (5) 前掲(1)
- (6) 前掲(4)
財団法人徳島県埋蔵文化財センター「日吉谷遺跡」「徳島県埋蔵文化財センター年報 Vol.2」
1991
- (7) 徳島県教育委員会「西長峰遺跡現地説明会資料」1990
徳島県教育委員会「掘ったでよ阿波」1991
徳島県教育委員会「掘ったでよ阿波」1992
- (8) 財団法人徳島県埋蔵文化財センター「赤坂遺跡(Ⅰ)・(Ⅱ)・(Ⅲ)」「四国縦貫自動車道建設
に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書」1993
- (9) 徳島県教育委員会「吉野川北岸農業水利事業に伴う埋蔵文化財調査実績報告書」1982
- (10) 「久勝町誌」(久勝町誌編纂委員会1952)によると、久千田山王で明治15(1882)年頃道路
改修の際、長さ一尺三寸位の銅鐸らしきものが出土したが、卯壳りの手にわたり行方不明とさ
れる。また、「銅鐸の研究」(梅原末治1927)によると、徳島市の森敬介の話として、久千田小
学校東南の石塚を発掘して見つかったとし、明治12、3(1879、1880)年頃としている。高さ
は一尺位で、壳抜されたとしている。
- (11) 佐原真・春成秀爾「銅鐸出土土地名表」「考古学ジャーナル」210 1982
- (12) 東大阪市文化財協会「鬼虎川の銅鐸鉄型」1981
- (13) 天羽利夫「徳島県下における横穴式石室の一様相—その2—」「徳島県博物館紀要」第8集
1977
- (14) 小林勝美「阿波町埋蔵文化財調査報告書」阿波町教育委員会 1978
- (15) 天羽利夫「徳島県下における横穴式石室の一様相」「徳島県博物館紀要」4 1972
天羽利夫「阿波忌部の考古学的研究」「徳島県博物館紀要」9 1977
前掲(13)
- (16) 徳島県教育委員会「押原遺跡現地説明会資料」1987
徳島県教育委員会「掘ったでよ阿波」1988
- (17) 徳島県博物館「阿波の古代寺院」1974

III 調査成果

A 桜ノ岡遺跡（I）

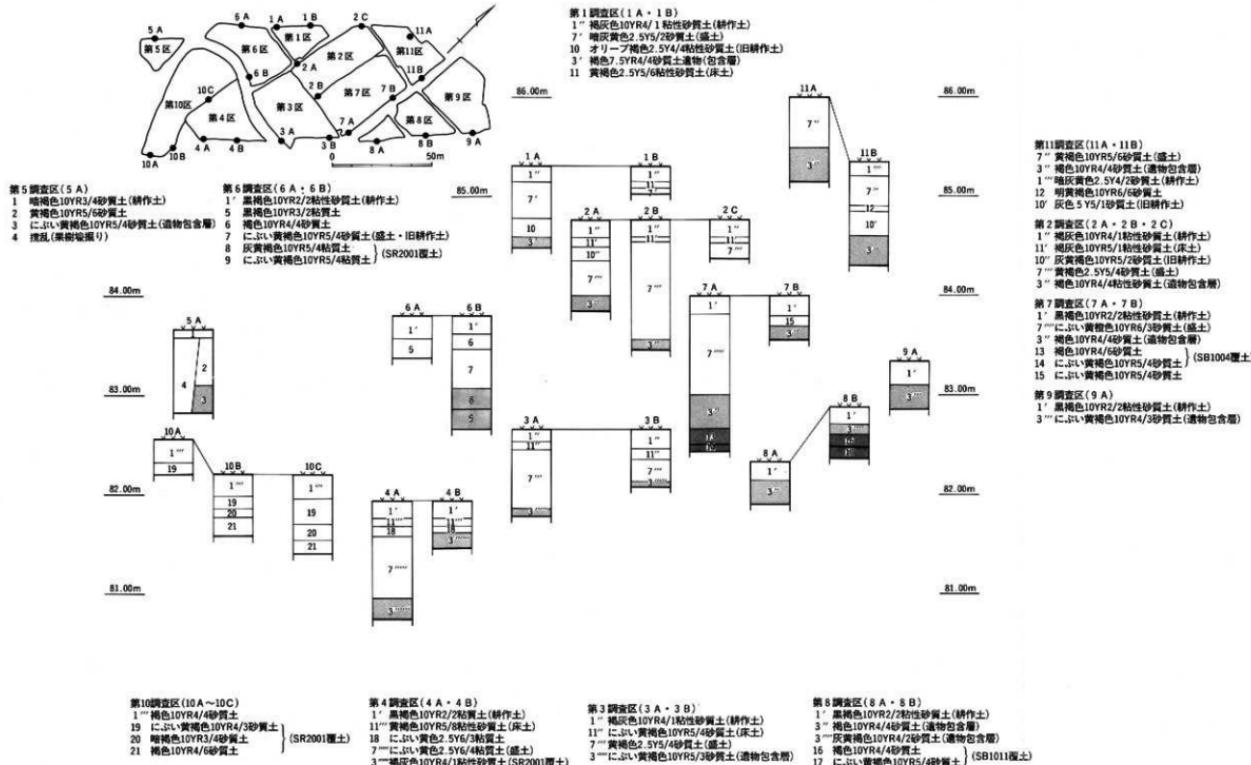
1 基本層序

桜ノ岡遺跡（I）は、西側の五明谷川、東側のたちばな谷に挟まれた、東西幅は約240m、北西から南東に延びる、長さ約650mの段丘面支脈の中程に位置する。調査区内の現地表面の標高は82m～86mを測る。調査前の土地利用は、水田（第1～4・6～8調査区）・水田を改変した果樹園（第5・8・9調査区）・家屋（第10・11調査区）である。明治時代の地籍図をみると、地割りについては現在とほとんど同じで、緩やかな傾斜地を桑園や畑作地に利用していた。耕地整理を行ったのは、1966（昭和41）年で、基本的に各筆とも北西部をブルドーザーを使って削平し、南東側に盛土をして水平面を創出して活用している。その影響が層位にそのまま表れている。

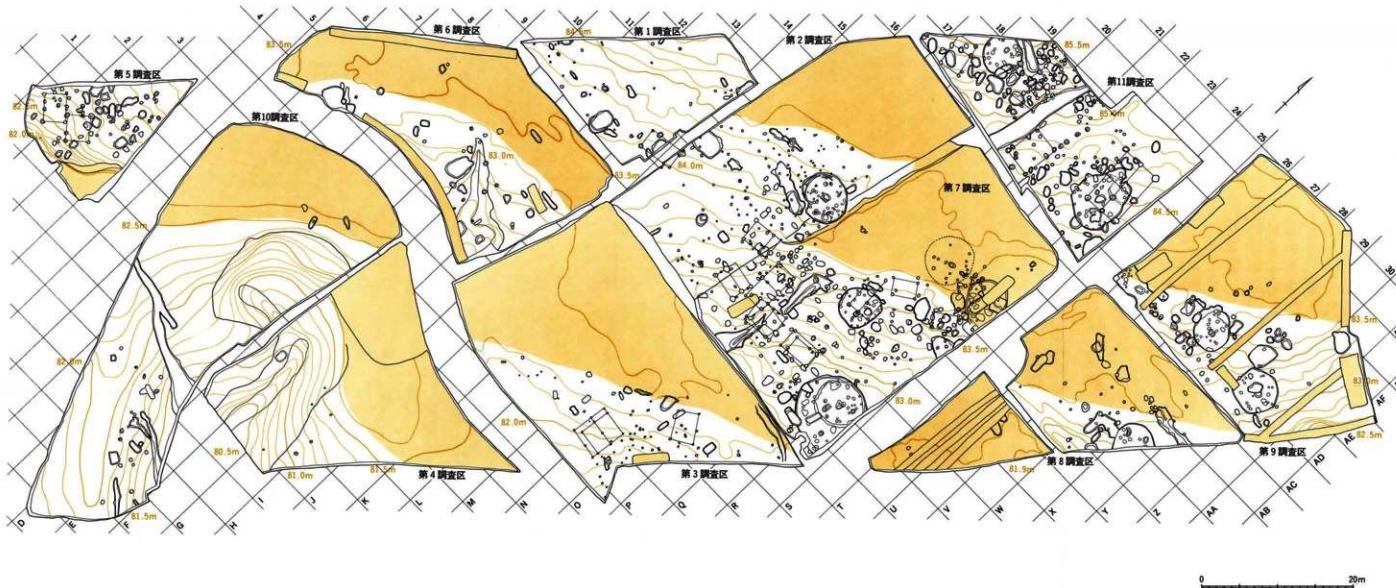
遺構面・遺物包含層の残存箇所では、基本的に表土（耕作土）・床土・盛土・遺物包含層・地山の順になっている。また、遺構面の削平箇所は、表土下が床土・盛土・削平された地山の順で、発掘調査区内で約4割を占めている。いずれの場合も比較的単純な堆積状況を示している。遺構面の地山は明黄褐色10YR7/6、ないしはにぶい黄橙色10YR6/3系統の色調を示すことが多い。遺構面上は、弥生時代の遺構と、中世（12～16世紀）の遺構が混在して検出された（第5・6図）。

遺物包含層は、吉野川北岸地域の扇状地では明瞭に残る例が少ないが、本遺跡では、褐色10YR4/4を中心とする色調で、やや粘性のある砂質土が、遺物包含層として、層厚10～30cm存在する。遺物は、旧石器時代・縄文時代・弥生時代・中世の遺物が混在するが、弥生時代の遺物が中心で、中世のものがそれに次ぐ。旧石器時代や縄文時代のものは分量も少なく、混入と考えられる程度のものである。そのことは、遺構面の断ち割り調査で確認された。

各調査区の土壤は、いずれも阿讚山麓の扇状地に特有の、やや粘性のある砂質土で、砂岩角円礫を含んでいる。ただし、第4・10調査区は他の調査区の状況と異なって、粘質土が堆積している。この調査区は北西隅に、耕地整理前まで使用されていた11m×14mの池跡が認められるが、粘性の土質を利用したことと、弥生時代には流路であったとみられることなどから、かつての水源が存在した可能性を示すと考えられる。しかし、中世にはこの付近に遺構があり、水源による開析作用よりも堆積作用が強かったことが推定できる。この流路跡の末端約200mの間は細長い湿地として利用されているが、その先は10m以上深く切れ込んだ開



第5図 桜ノ岡遺跡(1)基本土層図



(網目部分は遺構面が削平を受けている箇所)

第6図 桜ノ岡遺跡(1)遺構配図

析谷となっている。

2 遺構と遺物

検出された遺構は総数977遺構である（第6図）。内訳は竪穴住居跡11軒、掘立柱建物跡21棟、溝14条、土塙・土坑187基（集石土塙・土坑10基を含む）、柱穴・ピット740基、自然流路1条、不明遺構3基である。弥生時代・中世の遺構が同一遺構面で混在するが、時期の判明するものについては、各時代の項目で概説すると共に、遺構一覧表で略述した（第2～6表）。

西から調査区ごとに概観すると、第5調査区は掘立柱建物跡2棟をはじめ、土坑・ピットがかなりの密度で検出されているが、この調査区は他の地区に較べて極端に遺物の出土が少なく（弥生土器片18点）、遺構内からの遺物も、土坑（SK1139）から弥生土器片とサヌカイト片が各1点出土しているだけである。

第10調査区は自然流路跡、溝、土坑、小穴等が検出されているが、ここも時期の特定できる遺構は少ない。

第4調査区は、自然流路の中心であるが、流路の埋まつた後に、中世の遺構が少數ながら検出されている。北半および東半はそれぞれ、池と耕地整理で削平を受けている。

第6調査区は北半が大きく削平を受け、出土遺物・遺構とも少ない。南隅に、自然流路が検出され、流路埋没後の遺構が存在する。

第1調査区はほとんど削平を受けていない。集石土塙4基を中心に、弥生時代・中世の遺構が分布しているが、密度はそれほど高くない。

第2・7調査区は、遺物の出土量・遺構数とともに本遺跡の中で中心的位置を占める。両調査区とも、北西側3分の1程度の面積が削平を受けているが、弥生時代・中世ともに遺構密度は高い。

第11調査区は、削平箇所がほとんどみられず、遺構密度も高く、第2・7調査区に次ぐ遺物の出土量がある。

第3調査区も、中心部分の続きであろうが、削平面積が約5分の3を占める。遺構は中世のものが多い。

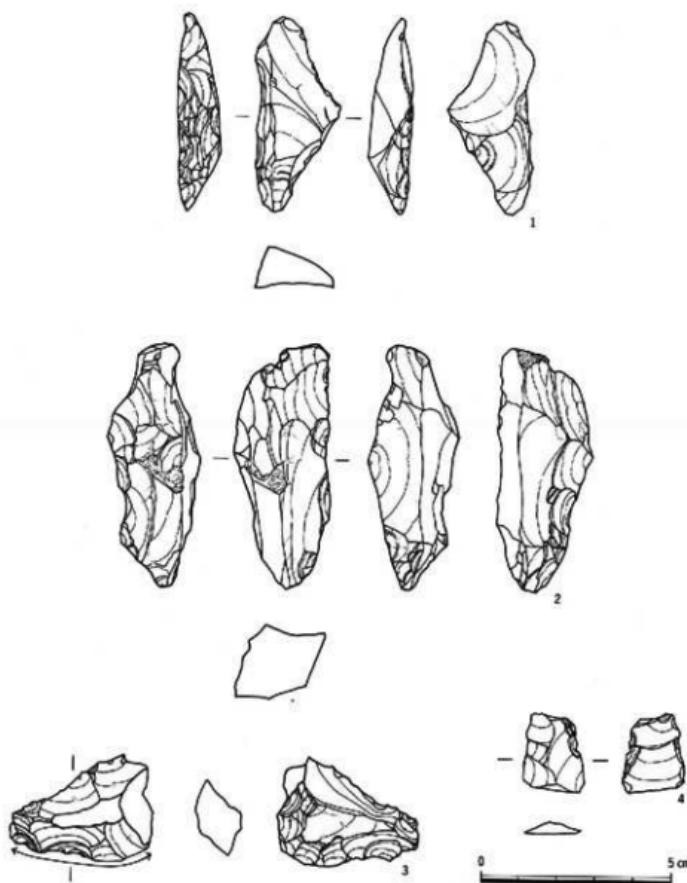
第8調査区は、削平箇所の方が大きく、遺構の残存程度もよくないが、弥生時代・中世のものがそれぞれ分布している。

第9調査区は約半分が削平されているが、遺構面の残っている部分では、弥生時代のものを中心に遺構密度は比較的高い。

(1) 旧石器・縄文時代

① 遺構に伴わない遺物 (第7・8図)

周辺は長峰東遺跡・名東岡遺跡など旧石器時代の遺物散布地として知られているが、本遺跡でも遺物包含層から4点出土している。

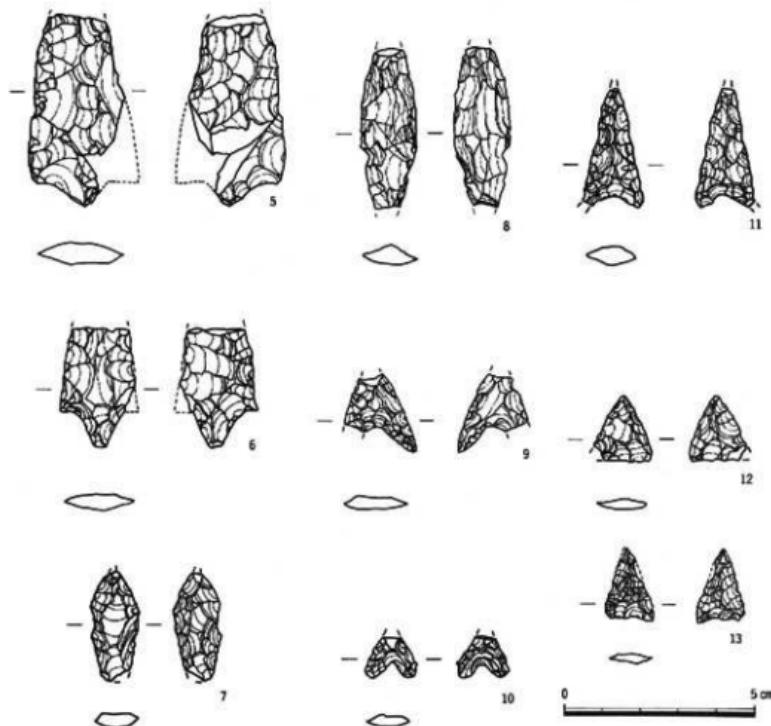


第7図 遺物包含層等出土遺物実測図 (1)

1はナイフ形石器である。横長剥片を素材としているが、瀬戸内技法によるものではないと考えられる。2は横長剥片石核の残核と考えられる。打面エッジおよびその対角を利用してスクレイパーに転用されている可能性もある。3はスクレイパーである。一部欠損しているが、下辺に両面調整による刃部を形成している。以上3点はサヌカイト製であるが、4は灰緑色のチャート製で、表面は大きな剝離面で構成され、主要剝離面の両側辺に細かな剝離が観察できる。

5・6は有舌尖頭器である。いずれも先端部を欠損しているが、両側辺から細かな剝離が施されている。サヌカイト製で流路(SR2001)の堆積層の中から出土している。

7・8は、尖頭器状の石器である。7はチャート製、8はサヌカイト製で平面形が柳葉形を呈している。これらも流路(SR2001)から出土している。



第8図 遺物包含層等出土遺物実測図 (2)

9～13は石鐵である。基部の抉りの深さや、調整の丁寧さ、風化の度合いから縄文時代の石鐵であろうと考えられる。石材は、13がチャート、他はすべてサヌカイト製である。

(2) 弥生時代

弥生時代の遺構・遺物は、ともに本遺跡で最も多い（第9図）。しかし、同一遺構面で中世の遺構も数多く検出しているので、どの時代に属するかは、小遺構ほど判別し難い。

出土遺物の状況と、切り合い関係などからみて、弥生時代であることが確実な、あるいは可能性の高い遺構は竪穴住居跡11軒、掘立柱建物跡2棟、集石土壙・土坑10基、土壙・土坑39基、柱穴・小穴29基、自然流路1条、不明遺構1基がある。

住居跡・建物跡などは段丘面の東側に集中し、集石土壙の主なものは中央部分やや西寄りにみられる。他の遺構も住居跡の周辺に集中する。調査区の西南部にはほとんど弥生時代の遺構はほとんど存在しないが、第6・4・10調査区にまたがって自然流路SR2001がある。

① 竪穴住居跡

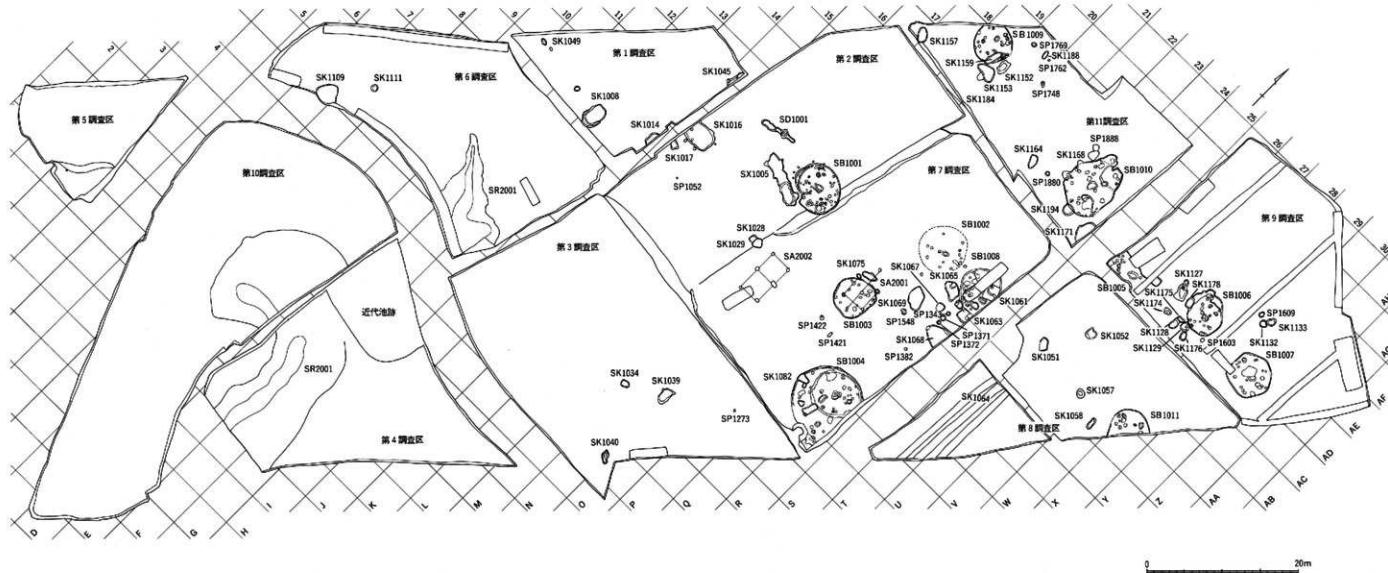
竪穴住居跡（SB1001）（第10・11図）

第2調査区・第7調査区（Y・Z-18・19）にまたがって検出された。梢円形を呈し、南側の一部に不整形の部分を有する。第10図のC-C'以西は1次調査、以東は2次調査である。検出規模は長軸6.80m、短軸の最も長い部分で6.28m、検出面からの深さは平均20cmを測る。

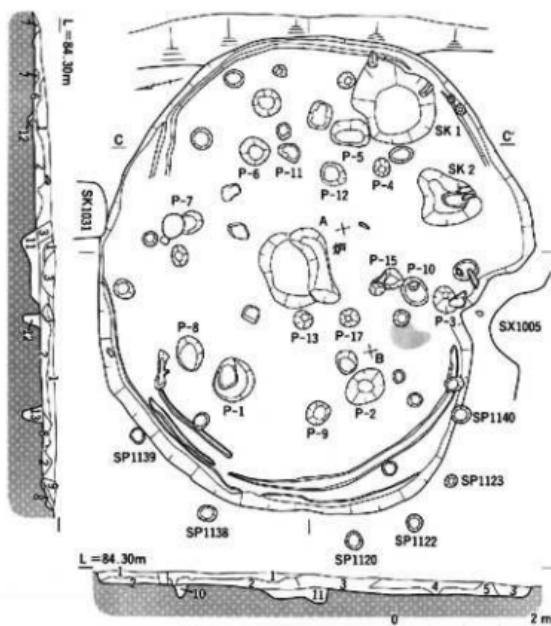
不整形となっている部分は、梢円形の住居に他の遺構が重なっている可能性より、不明遺構（SX1005）のプランの影響を受けてのものと考えられる。中央部に隅丸方形形状の炉を検出している。覆土は8層に分層できる。中央部の下層の2層・3層を中心に、炭化物を多く含んでいる。

周壁溝が西部で二重、部分的には三重に検出されており、炉が重なるような形状で検出されている状況からみて、建て替えが行われたものとみられる。その場合の柱穴は、P-1・2・3・5・6・7またはP-4・11・7・8・9・10のそれぞれの6本の主柱をもつものと推定され、炉際の柱穴P-13の存在から中心柱穴をもつ可能性が考えられる。柱心間距離は、前者が1.5m～2.5m、後者も1.3m～2.1mと大きな差ではなく、配置からも前後関係は把握し難い。住居西側の周壁外側に1～2m間隔で、深さ10cm程度の浅いピットが6基検出されたが、タルキの痕跡の可能性も考えられる。なお、付近には中世の遺構がみられる地点があるので住居跡内に重なっている可能性があるが、判然としないものは住居内に含めた。

住居南東部に長軸1.35mの梢円形で、深さ50cmと長軸0.72mの不整梢円形で、深さ18cmの



第9図 弥生時代の遺構配置図



1. にじい黄褐色10YR4/3粘性砂質土
2. 黒褐色10YR3/2粘性砂質土(炭化物多く含む)
3. 褐色7.5YR4/4粘性砂質土(炭化物多く含む)
4. 黑褐色10YR2/1粘性砂質土(炭化物多く含む)
5. 黑褐色10YR3/1粘性砂質土(炭化物多く含む)
6. にじい黄褐色10YR5/4砂質土(炭化物含む)
7. にじい黄褐色10YR5/3砂質土(砂岩円礫多く含む)
8. 唯灰黄色2.5Y5/2粘性砂質土
9. 黄褐色2.5Y5/3粘性砂質土
10. 唯褐色10YR3/3粘性砂質土
11. 黑色10YR2/1粘性砂質土
12. にじい黄褐色10YR5/3粘性砂質土
13. 唯褐色10YR3/4粘性砂質土

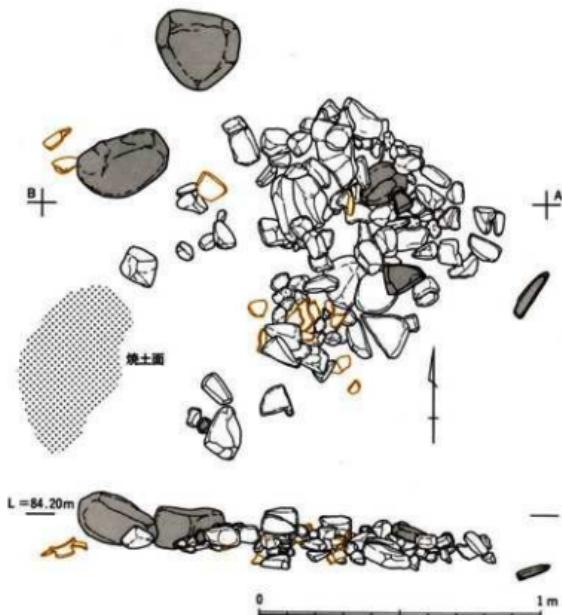
第10図 SB1001遺構実測図

2つの土坑があるが、貯蔵穴と考えられる。

また、炉の一部に重なって8~30cm大の砂岩角円錐を中心とした集石が検出された(第11図)。砂岩中に混じり、弥生土器片をはじめ砥石5点(59・62~64・66)、磨製石斧未製品1点(52)と黒色チャート円錐1点を含み、集石西側の住居床面に焼土の広がりが観察された。しかし、覆土の断面ではこの集石に伴う掘り込みは確認できず、住居廃絶直前の行為として捉えられる。

出土遺物(第12~18図)

出土遺物は集石の部分を含めて覆土全体で取り扱った。弥生土器片1,500余点、石鏃6点、



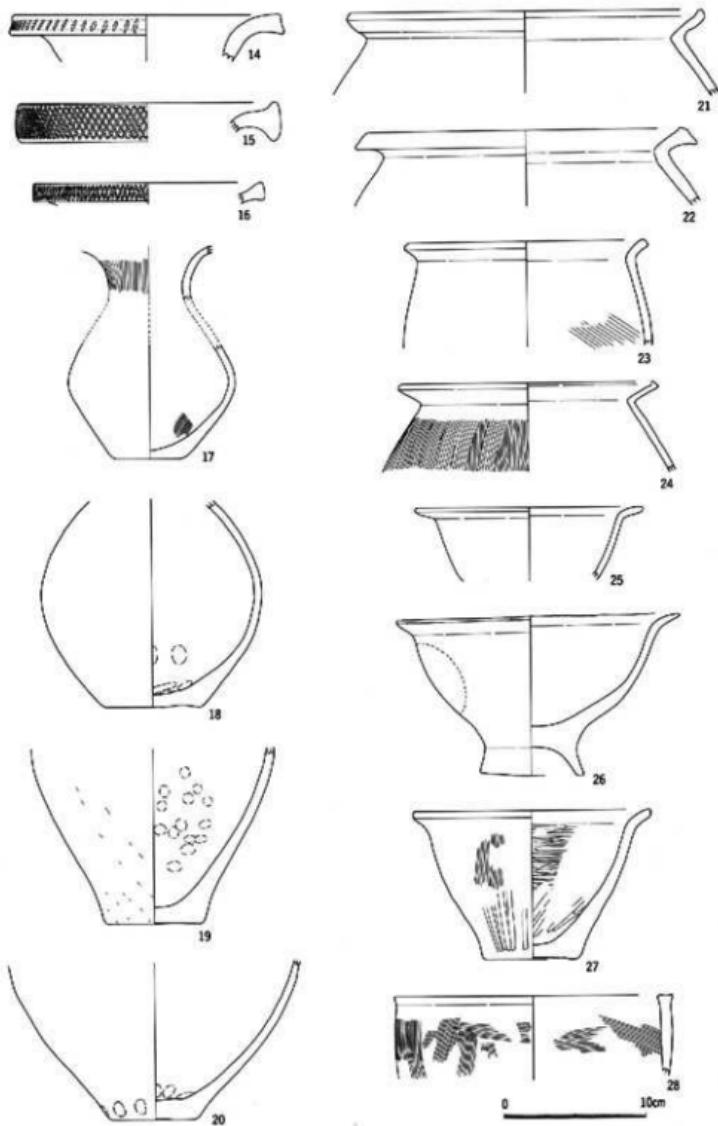
(網目の遺物は石器をあらわす)
第11図 SB1001内集石遺構実測図

石錐5点、石槍2点、楔形石器15点、打製石庖丁4点、磨製石斧7点、叩石5点、台石6点、砥石10点、サヌカイト片250点、結晶片岩片29点が出土している。

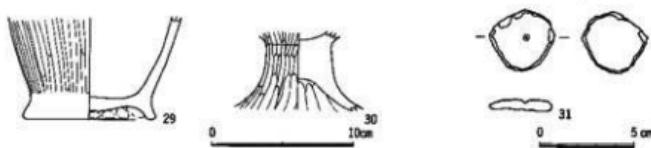
弥生土器は細片が多い。壺形土器の口縁部は3点だけである。14は端面を凹面に仕上げ、ヘラ状の工具による刺突列点文、15・16は、端部を上下に拡張し、斜格子を施す。体部は最大径の張るもの（17）と球形のもの（18）があり、底部はほぼ平底である。また、器面調整はナデが主である。

變形土器（21～24）は、口縁部が屈曲して外反する形態をとっている。端部は、やや上方に拡張するもの（21・24）と、下方に拡張するもの（22）がある。23はやや屈曲が小さく、端部も平坦におさめる。24のように入念なタテハケを施すものがあるが、ナデが主である。

25～27の鉢形土器は、いずれも口縁部が屈曲して外反し、端部はまるく曖昧におさめる。体部はボウル状で、高台状の脚台のつくもの（26）と、平底のもの（27）がある。ただし、



第12図 SB1001出土遺物実測図 (1)



第13図 SB1001出土遺物実測図 (2)

25については、高杯の可能性もある。28はやや異質な鉢形土器で、直立気味の体部に端面を凹面におさめた口縁部をもつ。29は高台状の上げ底であるが、28のような形態の鉢形土器の底部と思われる。

30は高杯の脚台部である。中実の短い脚柱部をもつ。

31は土器片再利用の土製円板である。表面中央に穿孔にかかる痕跡が認められる。

32~41は、石鏃である。欠損品が多いが、二等辺三角形で浅い抉りの円基無茎鏃が多い。35~37・41のように全長3cmを越えるような大型品がある。

42は石錐の錐部、43は石槍、44・45は楔形石器であるが、44は上辺に擦痕、下辺も、端部が擦り潰れている。32~45の石材はいずれもサヌカイトである。

46~49は結晶片岩製の打製石庖丁である。47~49はいずれも、短辺に抉りをもつ。

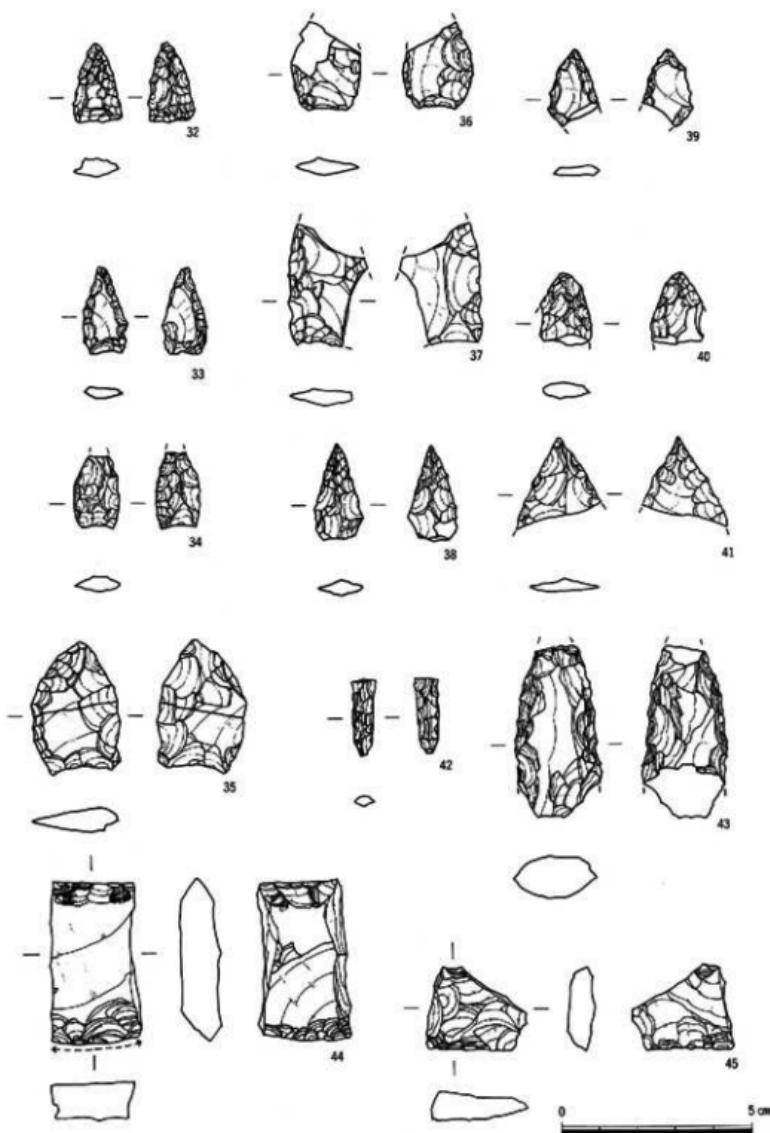
50~53は、緑色片岩または黒色片岩製の柱状片刃石斧である。50は刃部を欠損し、51は刃部のみであるが、同一個体ではない。52は未製品、敲打成形後、研磨をはじめた段階である。53は欠損品であるが、52よりやや段階の進んだ未製品であろうと考えられる。54・55は緑色片岩製で、54は成形し、研磨にかかる段階の小型扁平石斧、55は形のよい自然礫の刃部を研磨した小型円柱状石斧である。

56・57は叩石。56は結晶片岩で、両端を強い敲打に用い、中央部に敲打による凹みをもつ。表面に研磨痕も観察できる。57はハンレイ岩の円礫を利用したもので、粒状の敲打痕が縁辺部に集中している。

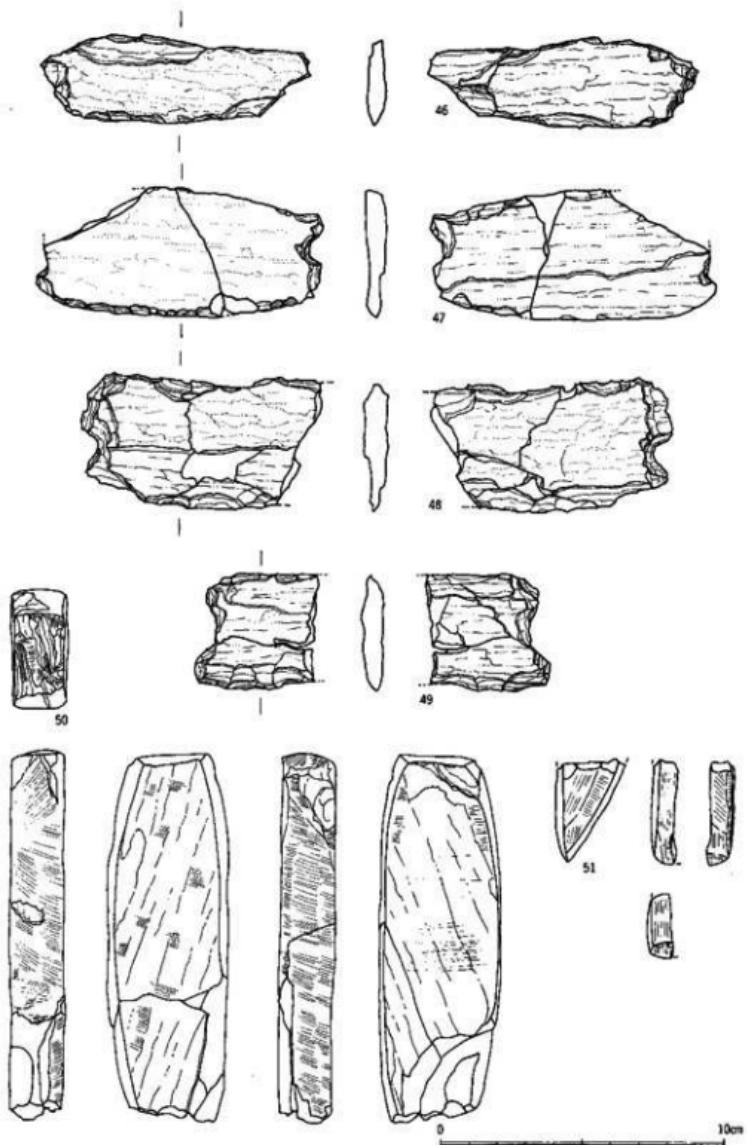
58~67はいずれも砂岩の自然礫を利用した砥石である。どれも被熱により赤褐色に変色している。

竪穴住居跡 (SB1002) (第19図)

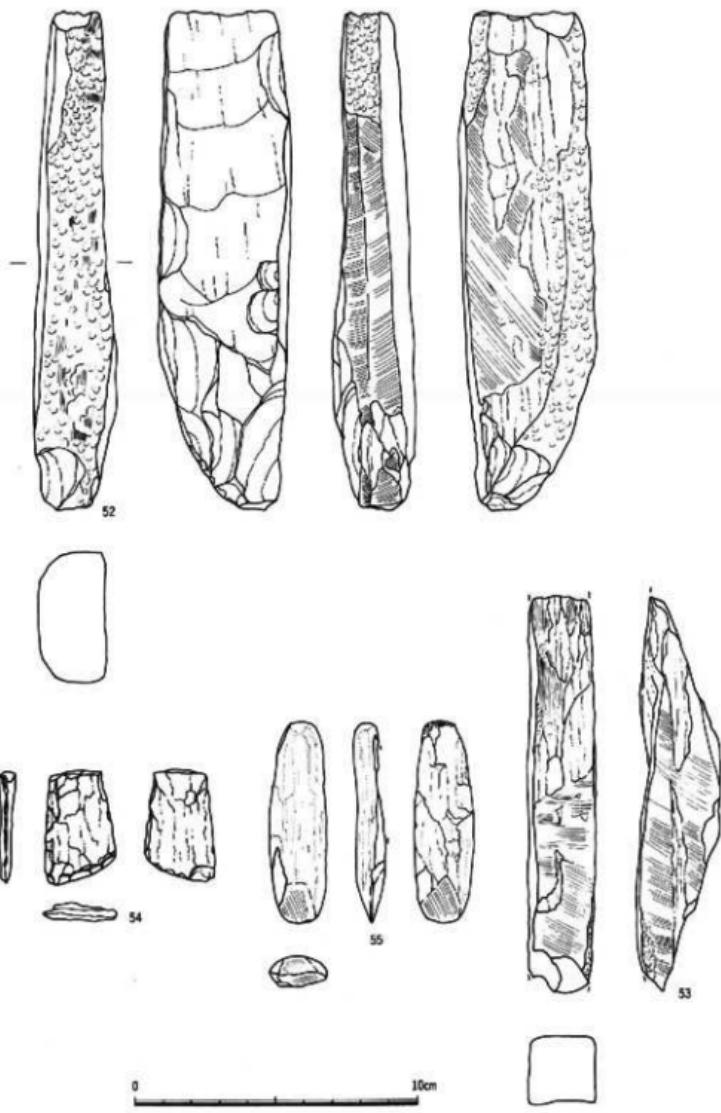
第7調査区 (Z・AA-22) で判明した。耕地整理による削平の影響を受け、周壁を失しているが、柱穴と炉の検出状況から住居跡と考えられる。炉は長軸1mの楕円形で、断面階段状となっている。覆土は焼土や炭化物を多量に含んでいる。柱穴は、P-1・4・9・14・16の5本主柱の構造であったと考えられる。柱心間距離は2.2m~3.0mで、炉が南側に偏在



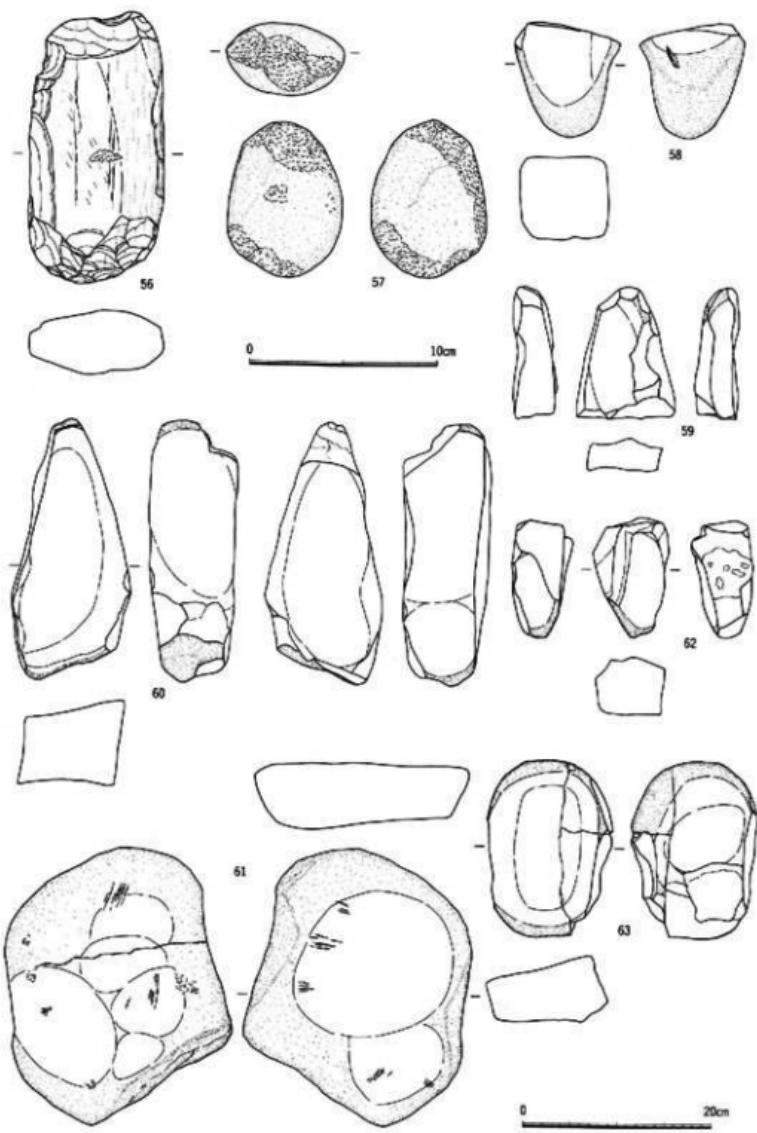
第14図 SB1001出土遺物実測図 (3)



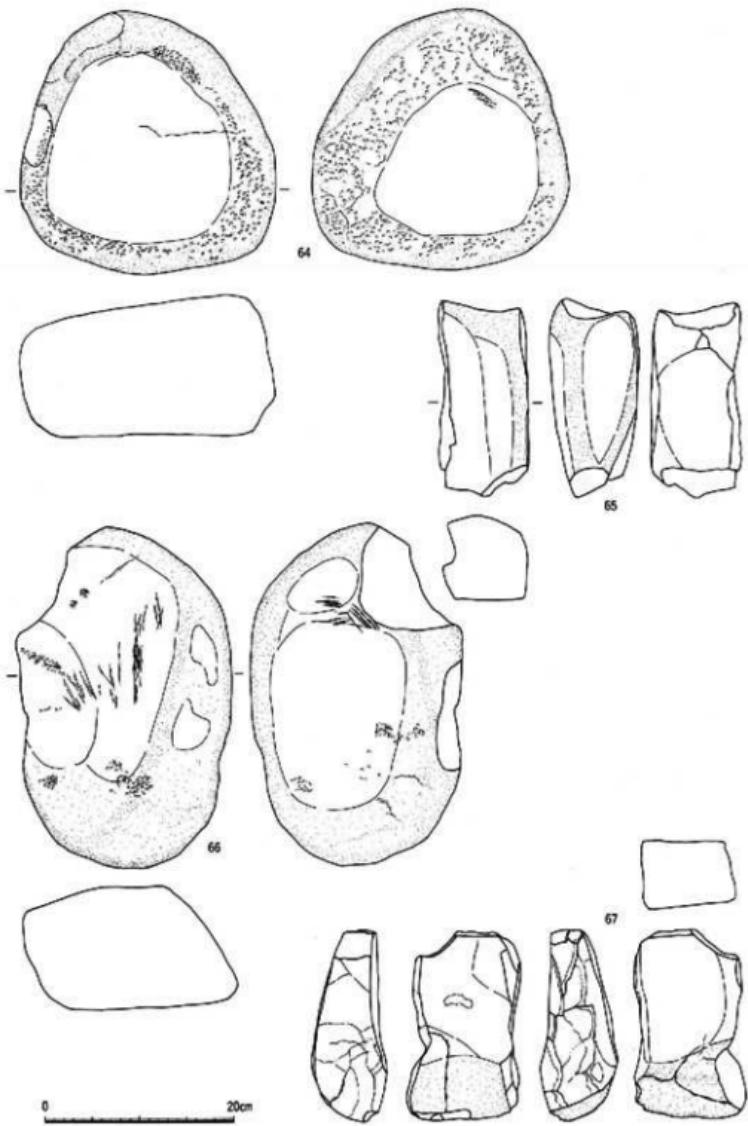
第15図 SB1001出土遺物実測図 (4)



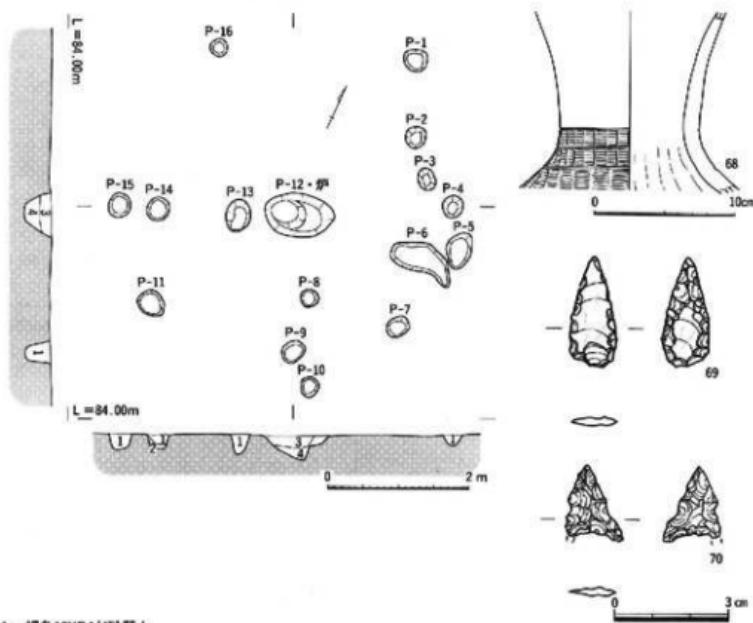
第16図 SB1001出土遺物実測図 (5)



第17図 SB1001出土遺物実測図 (6)



第18図 SB1001出土遺物実測図 (7)



1. 棕色10YR4/4砂質土
2. にぶい黄褐色10YR5/4砂質土
3. 喙赤灰色10YR3/1（炭化物・焼土を含む）
4. にぶい黄褐色10YR4/3砂質土（焼土が混る）

第19図 SB1002遺構・出土遺物実測図

することになる。復元径は、長軸6.0m、短軸5.5m程度と推定できる。

出土遺物

覆土が存在しないため、遺物は柱穴・炉内のものに限られる。弥生土器片70点、石鏃2点、サスカイト片7点である。

68の広口壺形土器は、頸～体部上半の簾状文が特徴的で、各単位間を沈線で区画している。69の石鏃は主要剥離面側の調整を中心としている。70は凹基無茎鏃の側縁中央にわずかに抉りを施し、基部が翼状となっている。

竪穴住居跡（SB1004）（第20図）

第7調査区（T～V-22・23）で検出された。一部調査区外に延びているが、平面プランは楕円形を呈し、検出規模は南北9.8m、東西は検出部分で8.0mを測る。覆土は分層できず、

ほぼ単一層で、炉や柱穴内の覆土の色がやや異なる。

周壁溝が、二重に回っていることから、建て替え・拡張が行われたことが推定できる。内側の径6.1mの周壁溝が当初の住居のものであったと考えられ、北壁をそのままにして南側に拡張し、長軸9.8mの住居を作り替えたとみられる。不整形の炉は当初の位置のままで、移動を行った痕跡はない。拡張前の主柱穴はP-1・2・3・4（または6）・5とP-5・P-1間に1カ所想定すると、柱心間距離2m前後の6本主柱と考えられる。拡張後はP-11・12・13・14・15・16（または18）と、調査区外に1～2本想定して、7～8本と考えられる。検出されている柱穴の柱心間距離は2.7m～3.2mである。

周壁溝は拡張前後とも幅20cm、深さ10～15cmの断面U字形である。拡張前の周壁溝に重なって長軸2.1m、短軸0.83m、深さ14cmの隅丸方形の土坑が検出されているが、付属遺構か、後世のものかは不明である。

炉の周辺に台石・凹石・叩石・サヌカイト剝片・チップが散乱し、石鐵・石錐の製品・半製品などが出土している。拡張後のものは本調査区内で最大の竪穴住居跡である。

出土遺物（第21～29図）

覆土中から出土した遺物は、弥生土器片2,236点をはじめ、土製紡錘車2点、石錐38点、石錐7点、楔形石器8点、スクレイバー6点、サヌカイト片1,455点、打製石庵丁9点、磨製石斧7点、叩石2点、台石2点、砥石5点である。

弥生土器は、出土破片数が多いものの、細片が大半を占める。壺形土器は、朝顔状に開く口頭部をもち、口縁部上面に斜格子文を描き、端面は平坦におさめるもの（71）と、2条の凹線を施したもの（72）がある。73は漏斗状に開く口頭部をもち、断面三角形の突帯を巡らし、刻目を施す。74は、直立する口頭部に突帯を巡らし、75は直角に屈曲し外反する口縁の端部に刻目を施すなど、異質な形態をとっている。76は体部上半に櫛描の直線文と円弧文、77は最大径のやや張った形態で、刻目压痕文が施されている。底部には平底（78）と上げ底（79）がある。

変形土器は、口縁部が屈曲して外反し、端部をやや上方に拡張するもの（80）がある。底部は、平底で薄いつくりのもの（81）、やや厚手で外方にやや拡張するもの（82）がある。

83は上げ底の状態、外方への拡張が顯著で、鉢形の土器の可能性がある。

土器の胎土からみて、72・73・77・80は他のものと較べて異質であり、角閃石・長石等の混入が観察できることから、讃岐地城からの搬入と考えられる。

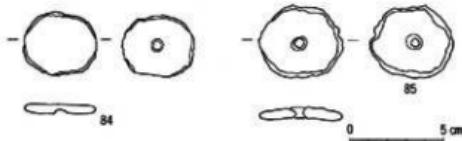
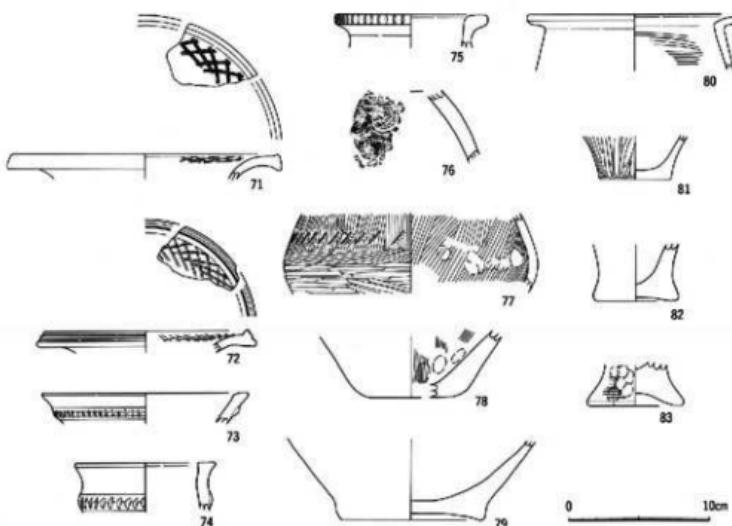
土製紡錘車は、土器片利用で、穿孔にかかったもの（84）と穿孔されたもの（85）がある。

石錐は、本調査区内の住居跡の中で最も出土数が多い。凹基無茎（88～90・92～94）、円基無茎（95～97・99）、平基のもの（86・87・91・98・102）、平基有茎の大形品（103）、凸基有



1. にじい黄褐色10YR4/3砂質土
2. にじい黄褐色10YR5/4砂質土
3. 黄色10YR4/6砂質土
4. 黄褐色10YR3/4砂質土
5. 喙赤灰色10R3/1砂質土

第20図 SB1004遺構実測図



第21図 SB1004出土遺物実測図 (1)

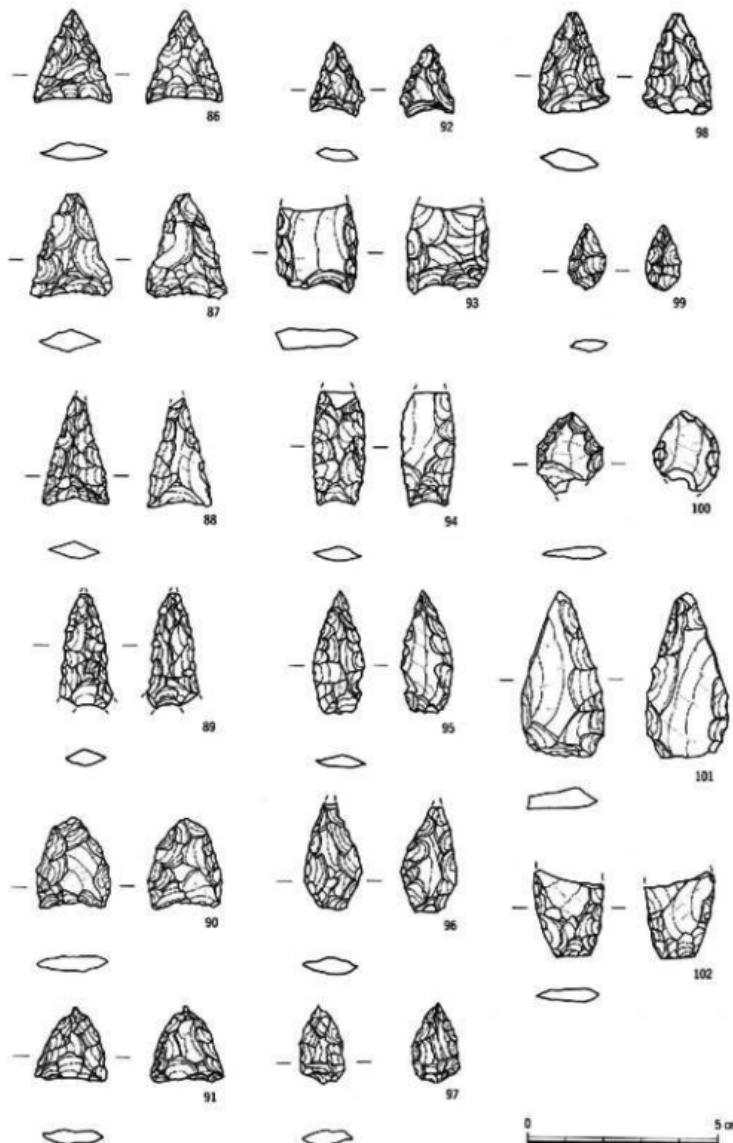
茎のやや形の不整なもの（104・105）がある。欠損品や、101・106・107・109・114のように調整が十分でないものが、比較的多く含まれている。

石錐（115～121）は、つまみの基部をもたない115の他は、基部をもつ構造と考えられる。

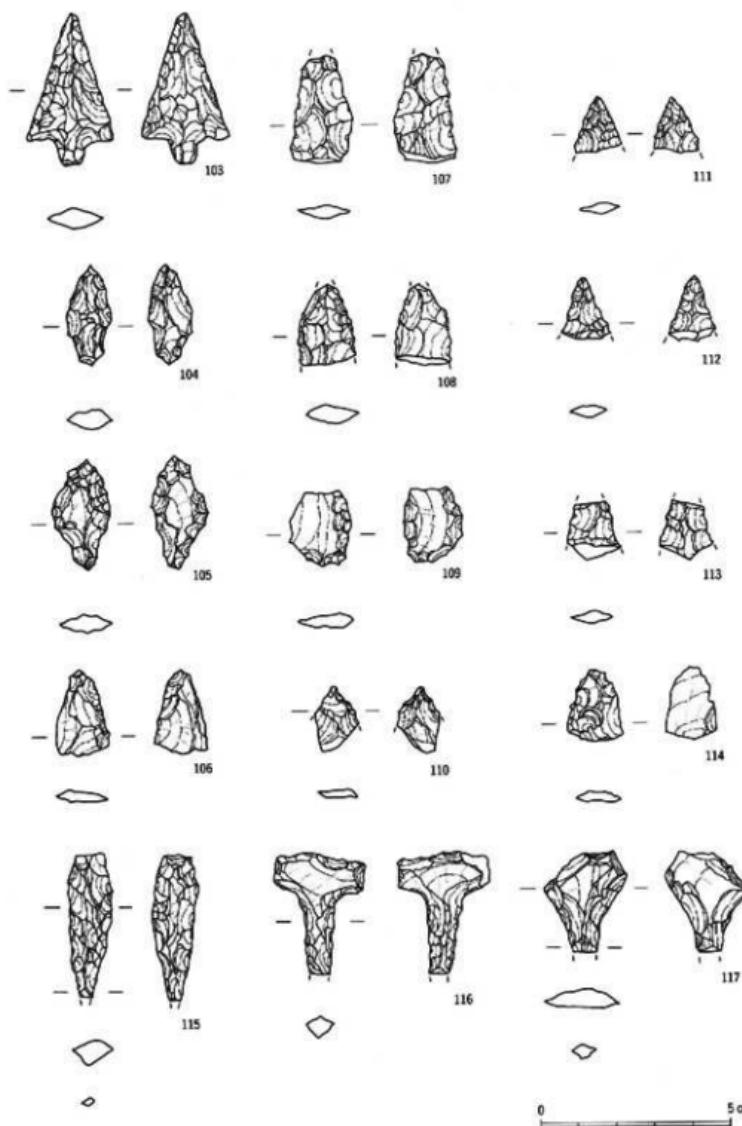
楔形石器（122～129）の中で、124は両面に擦痕が観察できる。SB1001出土の44とは異なり使用過程における痕跡と考えられる。

スクレイバー（130～135）は、両面調整、あるいは両極打法で粗い刃部形成が行われている。

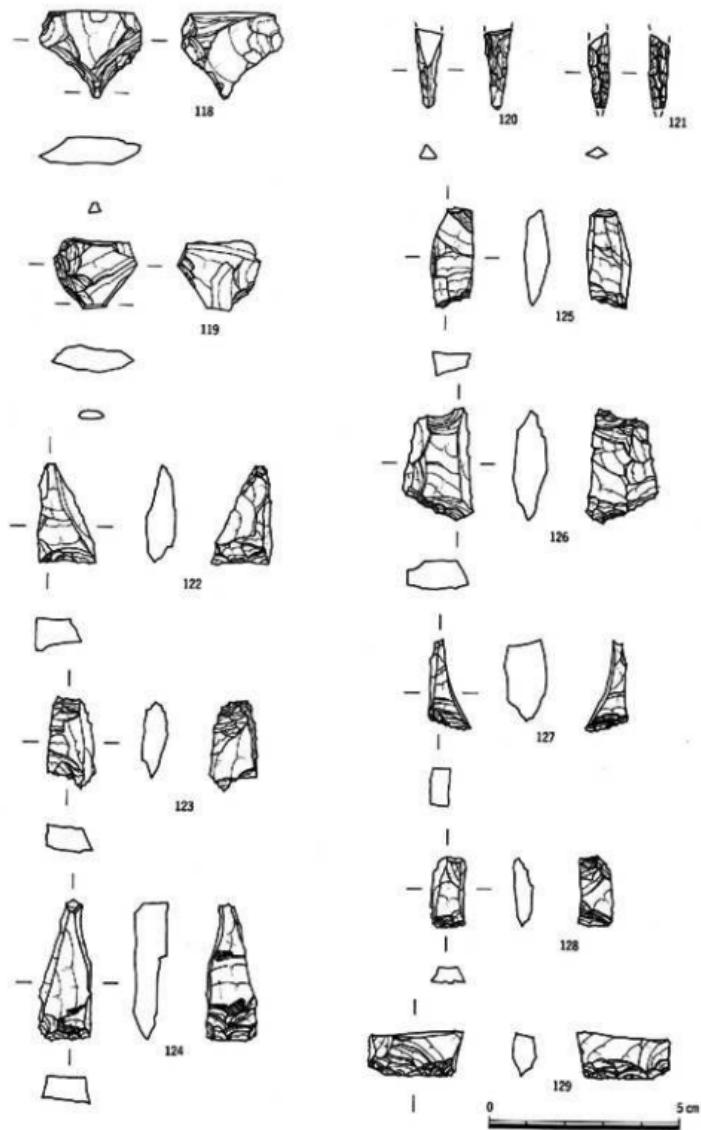
136・137は剥片の中で最も大きなものの一部で、原材から1次的に剝離されたものであろ



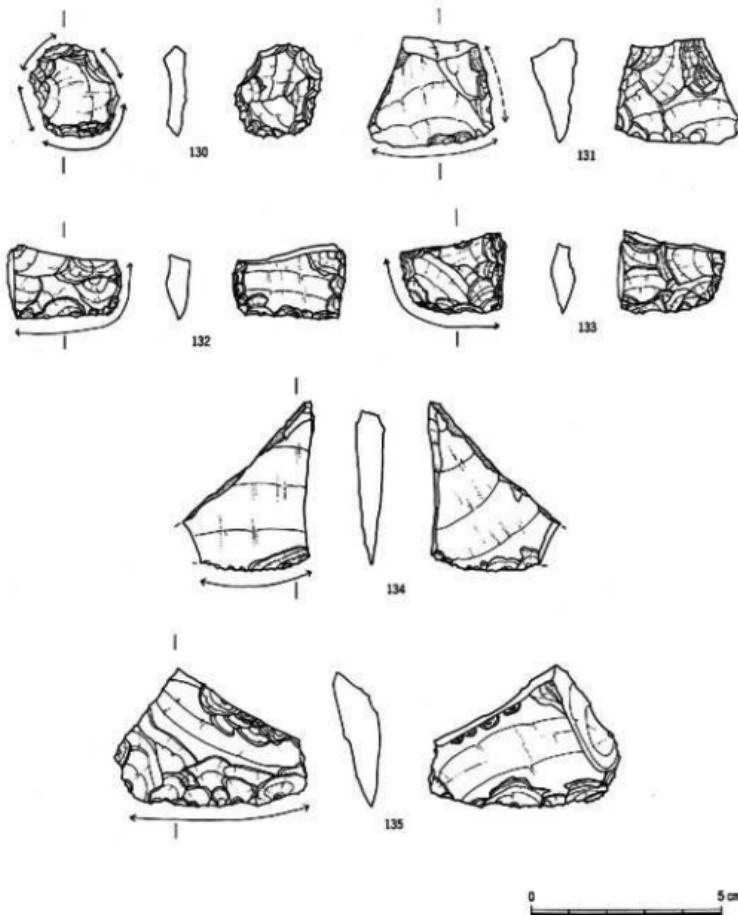
第22図 SB1004出土遺物実測図 (2)



第23図 SB1004出土遺物実測図 (3)



第24図 SB1004出土遺物実測図 (4)

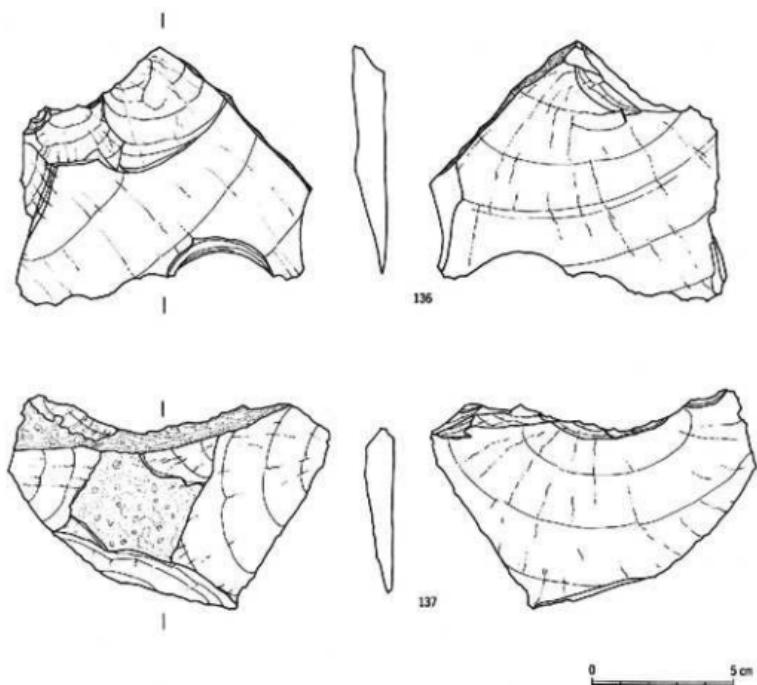


第25図 SB1004出土遺物実測図 (5)

うと考えられる。

138~144は打製石底丁である。138~140については、完存品で、両端に抉りを施すが、141~143は、抉りが認められない。いずれも結晶片岩製で、両極打法によって成形し、刃部を形成している。

145~147は、小型扁平石斧である。145~147は緑色片岩を利用し、146はサスカイトである。



第26図 SB1004出土遺物実測図 (6)

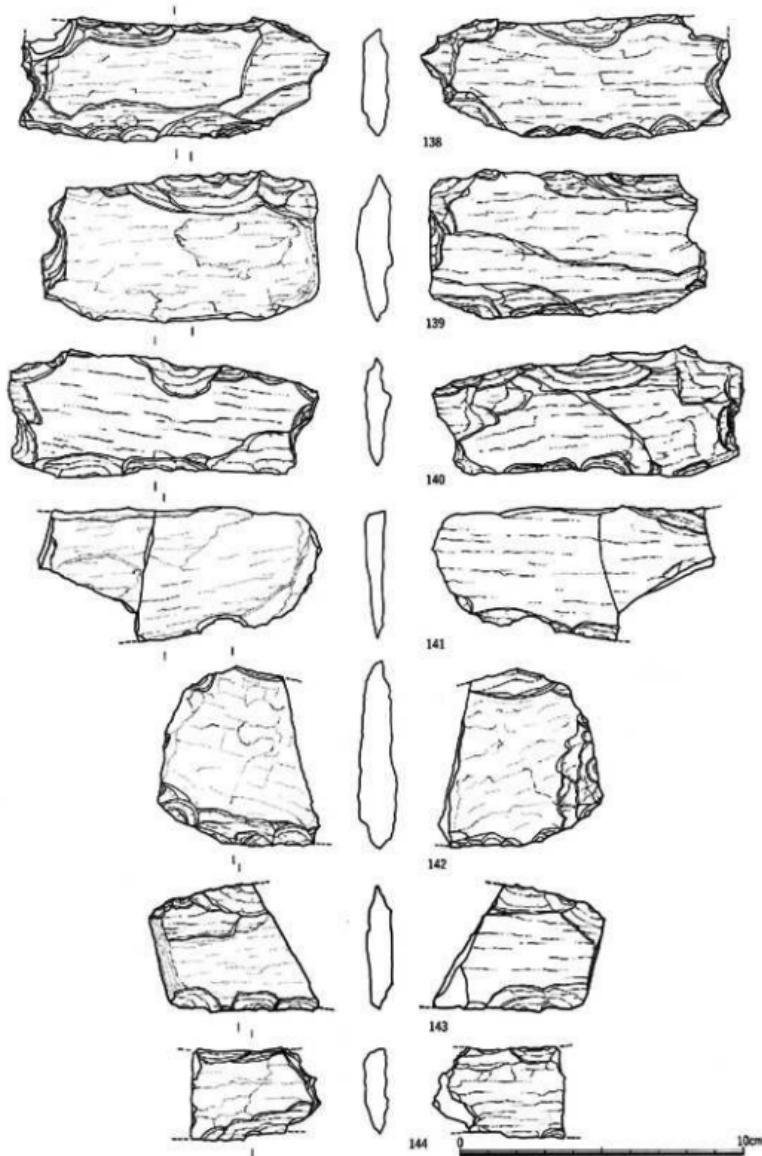
いずれの個体も、刃部を中心とする部分のみ研磨している。

148は小型方柱状片刃石斧である。基部を欠損するが、表裏面のみを研磨し、側面は自然面である。

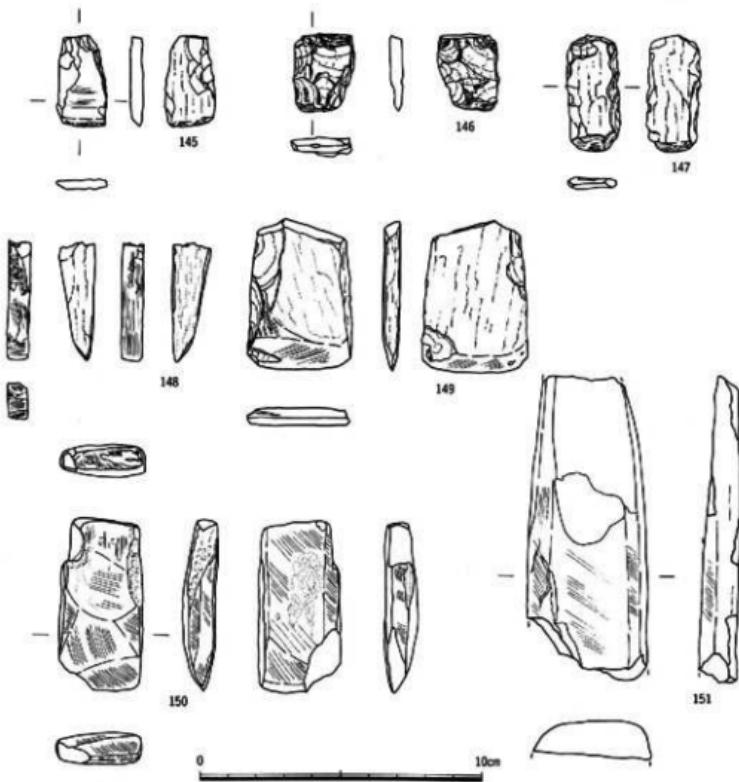
149・150は扁平片刃石斧。刃部を中心に研磨し、成形している。151の磨製石斧は、欠損部分が大きいが、扁平石斧と考えられる。

152・153は結晶片岩を利用した叩石。152は両端を強い打撃により欠き、中央部に両極打法の際使用したとみられる筋状の敲打痕がある。153は棒状の自然縫の一端が敲打により潰れている。

154～158は砂岩製の砥石。157・158には、熱を受けた痕跡があり、157は剥離面も利用している。



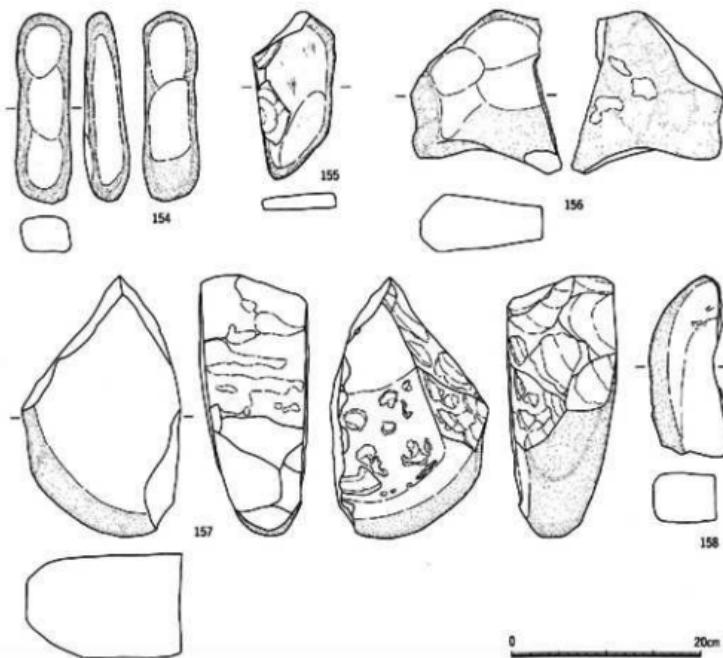
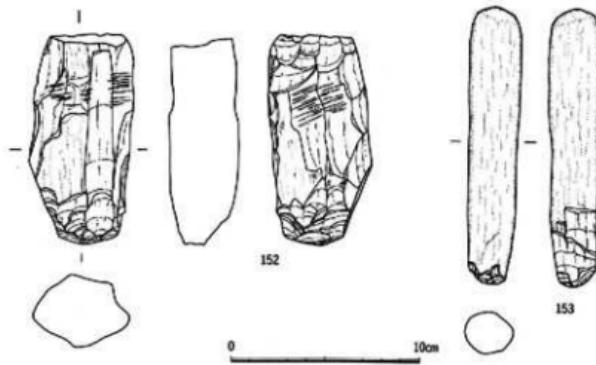
第27図 SB1004出土遺物実測図 (7)



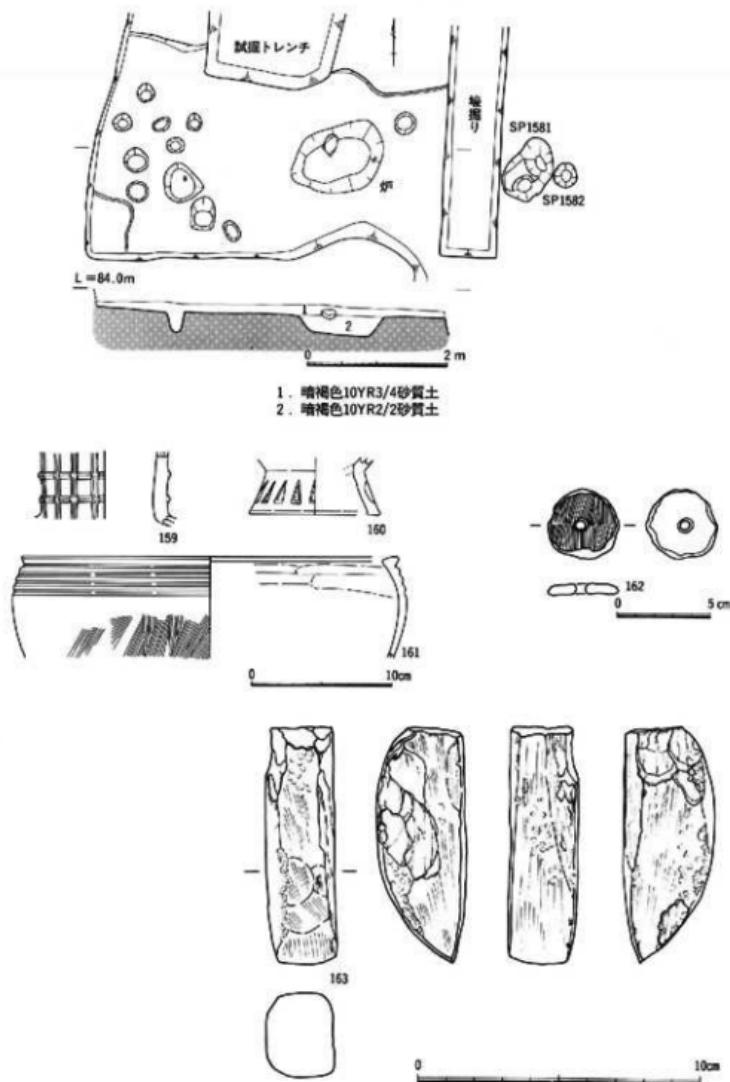
第28図 SB1004出土遺物実測図 (8)

竪穴住居状遺構 (SB1005) (第30図)

第9調査区西南端 (AC・AD-25・26) で検出された。調査区外に延び、調査区内も試掘坑や果樹植え付けの際の壕掘りによって裁断され、全体の形状は不明であるが、炉を伴うことから、住居状の遺構であると考えられる。平面形・規模は壕掘り部分を考えると、方形の可能性を持つが、不明である。長軸1.4m、短軸0.95mの楕円形の炉があり、覆土上面から、柱状片刃石斧が出土している。しかし、他の住居跡の炉の位置に較べると、周壁に近寄りすぎている。炉の西側に集中して柱穴が検出されているが、主柱にあたるものは関係が判明しないので特定できない。



第29図 SB1004出土遺物実測図 (9)



第30図 SB1005遺構・出土遺物実測図

SP1581・1582等もこの遺構の柱穴の一部を構成する可能性がある。

出土遺物（第30図）

柱穴等を含めた覆土からの出土遺物は、弥生土器片53点、土製紡錘車1点、柱状片刃石斧1点、サスカイト片8点がある。

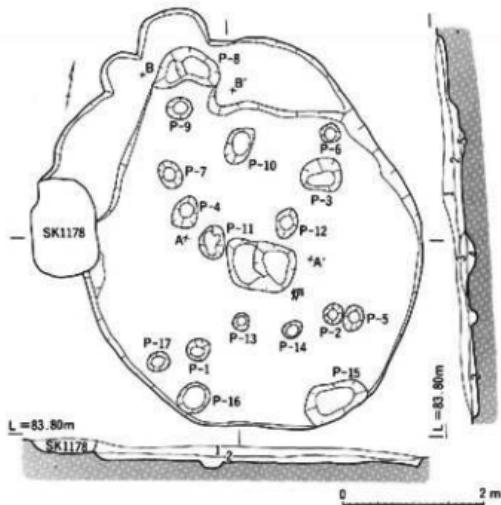
159は壺形土器の頸部である。棒状浮文を格子状に配する。160は低い脚台部である。三角形の透かしを配するが、貫通していない。161は鉢形土器である。内側する体部をもち、口縁端部は外方に拡張、4条の凹線を施している。162の土製紡錘車は土器片利用のもの。163の柱状片刃石斧は、緑色片岩を用い、表裏面を中心に研磨し、仕上げている。基部の非加工の部分は破損面と考えられる。

豎穴住居跡（SB1006）（第31・32図）

第9調査区(AD・AE-28・29)で検出され

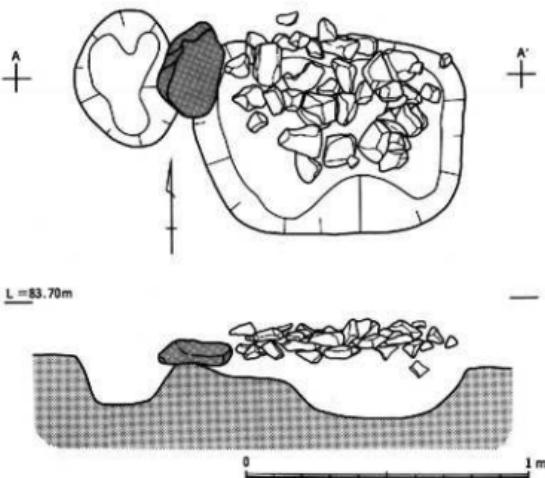
た。検出規模は、長軸6.32m、短軸4.8mを測り、不整橢円形を呈する。検出面からの深さは、平均20cmである。西側壁を切って集石土坑SK1178が構築されている。また、検出プランの乱れは、北壁部分で著しい。覆土は2層に分層でき、下層には炭化物が多く含まれる。

北側壁に添って、幅0.8mで、10cm程度の高床部分があり、それを切り込む形で土器が集中投棄された状態のP-8(後述)がある。周壁溝は検出されず、中央やや南よりに隅丸方形の炉が設置され



1. 増褐色10YR3/3砂質土(炭化物を含む)
 2. にぶい黄褐色10YR5/4砂質土(炭化物を多く含む)
 3. 黑褐色5 YR4/6炭化物層
 4. 黑褐色2.5YR3/1炭化物層
 5. 增褐色10YR3/3砂質土(炭化物を多く含む)

第31図 SB1006遺構実測図



(網目の遺物は磁石をあらわす)
第32図 SB1006炉跡集石状況実測図

ている。主柱穴はP-1・2・3・4の4本が考えられる。柱心間距離は2.0mである。

炉の上面には、直径5~10cmの砂岩角円礫が集中的に検出されており、磁石(173)もその一部と考えられる(第32図)。礫・その間にある土器・磁石・覆土下層に含まれる炭化物・炉に重なっていること、と、SB1001の集石と共通点が多い。

遺構プランの方向などの状況から、住居内遺構と捉えたP-8(第33図)は、長軸0.85m、短軸0.46mの不整形で、検出面(床面)からの深さは20cmを測る。壺形土器を中心とする土器が折り重なるように集中して出土し、他の集石遺構でみられるような砂岩礫はほとんどみられない。加熱によるとみられる土器の変質が観察でき、火の使用が推定される。住居構築前の遺構の可能性も否定できず、性格については不明である。

出土遺物(第34・35図)

覆土中から出土した遺物は弥生土器片570点、石鏃2点、楔形石器1点、打製石庖丁1点、叩石1点、サヌカイト片30点である。炉上の集石からは弥生土器片67点、磁石1点が出土し、P-8からは弥生土器片70点が出土している。P-8出土の遺物については別にまとめた(第

35図)。

覆土・炉上集石から出土した弥生土器は細片が多い。164・165は広口壺形土器で、ともに朝顔状に開く口頸部をもち、口縁端部をわずかに拡張、165は端面に刻目を施す。166・167は壺形土器の底部と思われる。

168・169は石礫である。170は楔形石器、171は打製石庖丁。172はハンレイ岩円礫を利用した叩石。筋状の敲打痕が多く観察できる。173は砂岩の円礫を利用した砥石。一部に弱い底面と筋状の敲打痕がみられる。

P-8出土の土器はほとんどが壺形土器である。広口壺形土器の口頸部は、ラッパ状にはほとんど屈曲なく

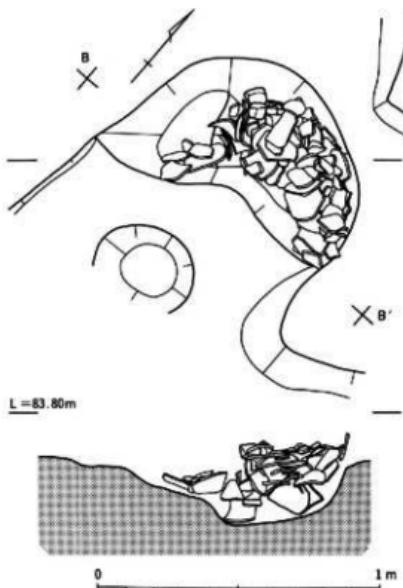
外反するもの(174・175)

と、やや屈曲して、朝顔状にひらく形態のもの(176・177)がある。頸部と体部の境は屈曲するもの(174・177)、緩やかに移行する形態(178)が認められる。体部も断面梢円形状のもの(174)、球形に近いもの(179)があり、底部は、平底(180・183)、上げ底(179・182)、丸底(181)がそれぞれみられる。

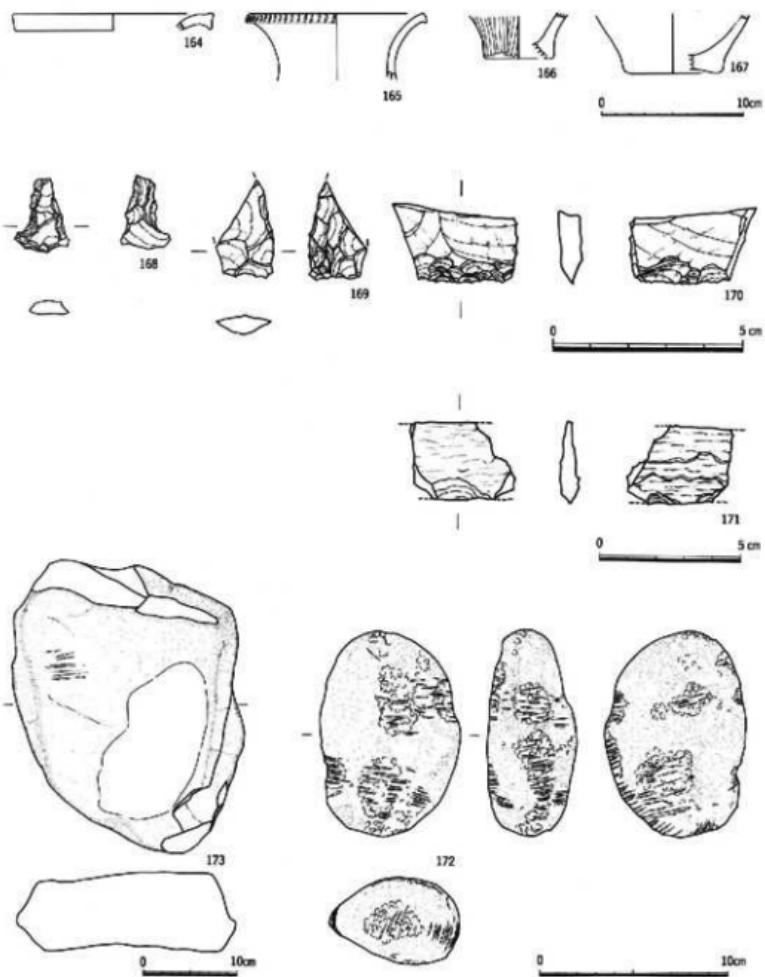
184は鉢形土器の底部と考えられ、内面横方向に丁寧なヘラミガキが施されている。

竪穴住居跡(SB1007)(第36図)

第9調査区(AC・AD-30・31)で検出された。隅丸の五角形状のプランをもつ竪穴住居状遺構である。検出規模は、長軸5.96m、短軸5.85mを測り、検出面からの深さは8cm程度と浅い。覆土は2層に分層できるが、いずれの層も遺物は少ない。中央部に土坑SK1135が重なっている。

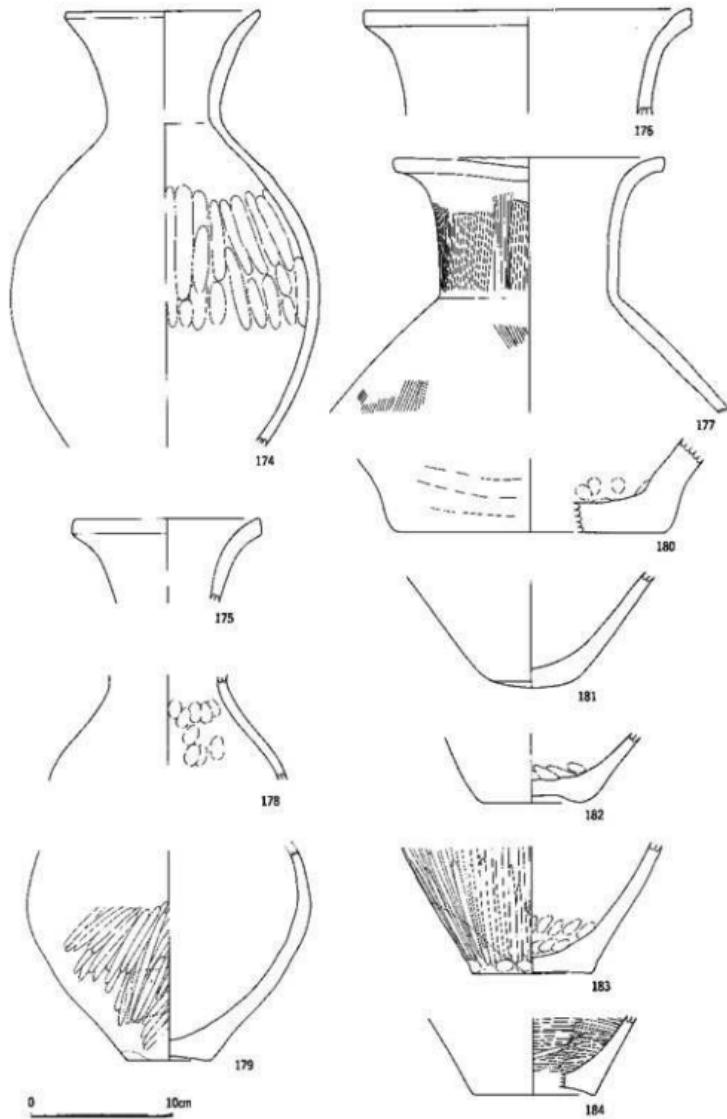


第33図 SB1006 P-8遺物出土状況実測図



第34図 SB1006出土遺物実測図

周壁溝は検出されておらず、中央のピットが炉と考えられるが、覆土の状況からみて、使用された痕跡に乏しい。柱穴は16カ所検出されているが、浅深のぼらつきがあり、配置からは6本主柱など幾通りかの可能性が考えられるが、深度からみてP-10・13・11・16の4本主柱の可能性が高いと考えられる。柱心間距離は2.5~3.0mである。



第35図 SB1006 P-8出土遺物実測図

出土遺物

弥生土器片7点、サヌカイト片2点しか出土していない。いずれも細片で図化は不可能である。

竪穴住居跡(SB1008)

(第37図)

第7調査区(Z・AA-23・24)で検出された。周壁は削平を受けて欠失している。当初はこれに重なる遺構をすべて単独遺構として、それぞれを完掘した。その後、SK1061とした遺構の一部が炉であることが判明したの

で、再精査をおこない

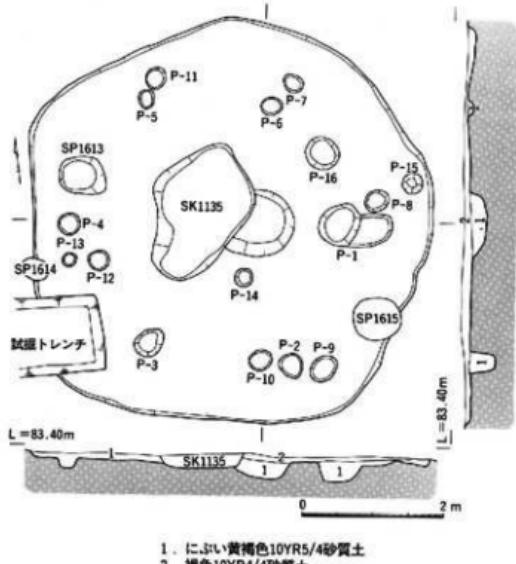
周壁溝を検出し、住居跡と認定した。一部調査区外に延び、試掘坑でさらに一部を失っているが、梢円形を呈する周壁溝の検出規模は、長軸の検出部分で5.5m、短軸は5.5mである。

この地点は遺構が集中し、住居と重なっている。SK1062・1063埋没後に住居は構築され、住居廃絶後にSK1061・1064、SP1350・1356・1357が構築されている。周壁溝内のビットについても住居存続期間に前後するものもあるとみられるが、住居内に含めて考えた。

周壁溝は、幅23cm程度、断面U字形を呈している。炉は、不整な隅丸方形状を呈しており、炭化物・遺物の出土も多い。柱穴は、P-1・2・3・5と調査区外の1~2基を合わせて、5~6本の主柱であろうと考えられる。柱心間距離は調査区内の4基については2.3m前後である。住居廃絶後に構築されたSK1061は、集石土坑である。

出土遺物(第38・39図)

明らかに住居内の遺物と考えられるのは、弥生土器片140点、打製石庖丁2点、叩石1点、サヌカイト片1点、結晶片岩片1点である。

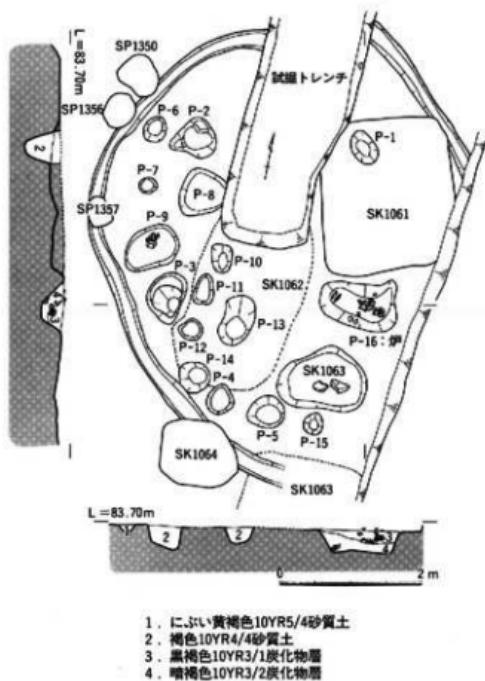


1. にぶい黄褐色10YR5/4砂質土
2. 黄色10YR4/4砂質土

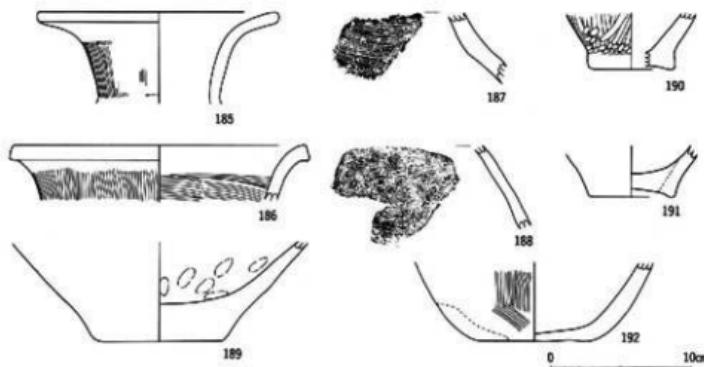
第36図 SB1007遺構実測図

185～189は壺形土器である。185・186は広口壺形土器、185は口縁部が朝顔状に大きく開く形状を呈し、186は口縁部の開きが小さい。187・188は頸部から体部上半に櫛描文が施されている。189の底部は平底。190・191は壺形土器の底部とみられ、双方とも、上げ底を呈す。192は平底だが底部端が丸く、体部器壁より底部厚の方が薄い、やや異質な形態をしている。

炉から出土した193は長方形の、194は半月形の打製石庖丁である。いずれも端部に抉りをもたない。



第37図 SB1008遺構実測図



第38図 SB1008出土遺物実測図 (1)

195は砂岩円盤を利用した叩石である。縁辺に敲打痕が集中している。

竪穴住居跡 (SB1009)

(第40図)

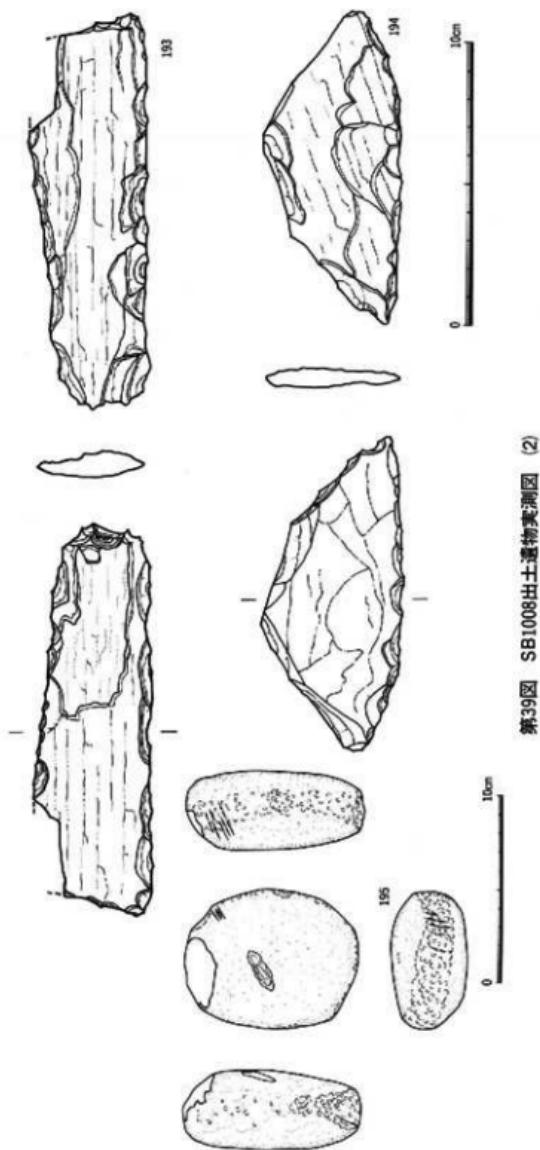
第11調査区(AE・AF-18~20)で検出された、ほぼ円形の竪穴住居跡である。検出規模は直径5.2mを測り、一部調査区外に延びる。検出面からの深さは平均15cmを測る。覆土はほぼ單一層である。

周壁溝は検出されず、長軸0.79mの隅丸方形の炉が、中央やや北に偏在する。柱穴はP-1・2・3・4・12の5本と考えられ、柱心間距離は1.8~2.3mである。

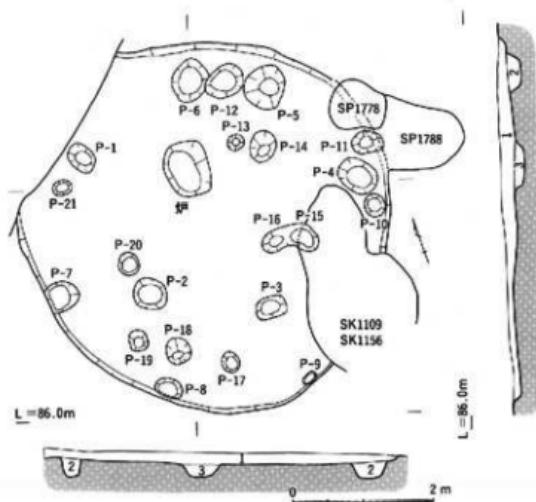
なお、住居廃絶後に弥生時代のSK1159が、さらに中世のSK1156が重なり、SP1778・1788も廃絶後に構築されている。

出土遺物

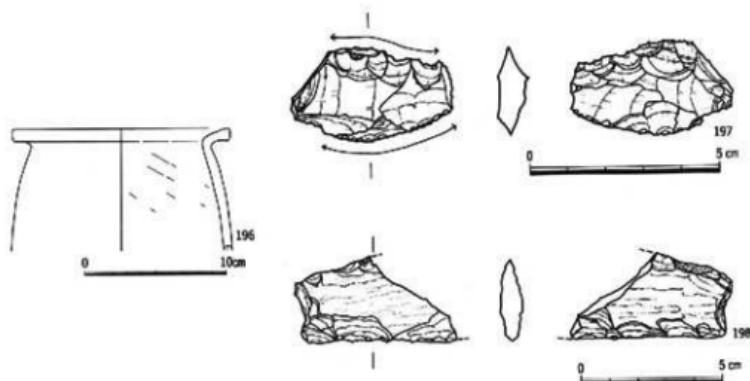
覆土から、弥生土器片180点、スクレイバー1点、打製石庖丁片1点、サヌカイト片3点が出土している。



第39図 SB1009出土遺物実測図 (2)



1. 褐色10YR4/4砂質土
2. にじい黄褐色10YR5/4砂質土
3. 黒褐色10YR3/1炭化物層

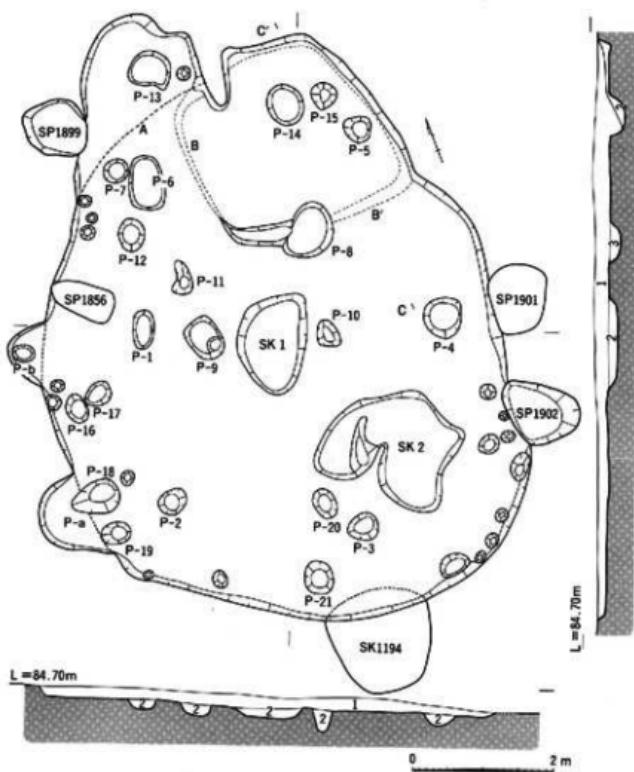


第40図 SB1009構造・出土遺物実測図

196は變形土器である。屈曲して外反する口縁部は、肥厚して平坦におさめられている。
197はスクレイパーである。上下辺に刃部を形成し、下辺には使用痕とみられる小さな剝離が、観察できる。198は打製石庖丁で、欠損しているが、端部には抉りがある。

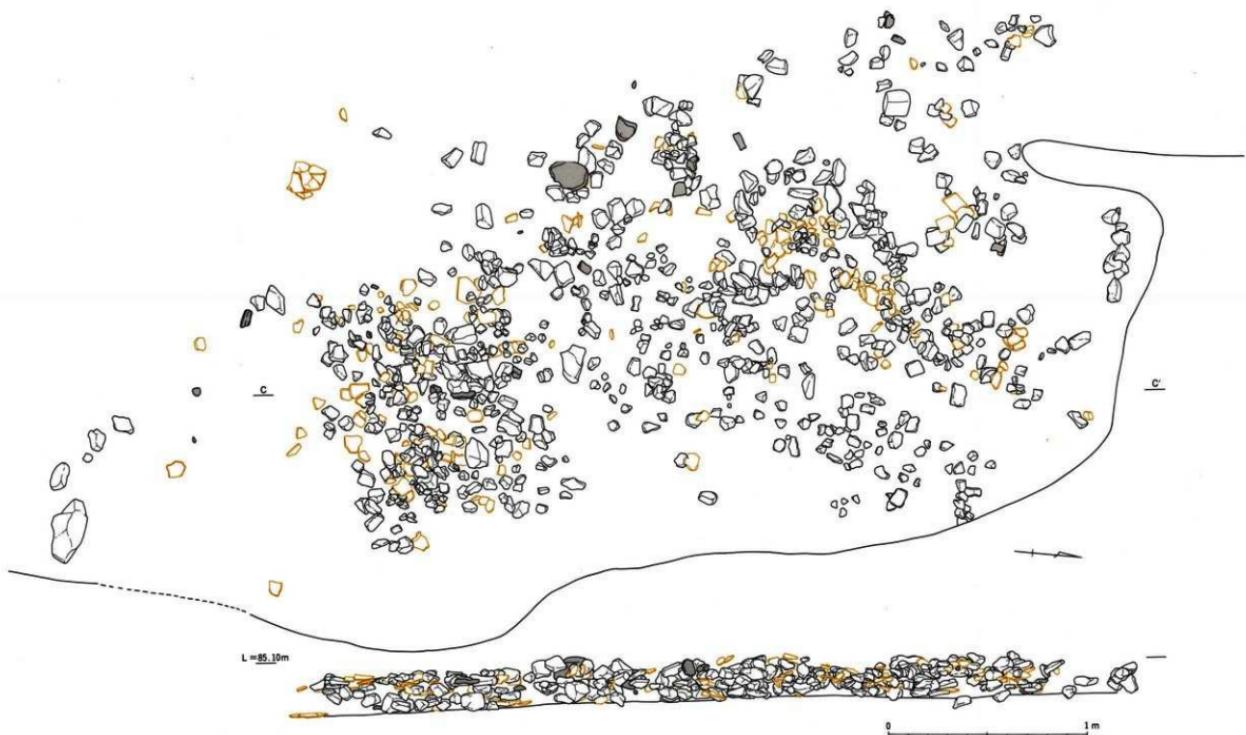
竪穴住居跡 (SB1010) (第41・42図)

第11調査区 (AD・AE-23・24) で検出された。不整梢円形の竪穴住居跡に、いくつもの遺構が重なり、検出プランは複雑な形状を呈していた。住居周壁に重なるSP1856・1899・



1. 淡色10YR4/4砂質土
2. にぶい黄褐色10YR5/4砂質土
3. 明赤褐色5YR5/8粘質土

第41図 SB1010遺構実測図



(網目の遺物は石器をあらわす)

第42図 SB1010内集石状況実測図

1901・1902・SK1194をそれぞれ単独遺構と捉え、P-a・bも住居外の可能性が強いと考えられる。P-18・19は、周壁に沿って小ビットが多く検出されており、その一連のものと捉えた。住居北部の張り出し部分のうち、P-13のある部分については、下端線が乱れる部分を結んだ点線Aが本来の周壁に近い線と考えられる。P-14のある部分については、一辺2.5m程度の隅丸方形形状に、ごく浅い溝（B-B'）が観察できる。柱穴の配置や、この付近にみられる集石の状況から考えると、住居内に付属するものとみられる。

住居の規模は長軸8.0m、短軸6.56mである。検出面からの深さは13cm程度、覆土の分層はできず、柱穴等の覆土の土色が若干異なる。南部から西部にかけて、周壁に添う小ビット群がみられるが、間隔は一定しない。P-8はやや北側に偏在するが、焼土が詰まっており、炉の可能性が高い。主柱穴は配置と深さから、P-1・2・3・4・5・6（または7）の6カ所が考えられ、柱心間距離は2.3m～3.0mである。

中央にある土坑SK 1は、両端にP-9・10の小穴をもち、いわゆる松菊里（北牟田）型住居の特徴がうかがえる。

また、住居北東部、全体の1/4程度の面積に集石がみられる（第42図）。SB1001等と較べて、散在的で、砂岩礫の大きさもやや小振りである。しかし、焼けた粘土塊が含まれていることから、火の使用も考えられ、黒色チャート礫が含まれていることや、炉に重なること、土器・石器・砂岩礫が集中していることとあわせて、SB1001・SB1006と同様な集石遺構と考えられる。

出土遺物（第43～46図）

覆土から弥生土器片512点、石鏃2点、打製石庖丁1点、サヌカイト片13点、石英1点、結晶片岩片11点が出土している。また判然と区分はできないものの、集石部分からは、弥生土器片904点、石鏃2点、スクレイバー1点、打製石庖丁5点、磨製石斧1点、叩石1点、砥石1点、調整痕のあるものを含めてサヌカイト片55点、石英1点、黒色チャート礫1点、結晶片岩片18点、粘土塊1点が出土している。以下、まとめて報告する。

199～206は蝶形土器である。広口壺形土器のうち199～201は朝顔形に大きく開く口縁部をもつ。いずれも端部をやや拡張させ、端面は線状の刻目（199）、無文（200）、刺突による刻目（201）が施されている。口縁部の開きのやや緩やかな広口壺（202）は端部上端に刻目、端面は簾状文が施される。頸部端に指頭压痕文突帯のあるもの（203）、体部上半に櫛描の波状文・直線文が施されたもの（204）、底部には平底（205）と、上げ底（206）が認められる。

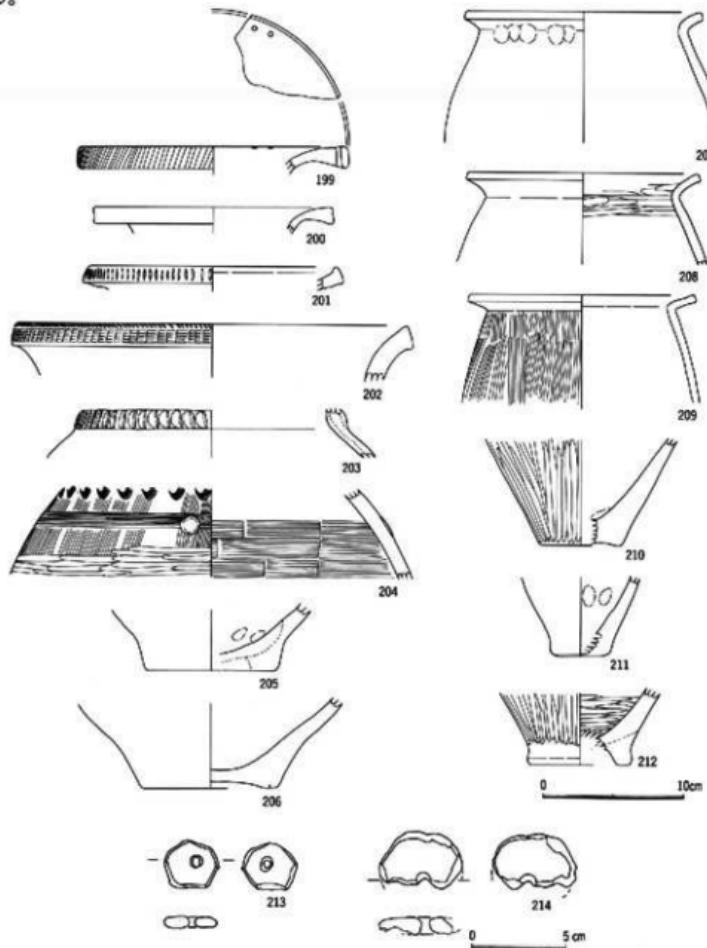
蝶形土器は、口縁部は「く」の字状に屈曲して外反し、端面は平坦におさめる（207～209）。底部は平底である（210・211）。

底部212は、内面がヘラミガキで丁寧に仕上げられており、鉢形土器と考えられる。

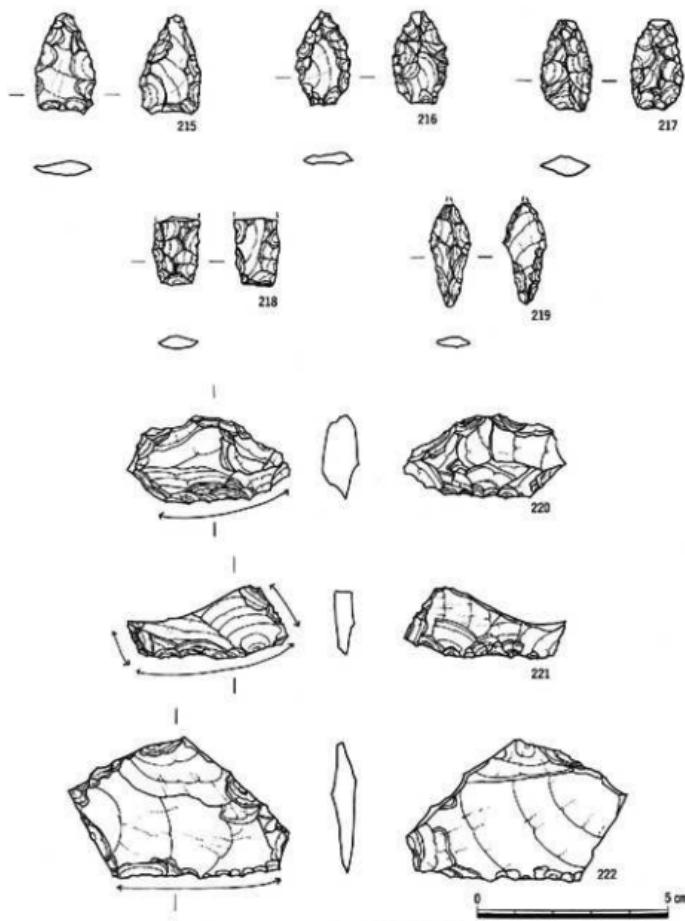
土製紡錘車213・214は、いずれも土器片利用のものである。

215～219は石鐵である。平基無茎・円基無茎がそれぞれ2点ずつあり、219は凸基有茎鐵である。

220～222は、スクレイパーである。両面調整あるいは両極打法による刃部形成を行っている。



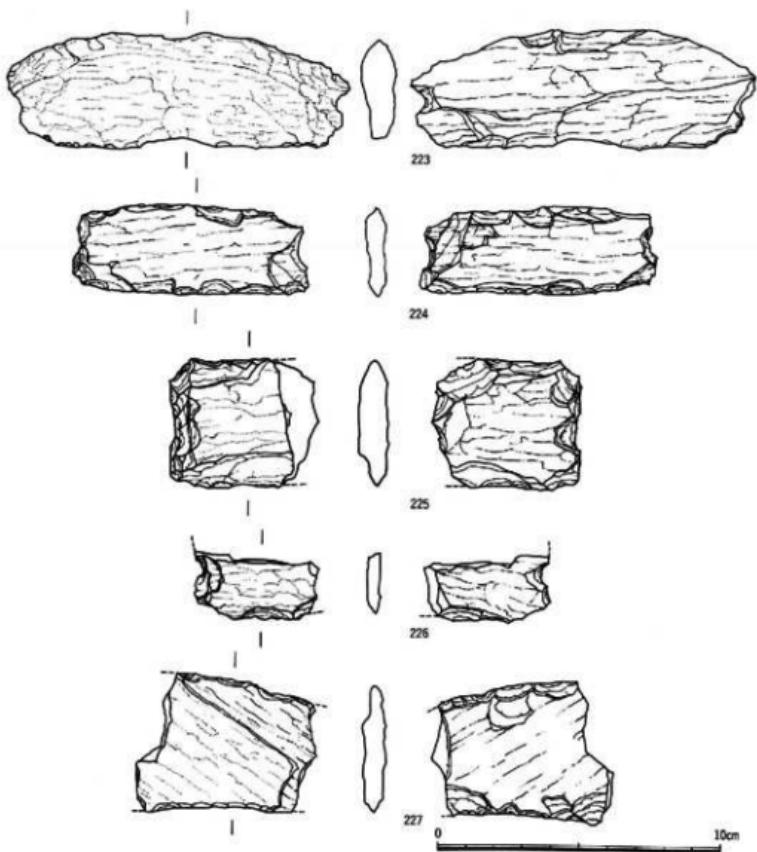
第43図 SB1010出土遺物実測図 (1)



第44図 SB1010出土遺物実測図 (2)

223～227は打製石庖丁である。223は、原縁から剥ぎ取った剥片をそのまま利用し両端に抉りを施している。224は長方形に形を整え、抉りをつけたもの。226は欠損品であるが端部に抉りが施されている。

228は石鎌、先端を欠損しているが、基部の上下端が抉られている。229は扁平片刃石斧である。全面を丁寧に磨いている。230はキリョク岩円縞を利用した叩石。231～233は欠損して

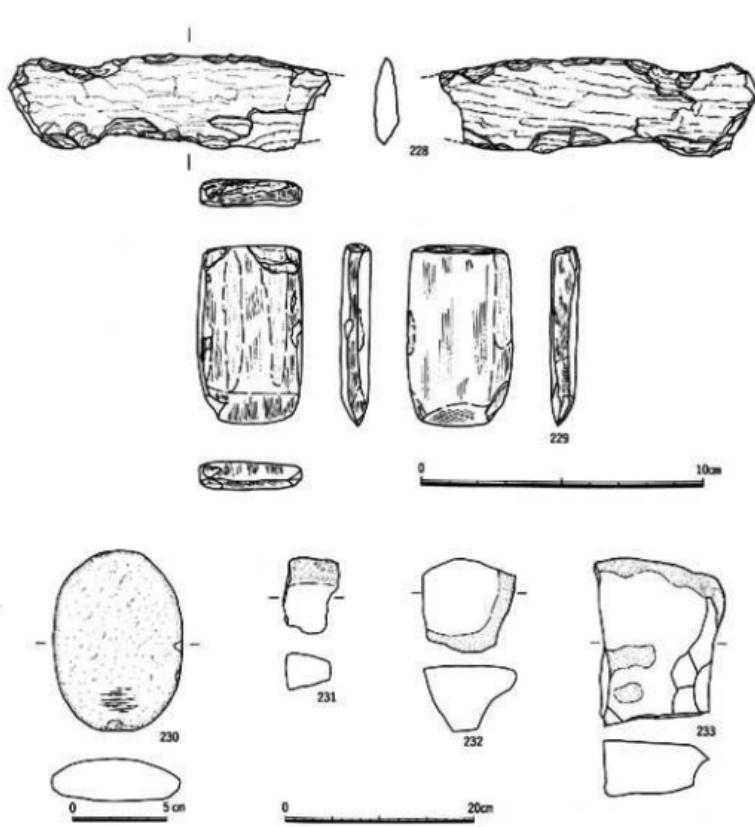


第45図 SB1010出土遺物実測図 (3)

いるが砂岩円礫を利用した磁石である。

竪穴住居跡 (SB1011) (第47図)

第8調査区 (Z・AA-28・29) で検出された。半分が調査区外に延びているが、ほぼ円形の竪穴住居跡である。検出規模は、検出部分の最大径が5.8mを示す。深さは15cm程度、覆土は2層に分層できる。周壁溝・炉ともに検出されていない。P-3またはP-4と、P-11



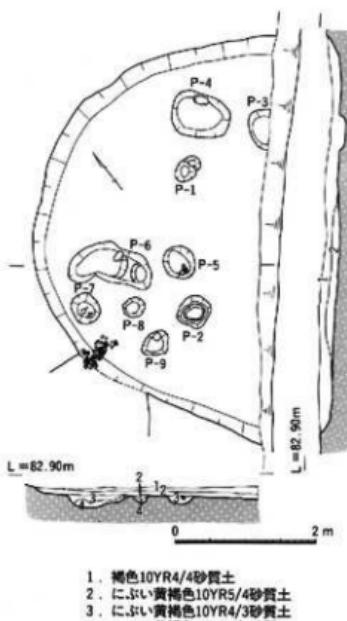
第46図 SB1010出土遺物実測図 (4)

が主柱に関わる柱穴ではないかと考えられる。両柱穴間距離は2.1mである。

出土遺物

覆土からは、弥生土器片226点と調整痕のあるサヌカイト剝片1点が出土しているのみである。

壺形土器のうち、234は広口壺形土器、口縁部は朝顔状に開き、端部は平坦におさめるが、2孔ずつ対面に、また3孔ずつこれも対面に焼成前に穿孔されている。235は朝顔状の口縁部をもつ広口壺だが、口縁部が屈曲して外反していることに特徴がある。236は壺形土器の頸部、



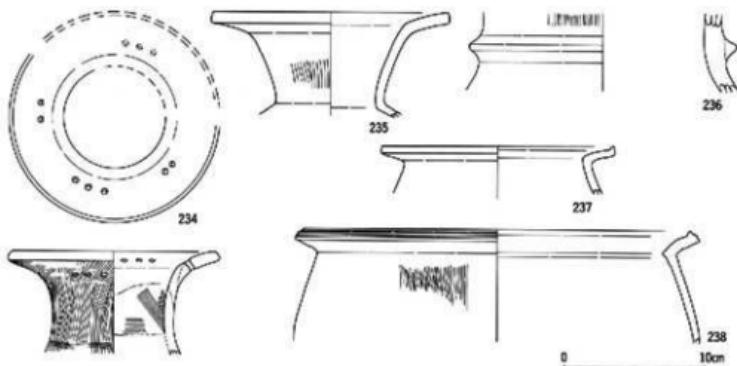
断面三角形の突帯を巡らしている。壺形土器は、鋭く屈曲して外反する口縁部をもち、わずかに上方に拡張する。端面は無文のもの(237)と、2条の凹線が施されたもの(238)がある。

竪穴住居状遺構 (SB1003) (第48図)

第7調査区中央部(W・X-21・22)で検出された。検出規模は長軸5.72m、短軸5.16mの角ばった不整梢円形を呈している。深さは18cm程度、覆土は2層に分層できるが、顕著な違いはない。

周壁際に、間隔は一定しないが、周壁の内板をおさえる径10cm内外の小穴が16カ所検出された。柱穴は、配置から、P-1・2・3・4(または5)の、4カ所と考えられる。柱心間距離は3.2m~3.8mである。

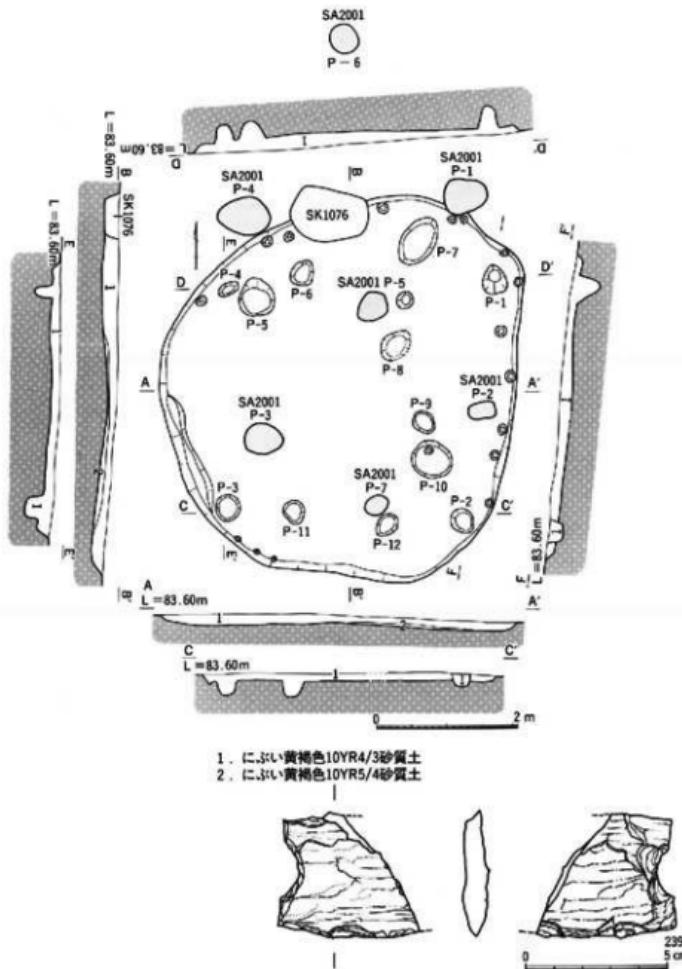
特殊な建物SA2001がこの住居廃絶後に重ねて構築されている(第48図網目の部分)。建物SA2001と同じ4本柱であ



第47図 SB1011遺構・出土遺物実測図

ること、炉が検出されなかったことから、生活目的の住居ではなく、祭祀など特殊な意味をもつ構造物であり、この位置が同様に特殊な意味をもつ場であったことが推測される。

出土遺物



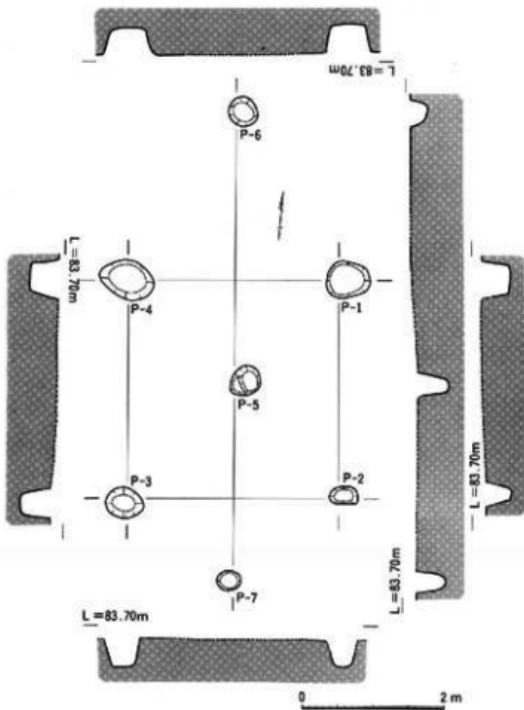
第48図 SB1003遺構・出土遺物実測図

覆土からは、弥生土器片18点と、端部に抉りをもつ打製石庖丁片1点(239)が出土しているのみである。

② 挖立柱建物跡

掘立柱建物跡 (SA2001) (第49・50図)

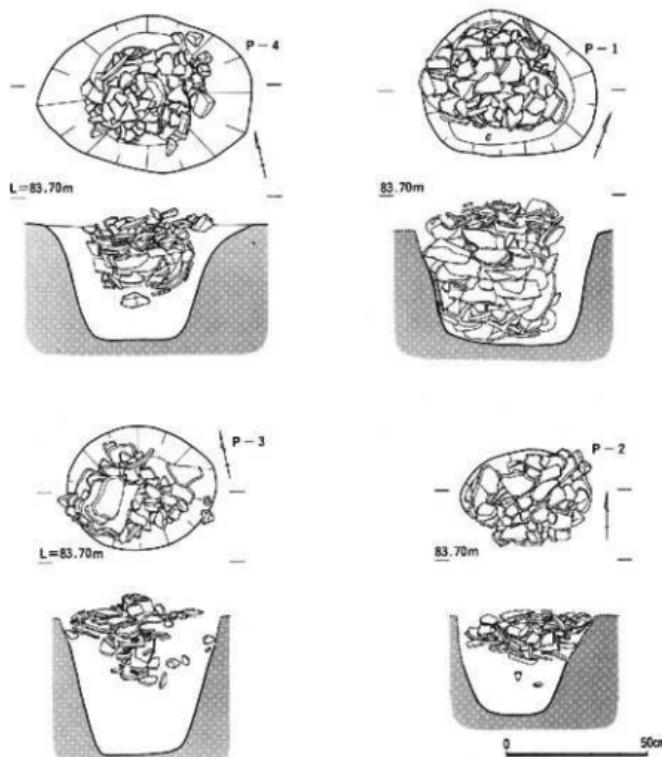
第7調査区中央部(W~Y-21)で、SB1003に重なって検出された。建物は1間×1間、各柱心間距離は3.0mを測る。P-6がやや北に偏在するが、P-6・7は独立棟持柱の可能性があり、P-6・7の柱心間距離は6.56m、棟の方向はほぼ真北を指す。中心柱穴P-5は、各主柱穴の対角線の交点にほぼ位置する。各柱穴の規模は、P-1が長軸63cm、短軸50



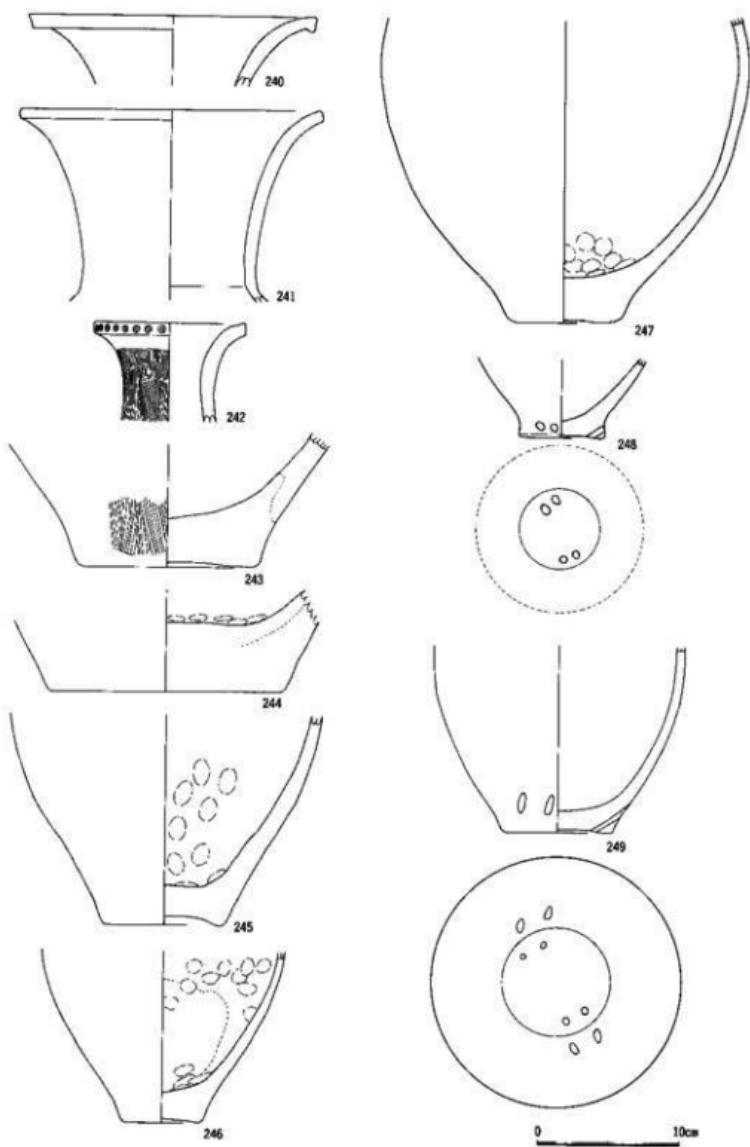
第49図 SA2001遺構実測図

cmで、深さは40cm、P-2は40cm×35cmで深さ36cm、P-3は55cm×45cm×43cm、P-4は80cm×55cm×40cm、P-5は46cm×39cm×44cm、P-6は径43cmで深さ23cm、P-7は径35cmで深さは41cmである。覆土はいずれも褐色10YR4/4である。

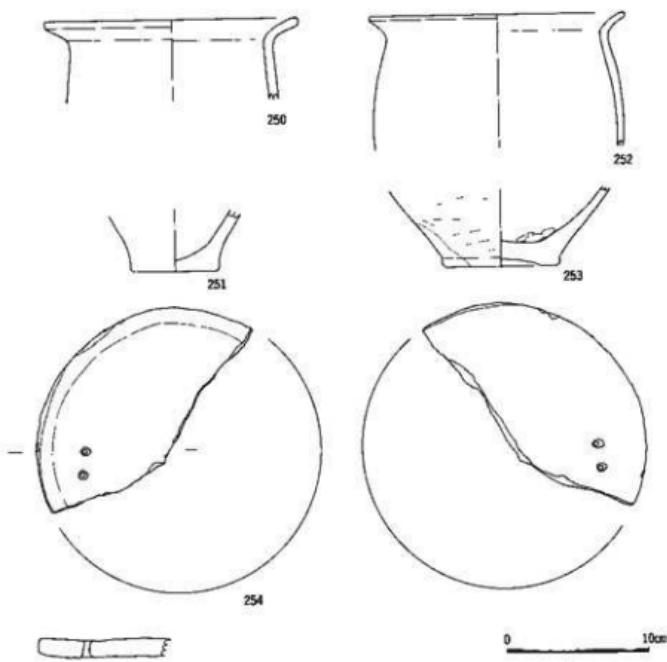
この特異な構造の建物は祭儀用の特殊な目的で建てられたと考えられる。それはP-1～4の各主柱穴には、弥生土器が詰め込まれていることからもうかがえる(第50図)。土器は意図的に破碎し、特にP-1は、最下層に底部を詰め込み、その上を胴部および口縁の破片、最上部は細片と砂岩礫で被覆している。各柱穴に詰め込まれた土器は、被熱により変形したもの、互いに接合し合うものがある。この建物の廃絶の際、火を使用したマツリで破碎した



第50図 SA2001主柱穴 遺物出土状況実測図



第51図 SA2001主柱穴 出土遺物実測図 (1)



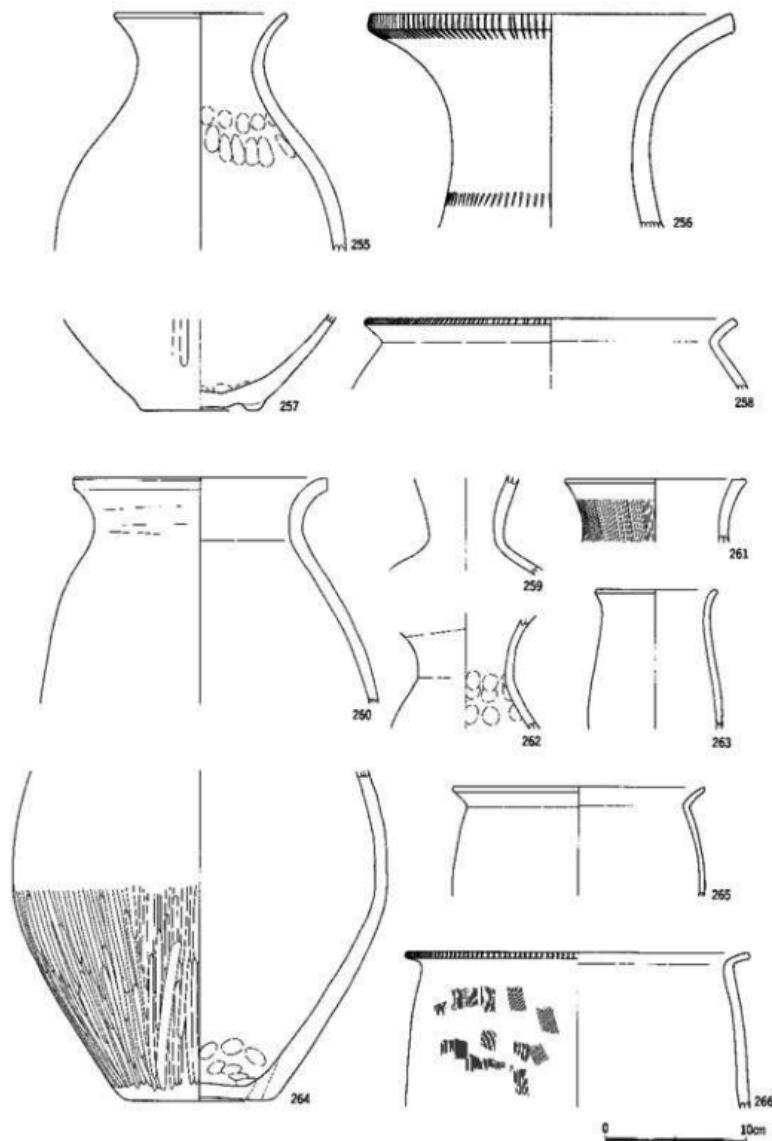
第52図 SA2001主柱穴 出土遺物実測図 (2)

後、各柱穴に分納したものと考えられる。

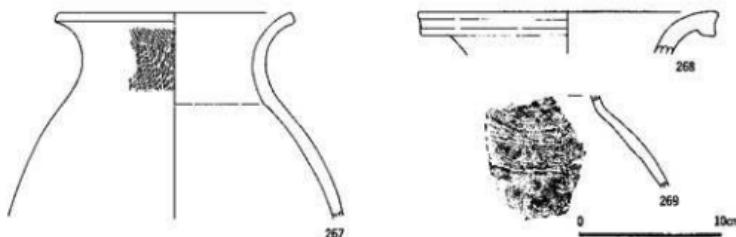
出土遺物 (第51~54図)

各柱穴からの出土遺物は、P-1から弥生土器片597点、サヌカイト片2点、P-2からは弥生土器片192点、P-3から弥生土器片161点とサヌカイト片1点、P-4からは、弥生土器片465点と磨製石斧1点、結晶片岩片1点が出土している。挿図では、P-1から順に、柱穴ごとのまとまりで掲載した。240~254がP-1出土、255~258はP-2、P-3出土は259、P-4は260~266・270、267~269は各柱穴出土の接合品である。

壺形土器のうち、広口壺は口頸部が大きく開く形態のもの (240・256・268) と開く度合いの小さいもの (241・242・255)、頸部が短く、口縁部の外反は中間的なもの (260・267) がある。大きく開く形態のものは、端部を下方に拡張させる240・268や端面から外面にかけて線状の刻目を施すものがある (256)。他に口縁端部に竹管の押捺文がみられる (242)。直口壺は1点だけみられる (261)。



第53図 SA2001主柱穴 出土遺物実測図 (3)



頸部から体部上半にかけては、頸部から体部に屈曲しないで緩やかに移行するものがある(255・256)。このうち256は頸部端に刺突列点文を巡らす。269のように、体部上半に櫛描文のある個体もみられる。263は被熱によるものか、変形しているものをそのまま実測しているので違和感のある形状を呈している。

体部は球形に近い形状のもの(247・249)と、断面横円形となるもの(245・246・264)がある。底部は平底のもの(244など)と、わずかに上げ底のもの(245など)があるが、なかに底部端に2孔ずつ対面に穿孔する248・249がみられる。

243・244はかなり分厚く、大型品の底部である。 第54図 SA2001主柱穴 出土遺物実測図(4)

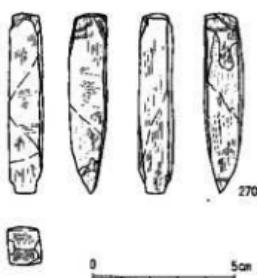
彫形土器は、屈曲して外反する口縁部を持つ。口縁端部は曖昧におさめるものが多いが、中に平坦におさめ、端面に刻目を持つ258・266がある。

253は、内面が丁寧に仕上げられているので、鉢形土器の底部と考えられる。254は、円板状の蓋。端に2孔穿孔がなされている。

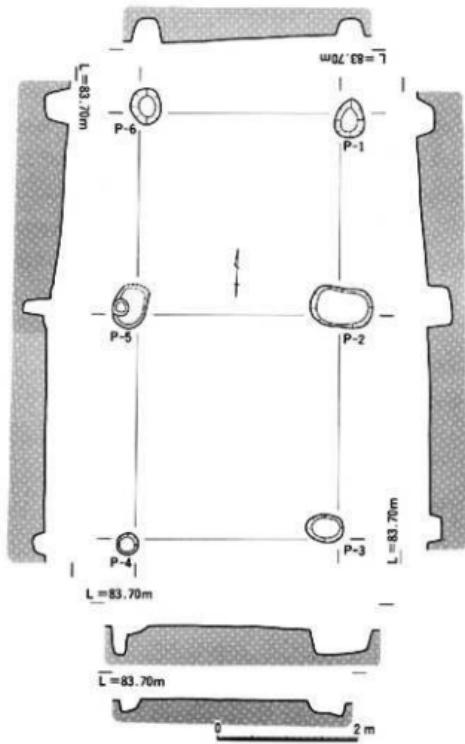
270は緑色片岩製の小型方柱状片刃石斧である。

掘立柱建物跡 (SA2002) (第55図)

第7調査区南西部(V・W-19)で検出された。梁間1間×桁行2間(3.0m×6.0m)の建物である。柱心間距離は2.8~3.3mで、棟の方向はほぼ真北を指す。柱穴からの出土遺物はなく、時代を特定するのは困難であるが、中世と考えられる建物と規模も方向も異なることから、弥生時代の可能性が高いと考えられる。倉庫用の建物と考えられるが、これに類す



る建物は他に確認できなかつた。



第55図 SA2002造構実測図

このうち、広口壺形土器276は中に土を詰め埋置されたものとみられ、他は押しつぶされた状態であった。

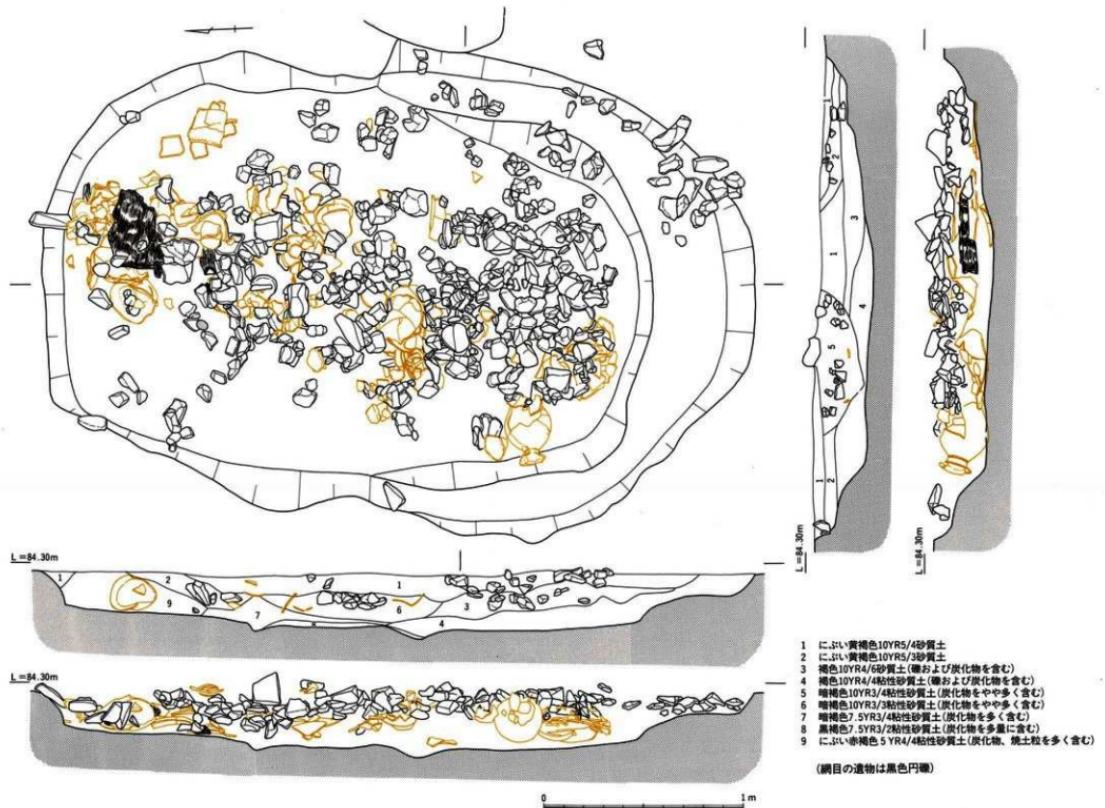
土器は4群に分離することが可能で、壺形土器と壺形土器、鉢形土器あるいは高杯形土器を合わせ口、または一方を蓋とした状態が推定できるものがある。また、断面では再掘削によるものと考えられる堆積状況を観察した。

北部端に長さ約37cm、幅約26cm、厚さ6~7cm程度の炭化材が壺形土器285・286のうえに載った状態で検出された。また、底面には焼土がみられる。中央部南北に長く1cm程度の炭化物を多量に含んだ層が底面に広がっている。また、土壤覆土の主な部分は、地山のものと

③ 集石遺構

集石土壤(SK1008) (第56・57図)

第1調査区(V-13)で検出された。長軸3.6m、短軸2.2m、深さ25cmの隅丸方形形状を呈する。長軸はほぼ南北に添い、底面はほぼ平坦で、北半は直立に近い形で立ち上がり、南半は2段の階段状を呈す。中央部に長く、主軸をやや北北東にふりながら、10~15cm大の砂岩角円礫多数と弥生土器を検出した。砂岩礫は付近に多数存在するが、遺物包含層に含まれるものより大きめで、中央部に集中していることから、意識的に被覆されたものであろう。壺形土器5個体、壺形土器4個体、鉢形土器1個体、高杯形土器1個体が、ほぼ完形のまま横倒して、安置された形で、出土した(第57図)。



第56図 SK1008遺構実測図

みられる。

以上のことから、土壤を掘り下げ、火を使用した祭祀の直後に埋められ、新たな小土壤を掘り、それぞれに土器をほぼ東西方向に安置して、疊で被覆したものと考えられる。他に、黒色円錐、打製石庖丁、スクレイパー、石槍片が出土している。このような状況からみると、土器棺を主体とする集団墓の可能性が考えられる。

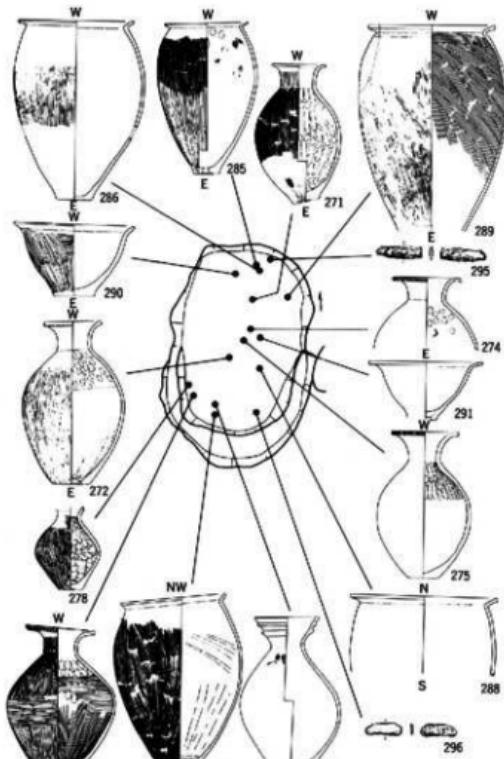
出土遺物

弥生土器は破片数にして1,195点、石槍1点、スクレイパー1点、サヌカイト片6点、打製石庖丁3点、黒色チャート疊2点である。

広口壺形土器271～276

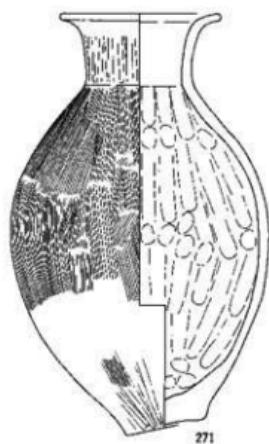
は、いずれも朝顔状に大きく開く口縁部をもつ。口縁端部に刻目を持つ274～276や、頸部下端に指頭圧痕文突帯を巡らす276がある。体部は断面楕円形のやや細長い形状を呈している271・272・275に比して、276は最大径部分がやや張り、その部分はヨコヘラミガキで仕上げられている。277は漏斗状に広がる口縁部で、頸部に断面三角形の突帯を巡らせる。最大径部分がやや張る体部である。角閃石が胎土に混じり、讃岐地方からの搬入土器とみられる。278は口縁部他を欠損する小型の壺形土器である。体部中央部の最大径がやや張る形状である。281は把手である。壺形土器の体部上半に縦に付くものとみられるが、本体は出土していない。薄い器壁で中空となっている。

壺形土器は、口縁部はすべて「く」の字状に屈曲して外反する。端部のつくりには丸くお

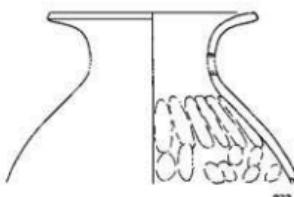


(数字は遺物番号、N・S・E・Wは土器の出土方向をあらわす)

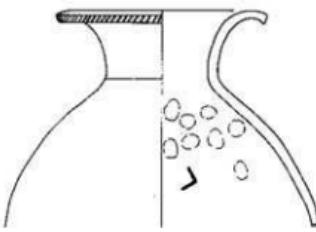
第57図 SK1008主要遺物出土地点図



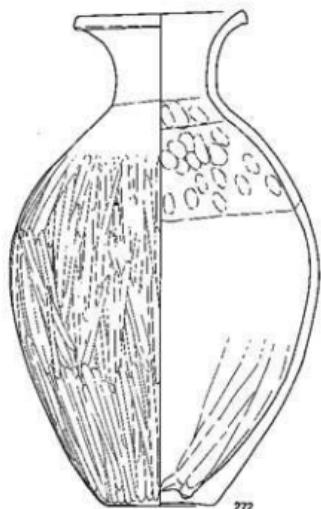
271



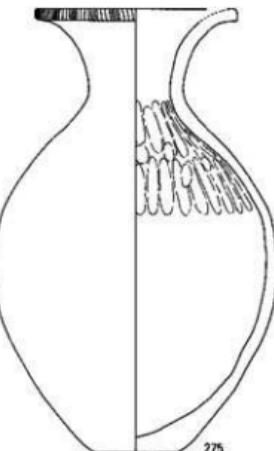
273



274



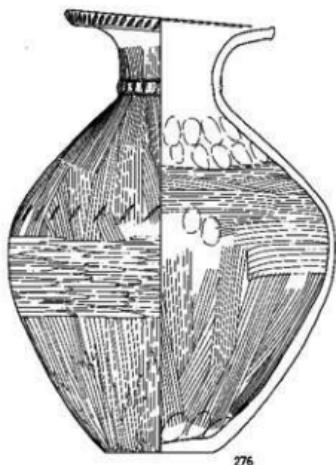
272



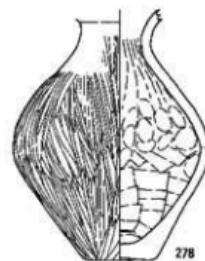
275

0 10cm

第58図 SK1008出土遺物実測図 (1)



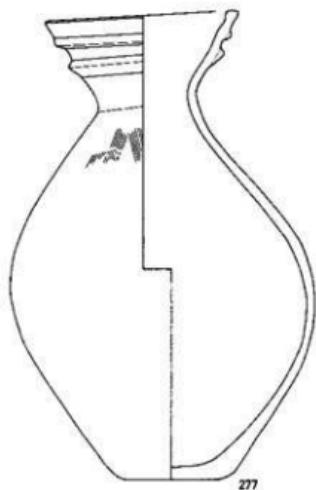
276



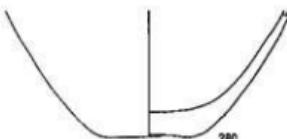
278



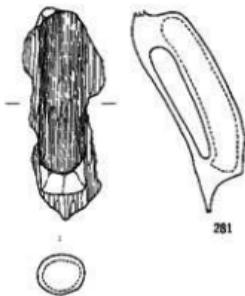
279



277



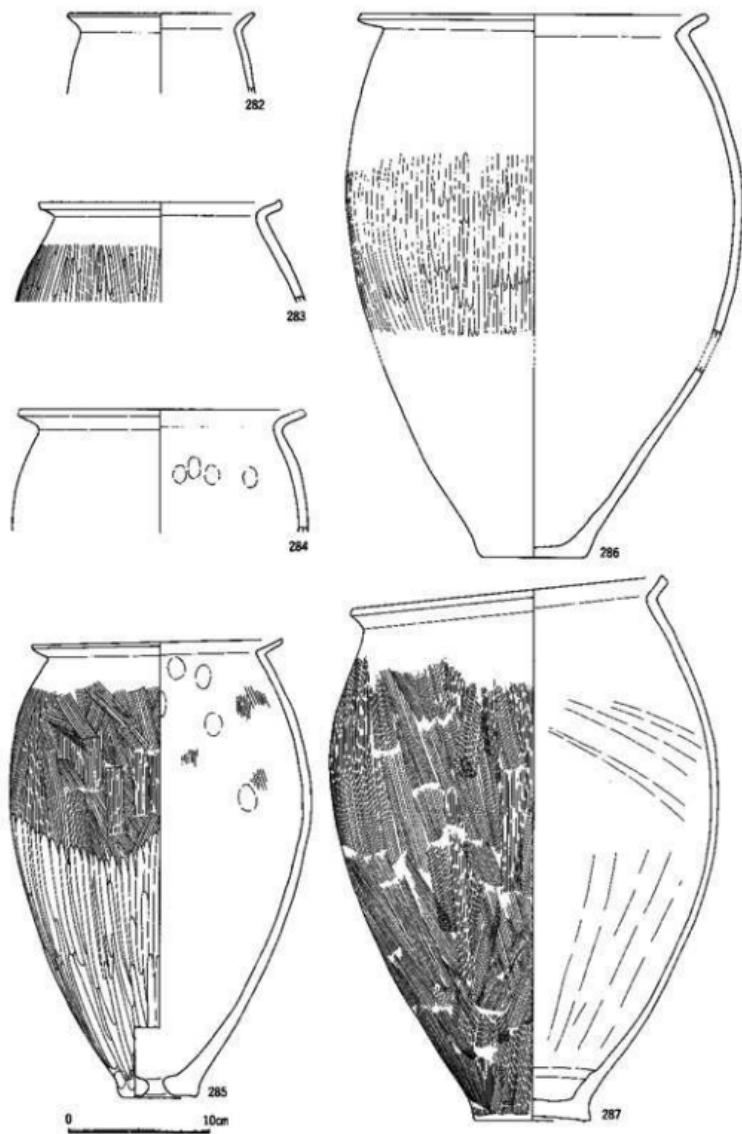
280



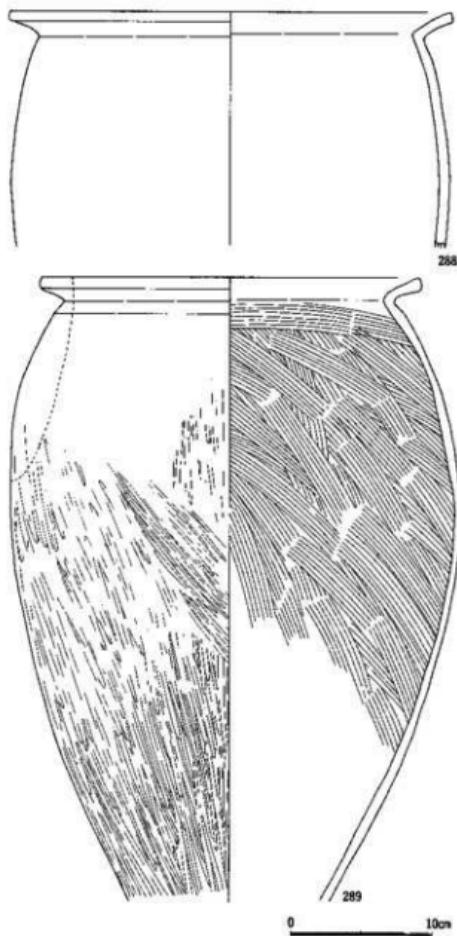
281

0 10cm

第59図 SK1008出土遺物実測図 (2)



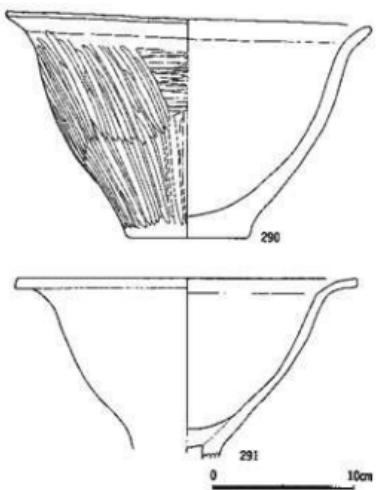
第60図 SK1008出土遺物実測図 (3)



第61図 SK1008出土遺物実測図 (4)

さめる282・285・286、方角状におさめる287・288、やや肥厚させる283・289がある。283も胎土が異質であることから、搬入されたものとみられる。

鉢形土器290は体部が半球状で平底、口縁部は屈曲して外反する。291の高杯形土器は290と同形態の杯部に脚が付く。円板充填法が用いられている。



第62図 SK1008出土遺物実測図(5)
第5図の(5)は、SK1008出土の遺物で、主に砂岩角円錐・砥石とともに、赤く焼けた状態を示すもの、土器も器壁が変質しているものがある。遺物を含む層にも、炭化物粒や焼土粒を含み、遺物が埋置された前後に火が使用されたことを示す。

土器はその多くが、破損しているものの、完形のままの状態で埋置されたものとみられる。特徴的なのは、大型の壺形土器(第68図317・318)が、中心部分で出土していることである。他にも、石底盤などの石器を少量ともない、黒色のチャート円錐が1個出土している。SK1008とはやや状況が異なるが、被覆疊堆・火の使用・黒色円錐等共通点も多く、大型土器棺を主体とする墓の可能性を考えられる。

出土遺物(第65~72図)

弥生土器片が壺形土器を中心に、破片数3,475点出土している。他に、石錐1点、スクレイバー1点、サスカイト片34点、打製石底盤1点、磨製石斧1点、砥石が破片数13点出土している。

広口壺形土器297~312は朝顔状に大きく開く口縁部を持つ。297~299・301・302は口縁部・頸部ともに無文、300は断面三角形の突帯を頸部下端に巡らす。303は頸部下端に突帯を持っていた可能性があり、体部中位に列点文を有す。304~309は頸部下端に指頭ないしはヘラ状工具による圧痕文を施した突帯を巡らす。さらに304~306は口縁端部に刻目を持つ。308は口

292は石楕片、先端も基部も欠損している。293は横長の剥片を利用したスクレイバー、刃部は両面調整による。294・295は結晶片岩製の打製石底盤で、欠損品を含め粗雑なつくりである。296は石錐とみられる。

集石土壙(SK1014)(第64図)

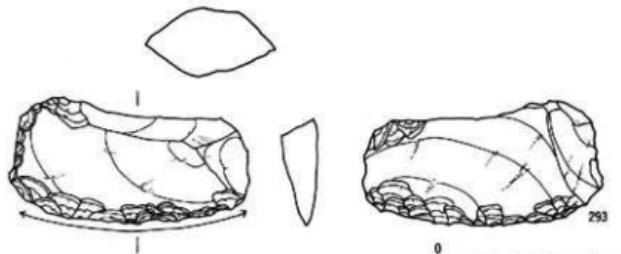
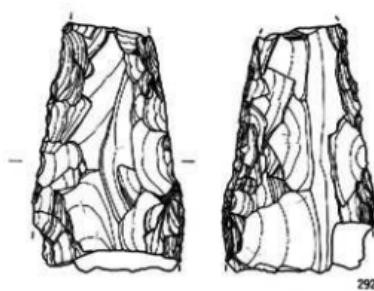
第1調査区(W-14)で検出された。一部調査区外にのびているが、長軸2.2m、短軸は検出部分で0.75m、全体としては長梢円形、断面形はU字状を呈し、深さは25cmを測る。土壙中央部にやや北北西に主軸を振りながら、検出面から10cm程度盛り上がり、壺形土器を中心に、土器が折り重なるように集中し、その上に砂岩角円錐・砂岩

製磁石の破片が被覆された状態で出土した。

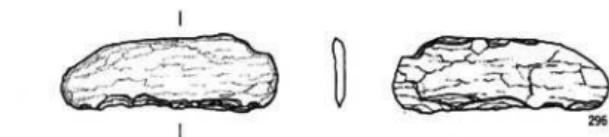
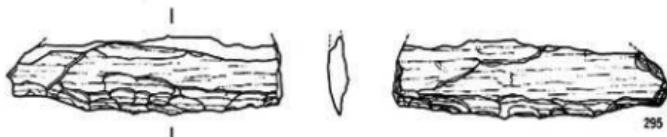
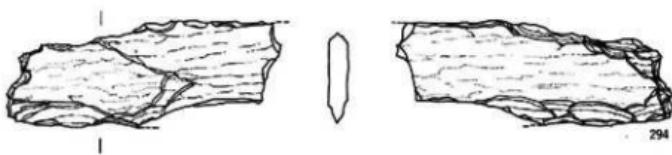
砂岩角円錐・砥石とともに、赤く焼けた状態を示すもの、土器も器壁が変質しているもの

がある。遺物を含む層にも、炭化物粒や焼土粒を含み、遺物が埋置された前後に火が使用さ

れたことを示す。

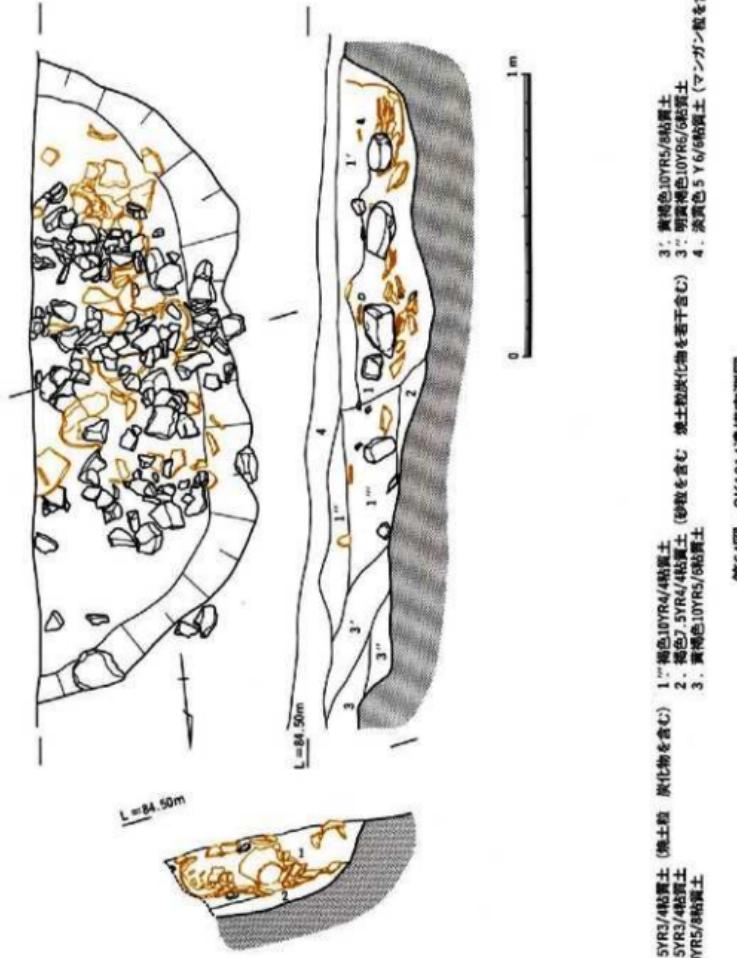


0 5 cm

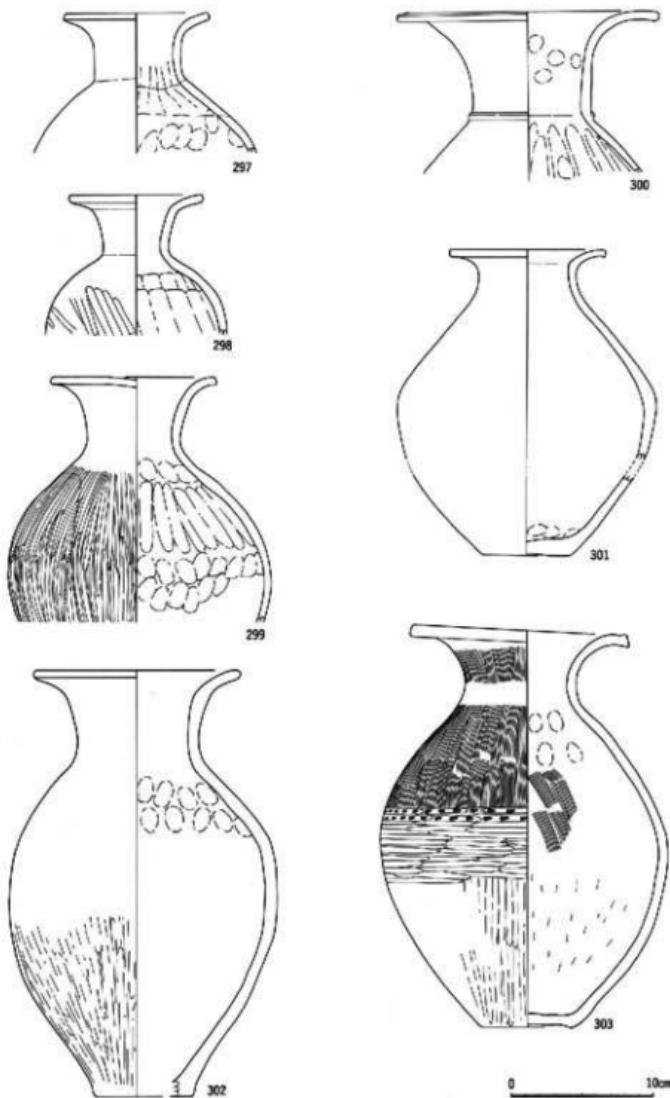


0 10cm

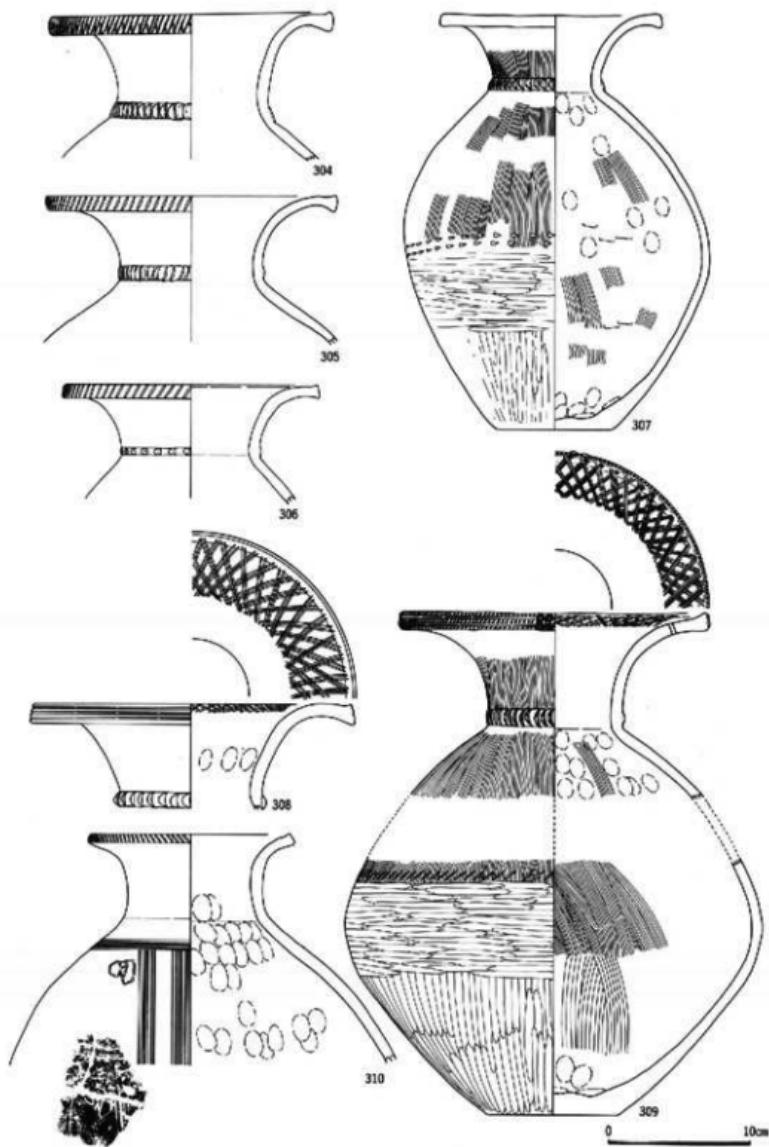
第63図 SK1008出土遺物実測図 (6)



第64図 SK1014土壤剖面図



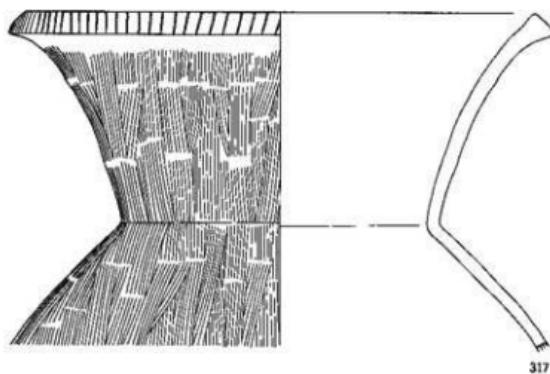
第65図 SK1014出土遺物実測図 (1)



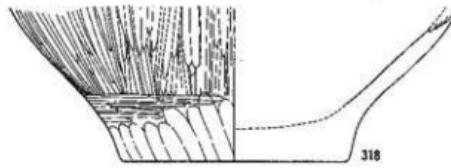
第66図 SK1014出土遺物実測図 (2)



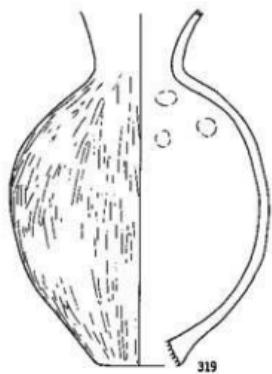
第67図 SK1014出土遺物実測図 (3)



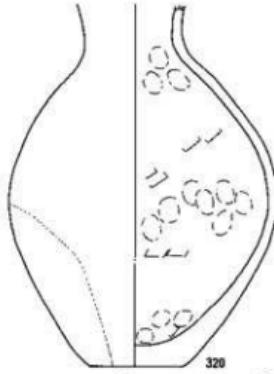
317



318

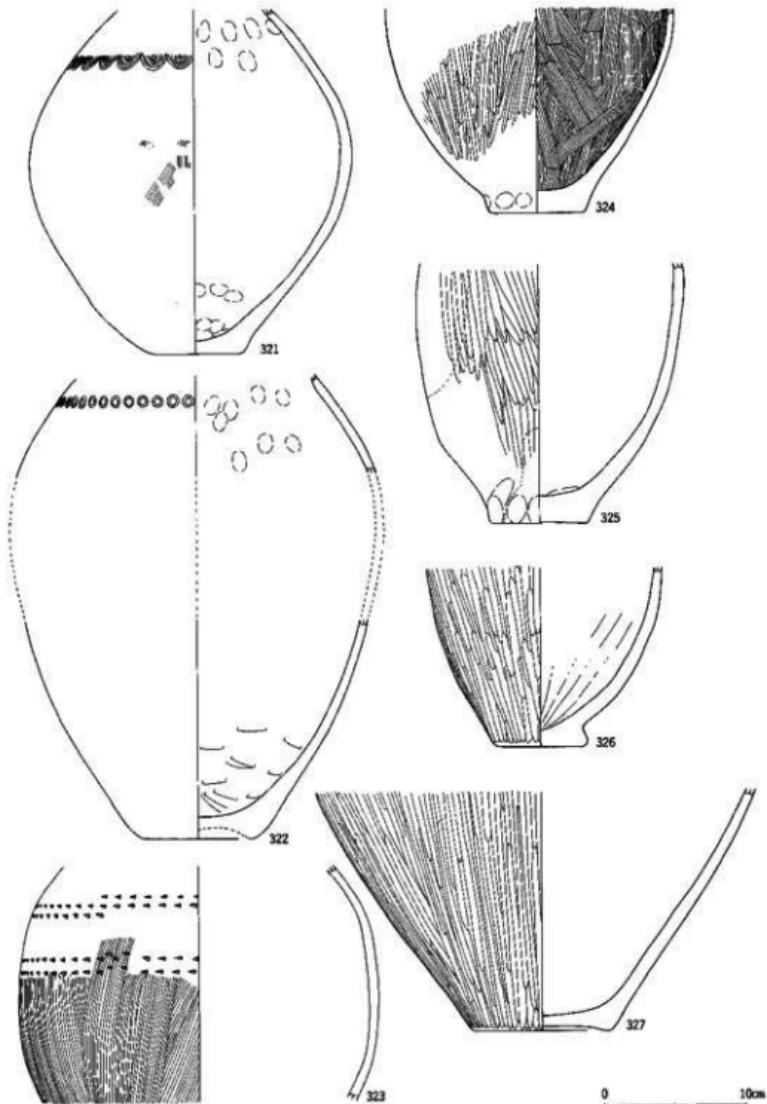


319

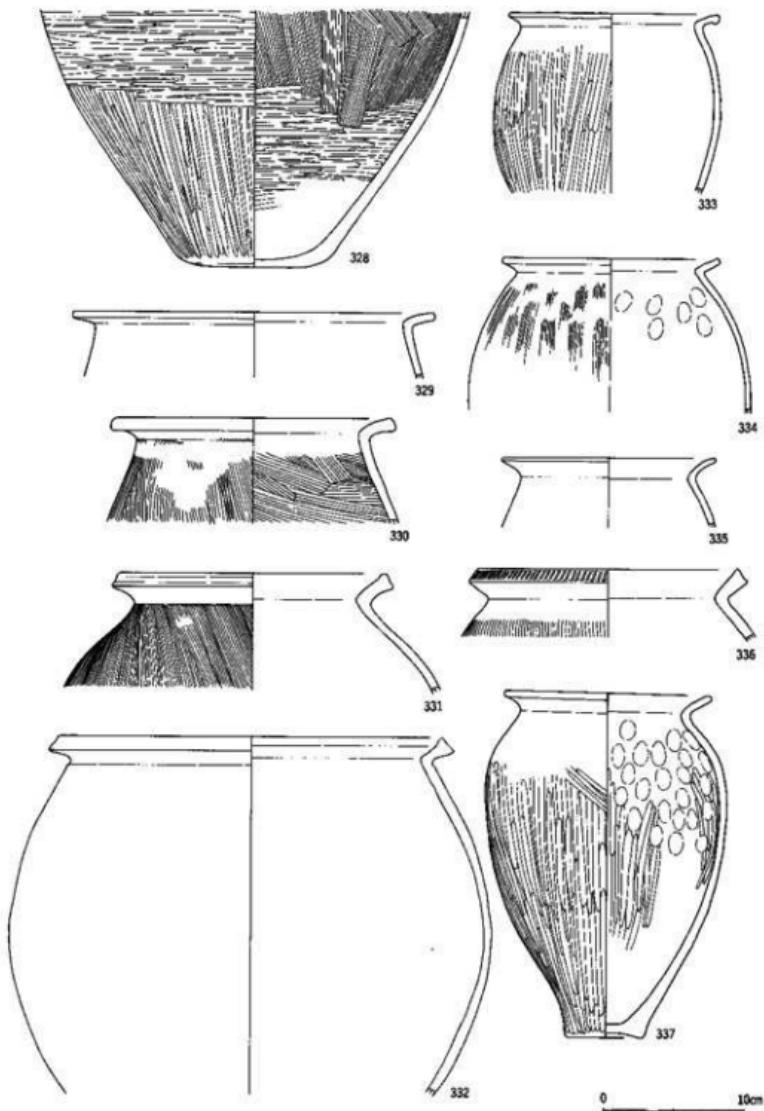


0 10cm

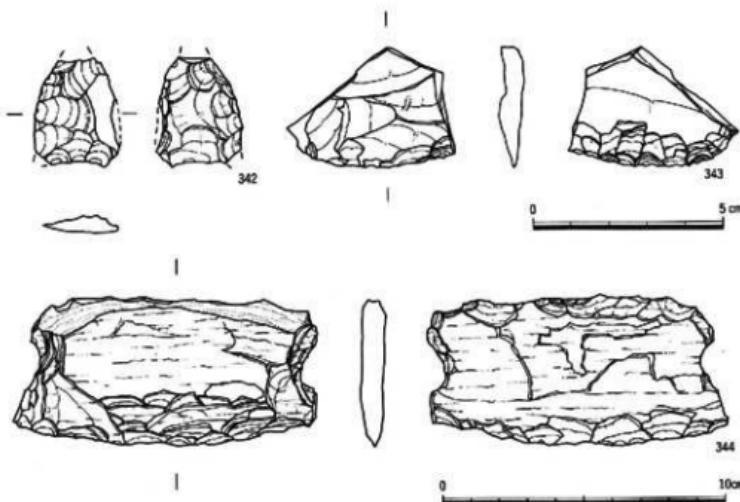
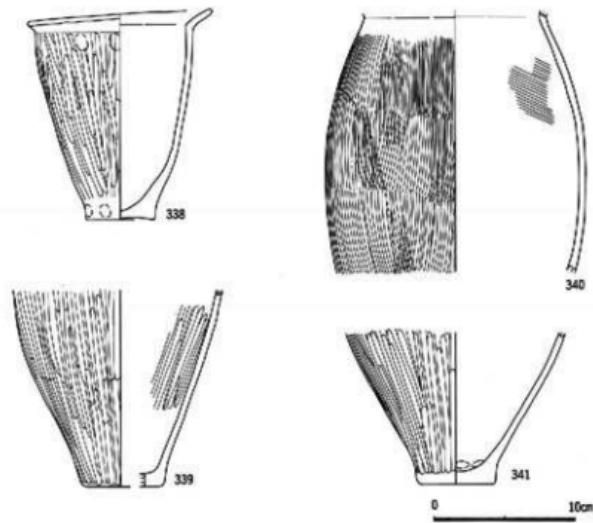
第68図 SK1014出土遺物実測図 (4)



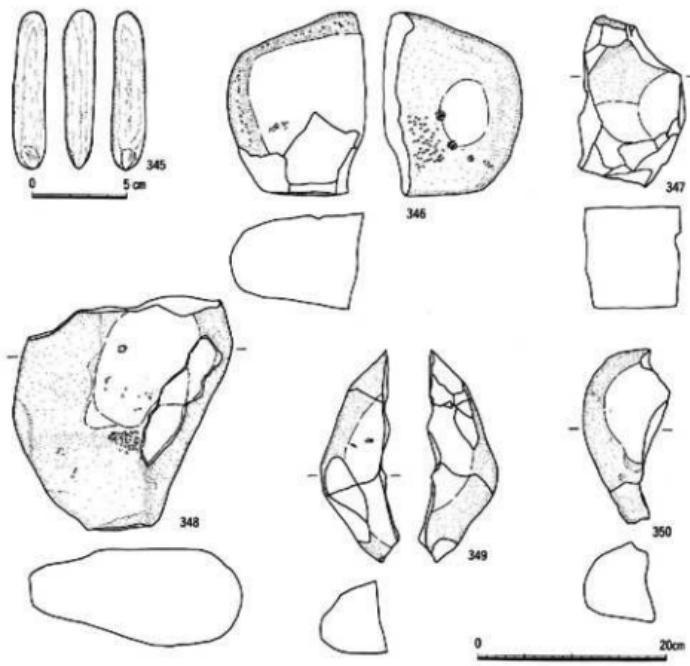
第69図 SK1014出土遺物実測図 (5)



第70図 SK1014出土遺物実測図 (6)



第71図 SK1014出土遺物実測図 (7)



第72図 SK1014出土遺物実測図 (8)

縁端部に3条の凹線文を、309は2条の凹線と刻目を施し、口縁上面に櫛描の斜格子が描かれる。309は体部も他の個体に比して極端に最大径部分が張る形状を示している。310はわずかに外反する短い口縁部の端面に刻目を持ち、体部に櫛描直線文を縦横に描く。体部上半にヘラ描きの記号文らしきものが観察でき、注目される。311は櫛描の直線文・波状文・簾状文が特徴的である。312は大きく外反し、垂下する口縁部、その上面から頸部内面に刺突列点文・櫛描波状文が描かれた特異な土器で、倒卵形の体部上半には櫛描文が施される。313は直口気味で、やや外方に広がる口頸部の下端に断面三角形の突帯を、315は同様で突帯を持たない。316は、漏斗状に広がる口頸部に2条の突帯を巡らし、体部は最大径部分で強く張る。317・318は同個体である。体部の破片も数多くあるが、接合不可能であった。緩やかに外反する口頸部を持ち、端面に刻目を施す。321・322のように円弧文・竹管文を施すものもある。体部

の形状は肩の張らない断面楕円形のものが主流で、ナデ調整が最も多く、タテヘラミガキが次に目立つ。

變形土器は、329～337は「く」の字状に屈曲して外反する口縁部を持つが、口縁端部を肥厚させるもの、丸くおさめるものがあり、体部も球形に近いものと、卵形に近いものがある。336は肥厚する口縁端部にヘラ状の工具で刻目を施すが、壺形土器に分類される可能性もある⁽¹⁾。338はやや形態が異なり、鈍角に屈曲して外反する短い口縁部を持つ。339～341は變形土器の体底部、いずれも器壁は薄く仕上げられている。

342は石鎌。先端、脚端等を欠損する。343はサヌカイト製のスクレイバーである。刃部は両面調整による。344は結晶片岩製の打製石庖丁。両端に抉りを施し、完存品である。345は棒状を呈する緑色片岩の先端部内側に研磨された痕跡のある石器である。円柱状石斧の米製品とみられる。346～350はいずれも砂岩製の砥石である。自然面を砥面とし、熱を受けて赤褐色に変色したり、破壊された状態のものが多い。

集石土壤 (SK1016) (第73・74図)

第2調査区(X-15)で検出された。一部が調査区外にのびているが、長軸が検出部分で4.0m、短軸が3.0m、深さは25cmの隅丸方形の土壤である。底面は平坦で、直立に近い形で立ち上がる。長軸は東西方向、その主軸に添い、中央部の3m×1.8mの範囲で弥生土器と10～15cm大の砂岩角円礫が折り重なり、15cm程度盛り上がる形で検出された。遺物群は底面から、5～10cm浮いた状態である。底面には炭化材、および焼土と認められる部分がある。また、15～25cm大の砂岩角円礫が、東西1.7m、南北1.0mの範囲を区画するように点在しており、その内側から、柱状片刃石斧・石斧・白色円礫が出土している。

土器は、完形のまま納められた状態ではなく、壺形・壺形・鉢形・高杯形各器種が、折り重なり、多くは破碎された状態で出土している(第74図)。365の広口壺形土器をはじめ、鉢形土器(419)・高杯形土器(423・424・427)の5個体は完形近くに復元できるが、他は1/2～1/10程度の復元ができる分量の破片の集合である。また、凹線文が施された土器と施されない土器とは混在し、区分できない。

断面では炭化物を含む層など細かな分層が可能であり、3～8層、27層～33層は土坑内の再振削の痕跡とみえるが、土器の破片の分布からは肯定できない。

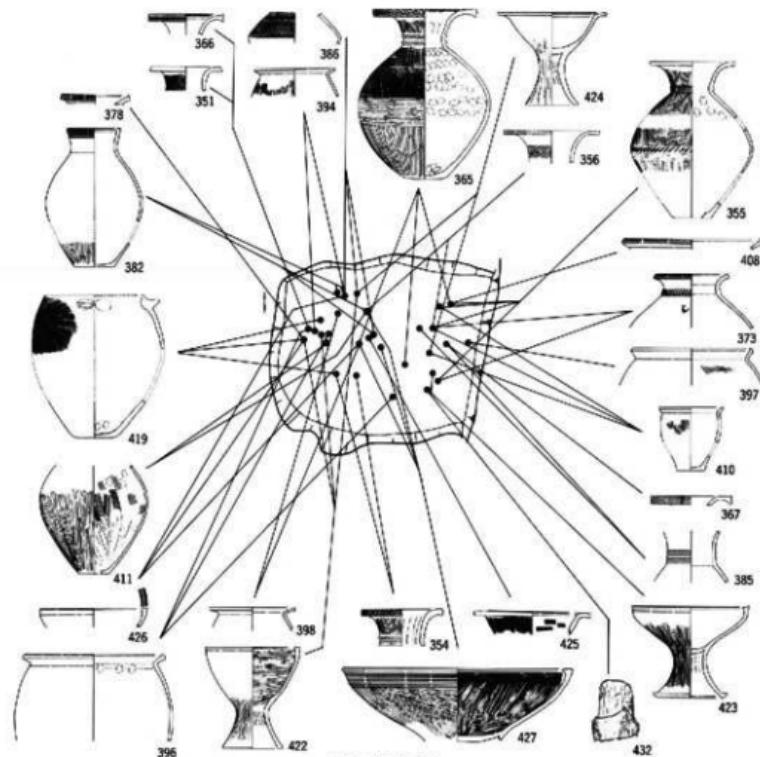
以上のことから、土壤掘削後に火を使用し、埋めた後、砂岩角円礫と土器で被覆したものとみられる。被覆された土器は土壤上で破碎したものと、別の場所で割ったものを両方使用していると思われる。土器棺を主体とするものではないが、墓の可能性が高いと考えられる。

なお、SP1043・1050・1051の3つの柱穴がこの土壤に伴う可能性が考えられる。SP1051では、壺形土器片が1点出土している(第87図-440)が、直接SK1016の出土品とは接合しない。

出土遺物（第75～86図）

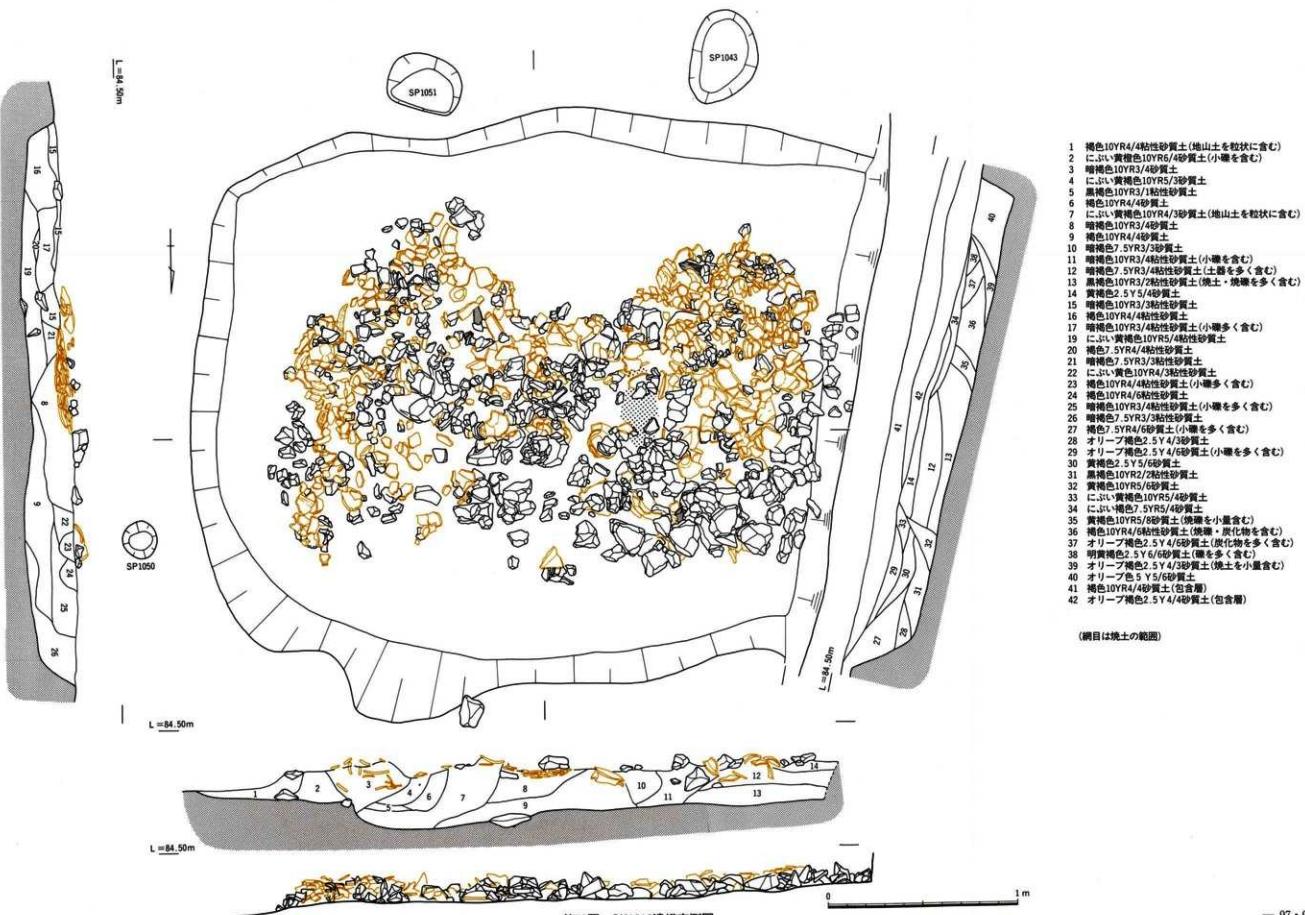
弥生土器片は破片数6,876点を数える。他に土製円板1点、サスカイト8点、結晶片岩6点、石鎌1点、磨製石斧・未製品6点、打製石庖丁4点、台石1点、磁石破片13点、石英円錐4点が出土している。

351～371は胡顔状に大きく開く口縁部を持つ広口壺形土器である。351・352は無文、353は口縁端部1条の凹線、頸部下端に突帯を巡らす。354は口縁端部の斜格子の刻目と頸部下端の断面三角形の2条の突帯、355は頸部下端の圧痕文突帯と、体部最大径付近の貝殻腹縁による圧痕文が特徴的である。356～370はいずれも口縁部上面に櫛描またはヘラ描きの斜格子文または波状文が施されている。そのうえに356・357は頸部に2列の圧痕文、365は口縁端部の刻

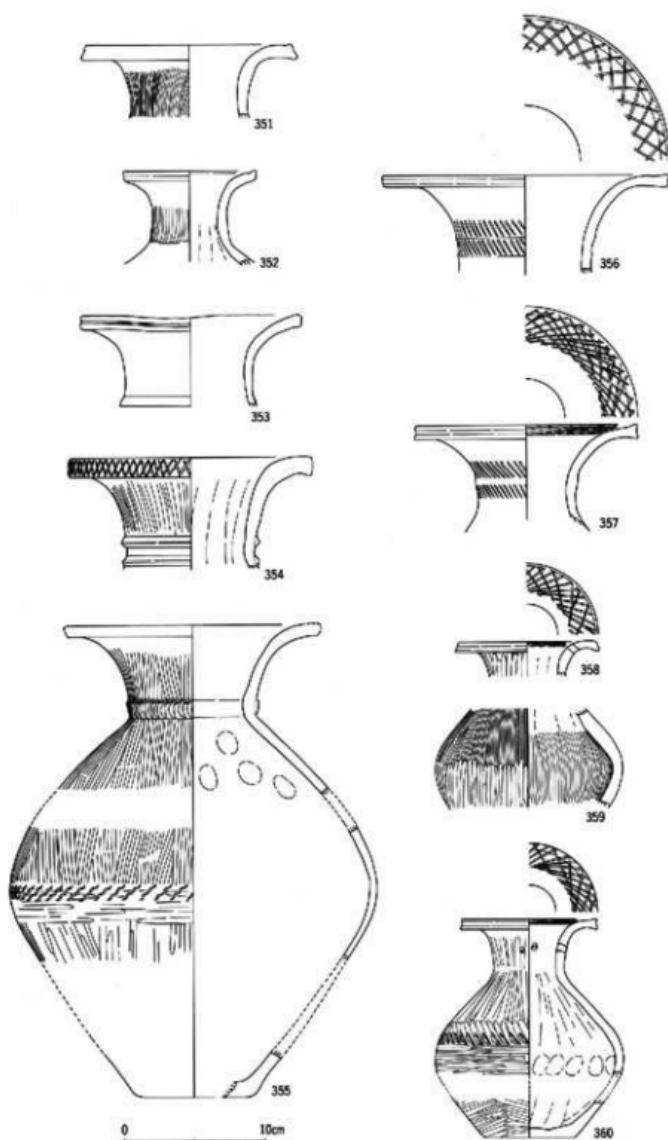


(数字は遺物番号)

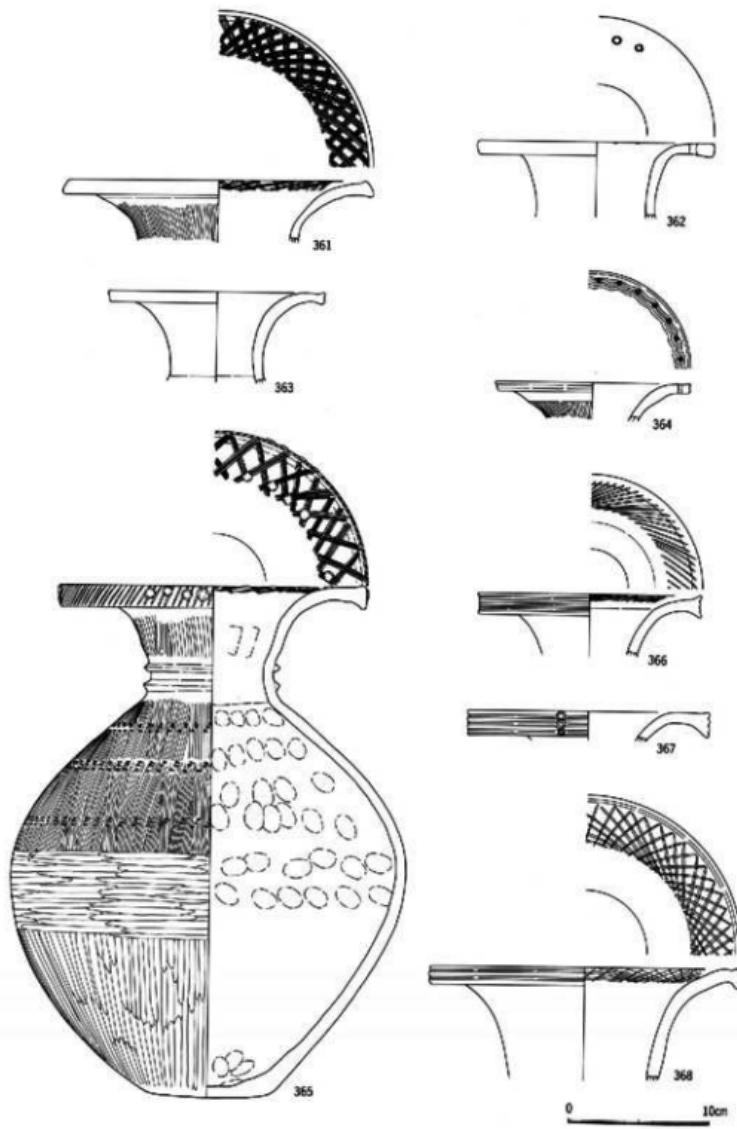
第74図 SK1016主要遺物出土地点図



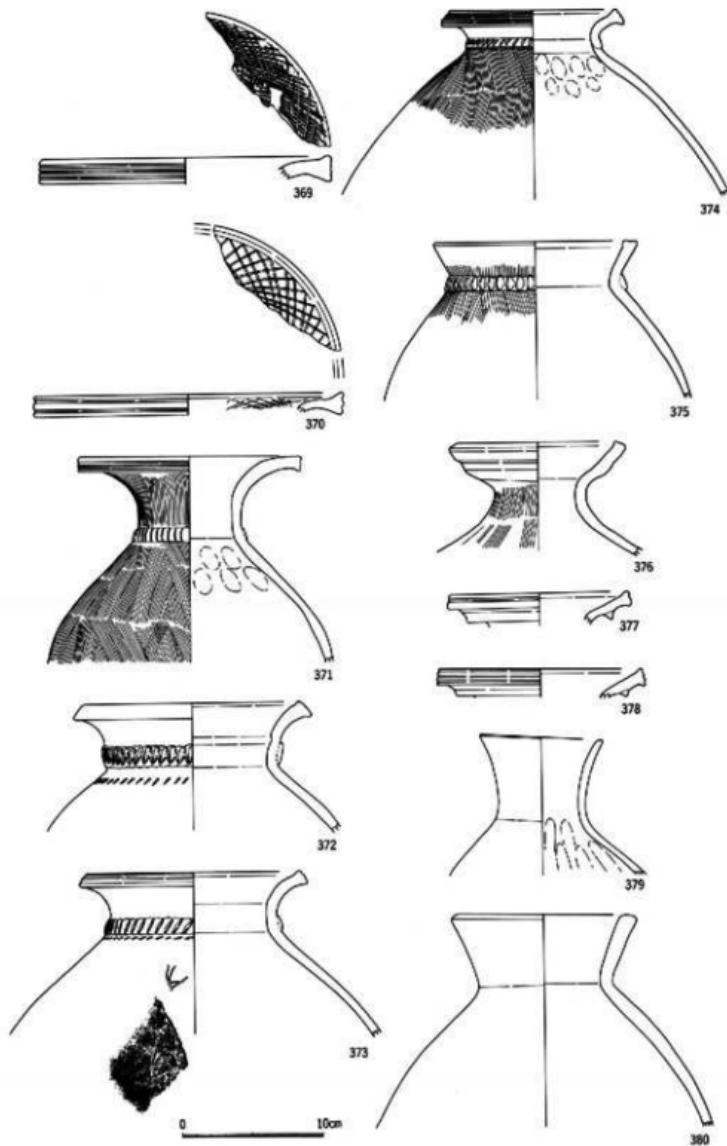
第73図 SK1016遺構実測図



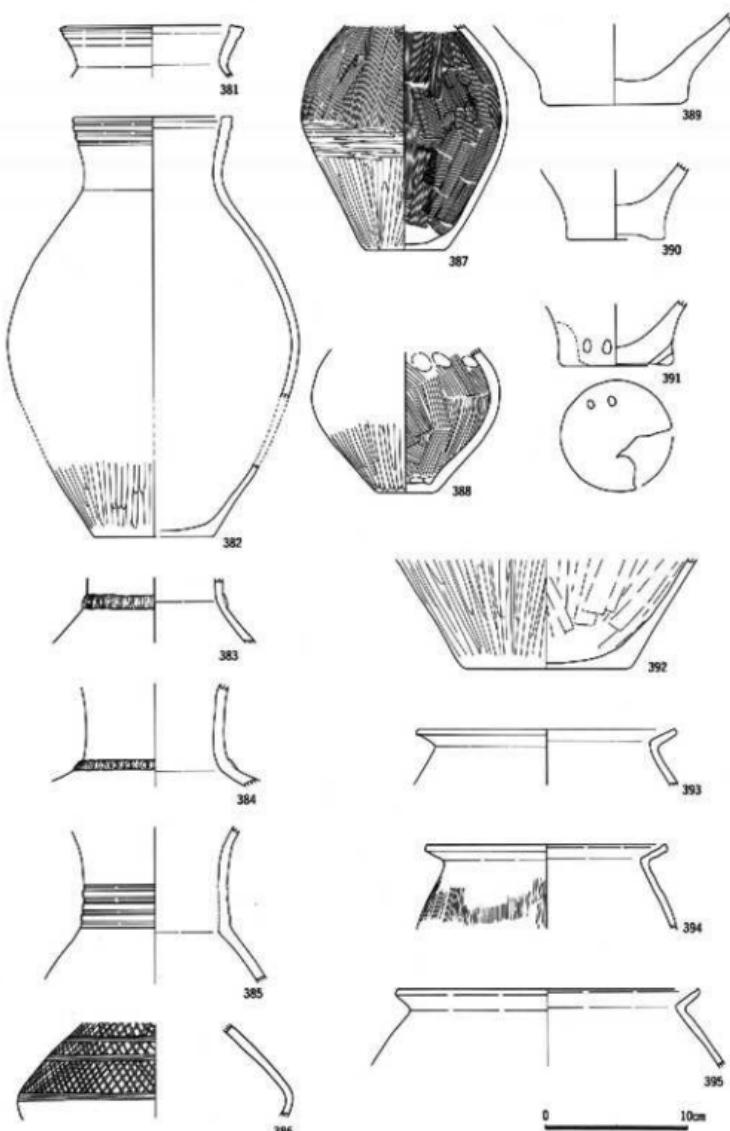
第75図 SK1016出土遺物実測図 (1)



第76図 SK1016出土遺物実測図 (2)



第77図 SK1016出土遺物実測図 (3)

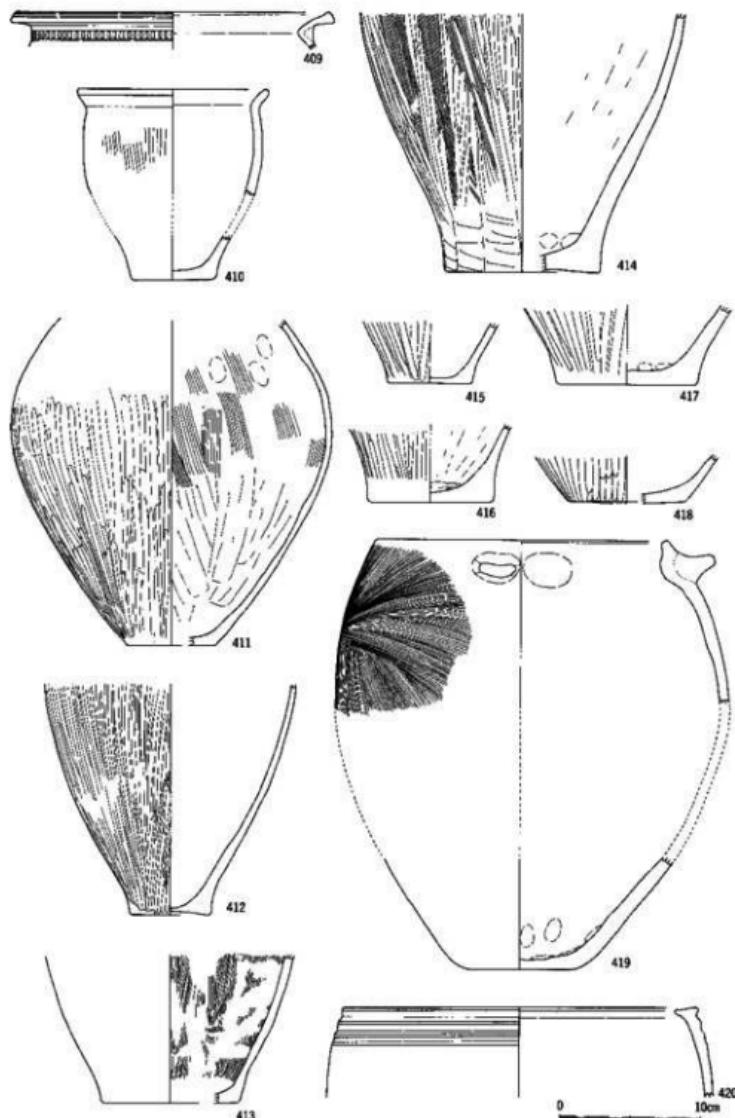


566

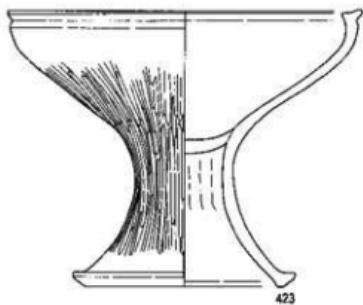
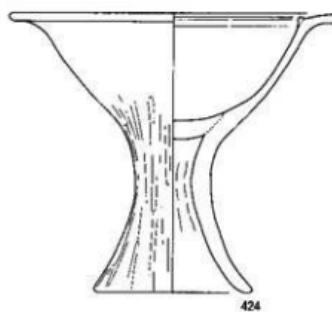
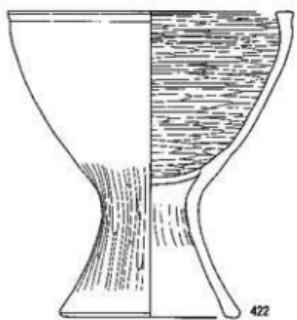
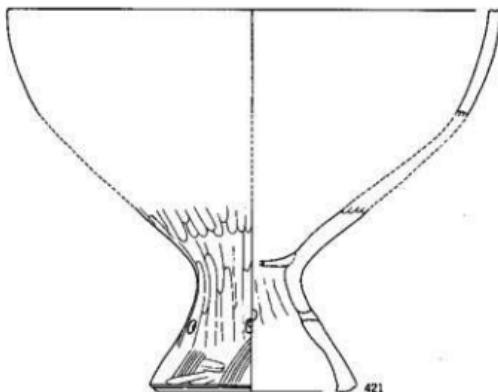
第78図 SK1016出土遺物実測図 (4)



第79図 SK1016出土遺物実測図 (5)

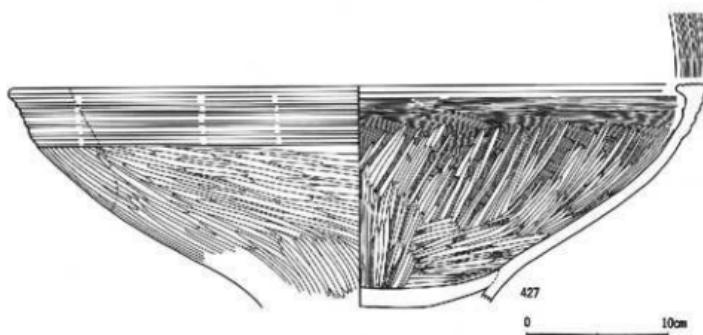


第80図 SK1016出土遺物実測図 (6)

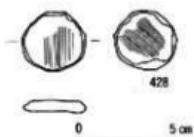


0 10cm

第81図 SK1016出土遺物実測図 (7)

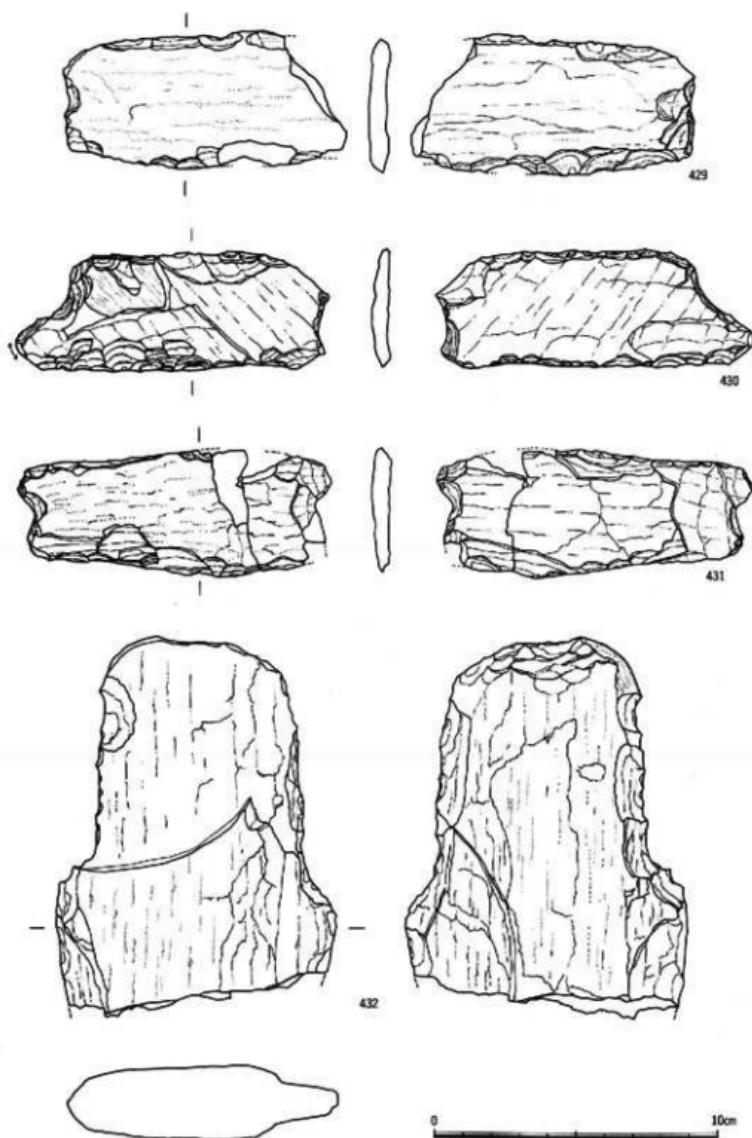


第82図 SK1016出土遺物実測図 (8)



目、円形浮文、頸部下端の断面三角形の突帶、体部上半には櫛状工具による列点文が施される。366～370には、口縁端面に2～3条の凹線文がみられる。372～374は緩やかに外反する短い口縁部、端部を肥厚させ、頸部に圧痕文突帶の付く同じような形状を呈しているが、372を除いて凹線文が施されている。373には体部上半に鳥の足状のヘラ描き記号文がみられ、注目される。375は屈曲してやや外反する短い口縁部を持つ。屈曲部には圧痕文突帶を巡らす。376～378は漏斗状の口頸部をもつ。376は突帶が退化して、凹線文に変わっている。377・378は口縁部下に断面三角形の突帶を巡らし、口縁端部には凹線文がみられる。379～382は直口気味の口頸部を持つ。379・380は無文だが、381・382には口縁部直下に凹線文が施される。383・384は頸部下端の圧痕文突帶が巡らされ、385は頸部下端に凹線文が施され、突帶が変化した、いわゆる凹線文B種にあたる。386は算盤玉状の体部上半で、ヘラ描きの斜格子文と櫛描の直線文が描かれている。387・388はともに壺形土器の体部であるが、387は最大径をやや上位にもち、上半タテハケ、中位ヨコヘラミガキ、下位タテヘラミガキで355・365などと同じような調整がなされている。388は最大径がやや張った形状で、外面上位はナデ、下位はタテヘラミガキ、内面は細かい単位のハケで仕上げられている。389は他の個体と同じように平底、390はわずかに上げ底を呈す。391は底部端に2孔の穿孔、392には内面下半のヘラ削りが登場している。

393～409は「く」の字状に屈曲して外反する口縁部を持つ壺形土器である。393～395は端部を平坦またはやや曖昧に收め、396は端部を肥厚させる。397～403は端部をわずかに上方に拡張、404～408は端部を肥厚ないしは上方に拡張させ、端面に1～2条の凹線文を施す。409は、口縁端部に凹線文、屈曲部に圧痕文突帶がみられる。410は口縁部の屈曲がやや甘い小型の壺形土器、411の体部は、倒卵形を呈し、内面下半にヘラケズリが観察できる。412～418で



第83図 SK1016出土遺物実測図 (9)



第84図 SK1016出土遺物実測図 ⑩

は平底ないしはわずかな上げ底である。体部下半の調整は様々で、タテヘラミガキが主流であるが、413はナデ、414のように、タテハケ後タテヘラミガキを施すものもみられる。

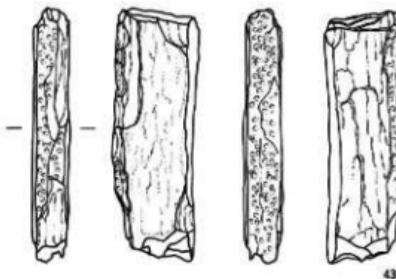
なお、角閃石等を含む胎土から、355・365・367・369・374・400・401・418は讃岐地域からの搬入品とみられる。

419は鉢形土器、倒卵形の体部、口縁部直下に一对の瘤状の突起がある。420は口縁端部を内外に拡張、口縁部直下に3条の凹線文が施されている。

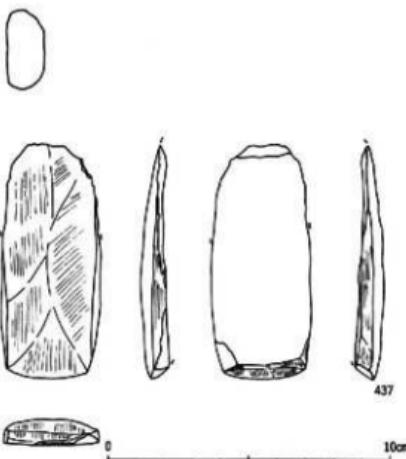
421～427は高杯形土器。高杯形土器が占める割合は本遺構が最も高い。421・422は半球状の杯部を持つ。口縁端部も脚端部も目立つて拡張されることなく、平坦に収められる。423は、杯部の形状がやや横に張って皿形に近く、口縁部端、脚端ともに拡張する。424・425は半球形の杯部、口縁部は屈曲して水平に開き、屈曲部内面に断面三角形の突帯を巡らせる。426は口縁端面に2条の凹線文を施す。427は大型の高杯形土器で、内側して大きく外方に立ち上がる杯部、口縁端部は内外に拡張、端面と口縁部直下外面に凹線文が施される。脚台部と杯部の間はいずれも円盤充填がなされている。

428は土器片利用の土製円板である。

429～431はいずれも結晶片岩を加工した打製石庖丁である。429は欠損しているが、いずれも端部の抉りが施されている。432は結晶片岩製の石鎌、いわゆる有肩石斧で、刃部を欠損している。433は柱状片刃石斧、緑色片岩製で表裏面を中心には研磨が施されている。434～436は柱状石斧の未製品、敲打による成形までが行われているもので、研磨箇所はない。



436

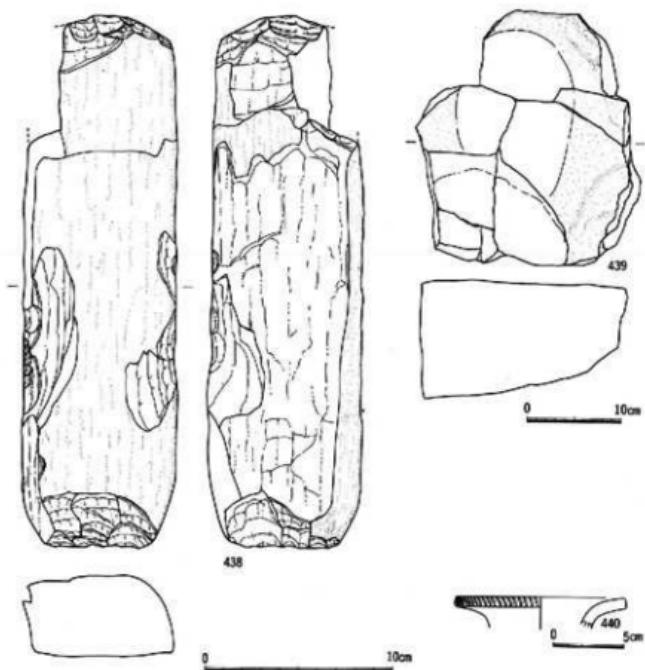


437

第85図 SK1016出土遺物実測図 (II)



10cm



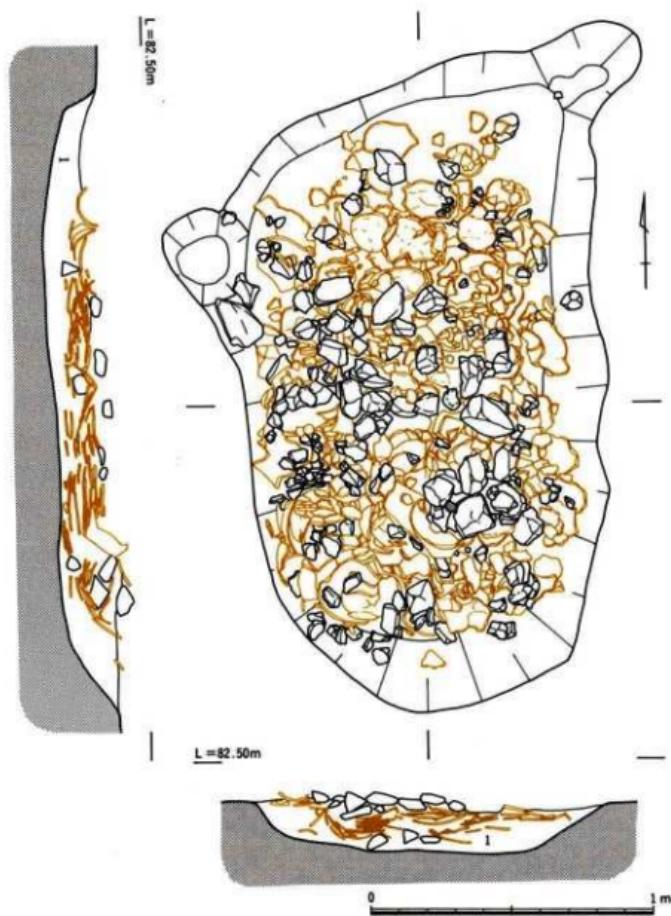
第86図 SK1016出土遺物実測図 (12)
SP1051出土遺物実測図

437は扁平片刃石斧とみられる。欠損面を除いて丁寧に磨かれている。438は結晶片岩の棒状の自然石の両端と、側面に敲打が加えられたもの、大型蛤刃石斧の未製品と考えられる。439は砂岩の自然石を利用した砥石である。自然面が砥面として利用されている。6破片の接合したもので、破壊されて土壤内に納められたものであろう。

440はSP1051出土の壺形土器である。朝顔状に開く口縁部、端面には刻目が施される。

集石土壤 (SK1039) (第87・88図)

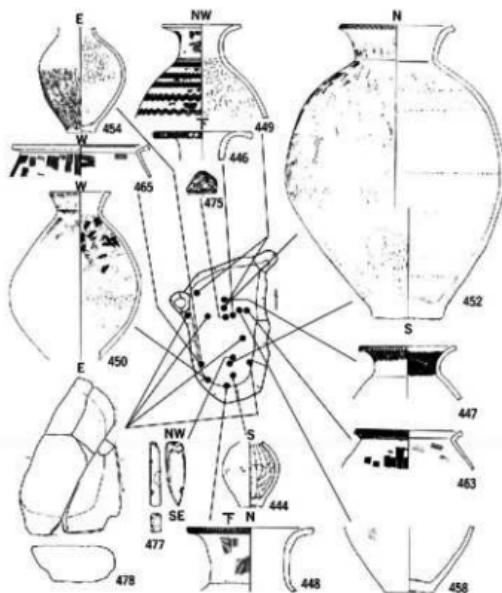
第3調査区 (R-19) で検出された。長軸2.3m、短軸1.3m、深さは検出面から20cmを測る。平面形は隅丸方形を呈し、主軸は南北方向を示している。北東隅、北西隅にそれぞれ径30cmの浅いピットが付随している。遺物の分布は土坑内ほぼ全面に広がる。上面には砂岩角円礫が被覆されており、遺構検出面より4～6cm盛り上がった状態で検出された。



1. 暗灰黄色2.5Y4/2砂質土

(遺物の網目は石器をあらわす)

第87図 SK1039遺構実測図



(数字は遺物番号。N・S・W・E・上下は口縁または底部の向く方向を示す。)

第88図 SK1039主要遺物出土地点図

砂岩円礫を利用した砥石478は、被熱のため赤褐色に変色しているが、4分割され、周縁部に配置されている。また、スクレイバーと柱状片刃石斧、黒色円礫が各1点出土している。特に石斧は、刃先を南東方向に向け、数個の砂岩角礫に覆われ、さらに大型壺形土器452の中に納められていたと考えられる。

出土状況はSK1014と共に多く、大型の土器棺を主体とする墓である可能性が高いと考えられる。

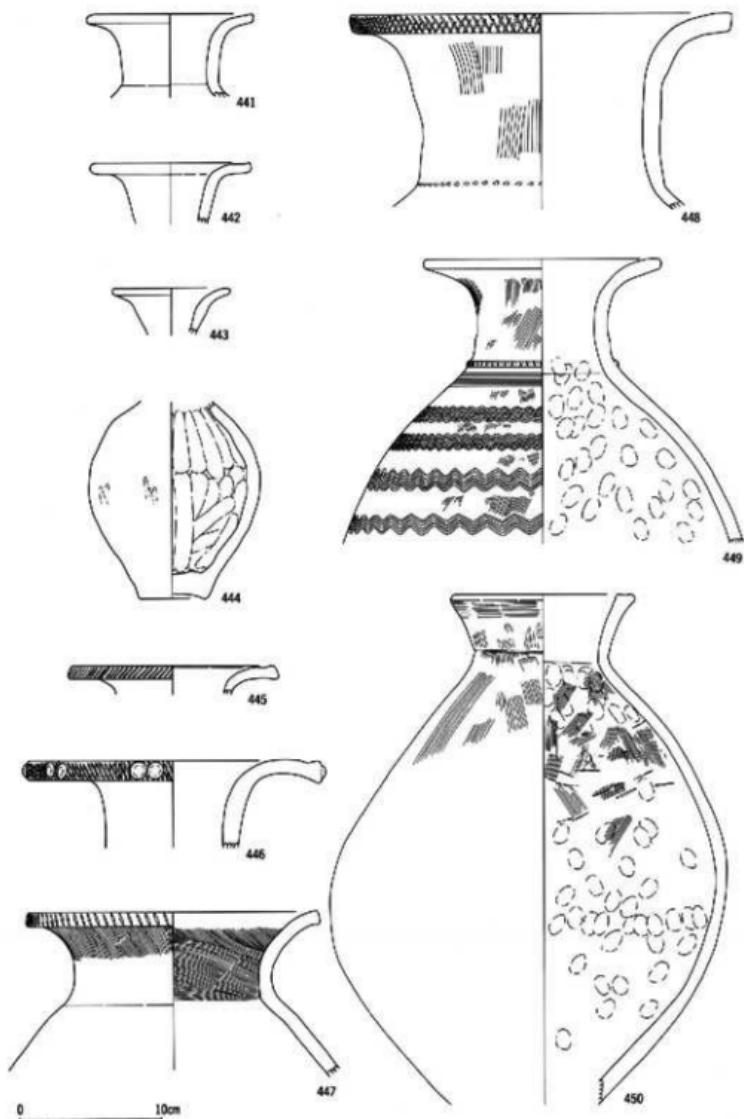
出土遺物（第89～94図）

弥生土器は、破片数6,816点、他に磨製石斧1点、スクレイバー1点、砥石1点、サスカイト片4点、黒色チャート円礫1点が出土している。

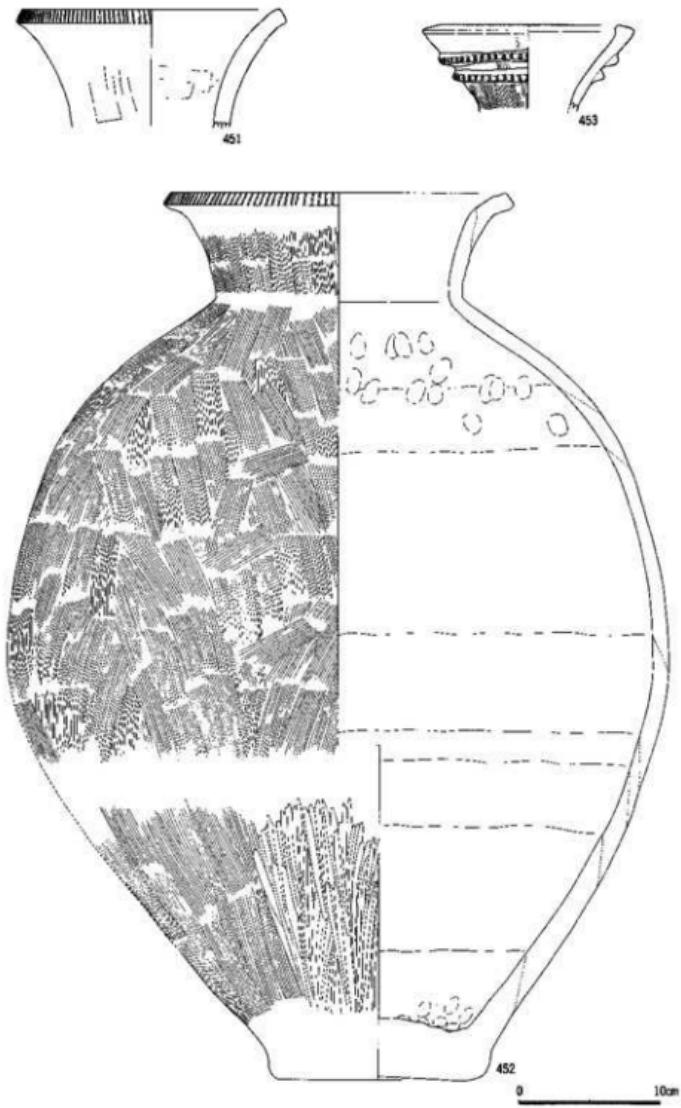
441～449は朝顔状に大きく開く口縁部を持つ広口壺形土器である。無文のもの(441～444)、

遺構の北半は削平を受け、遺存状態は良好ではない。土器が散乱し、下部に壺形土器の底部が6個、広口壺形土器446の口縁部が、形をとどめていた。一方、南半は中央部に大型の壺形土器452が、潰れた状態で出土、その周辺に、ほぼ完形の壺形土器3個体(444・450・454)が、横倒しに置かれた状態で出土した（第88図）。土器は、完形に近いものが納められているとみられる。444は土が詰まった状態で出土、他は押しつぶされた状態である。また、炭化物粒や焼土塊、赤褐色に変質した砂岩礫も目立ち、火の使用があったことが窺われる。

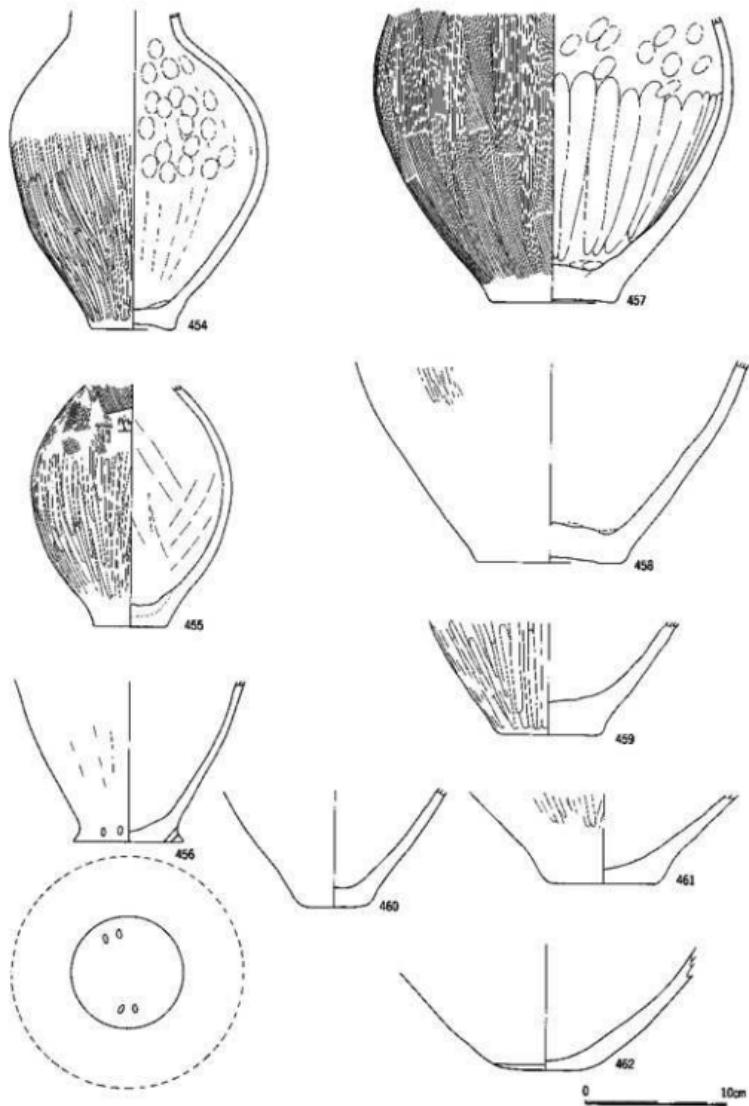
遺物群上面で検出された



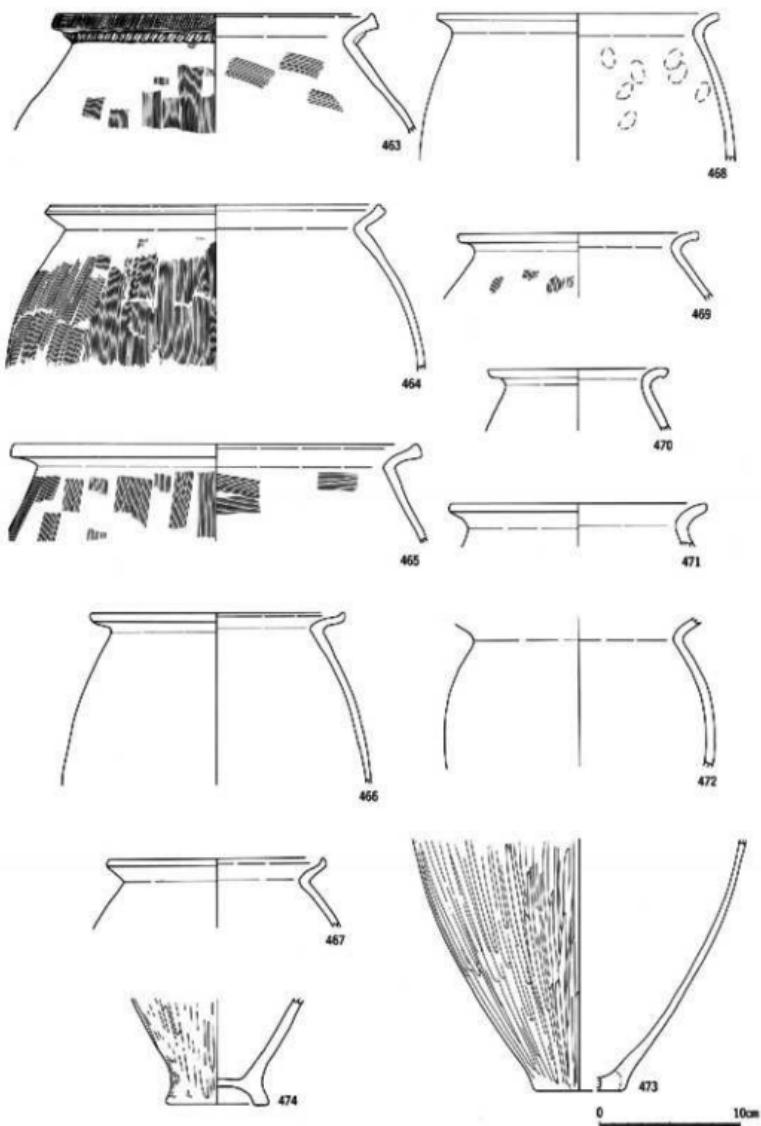
第89図 SK1039出土遺物実測図 (1)



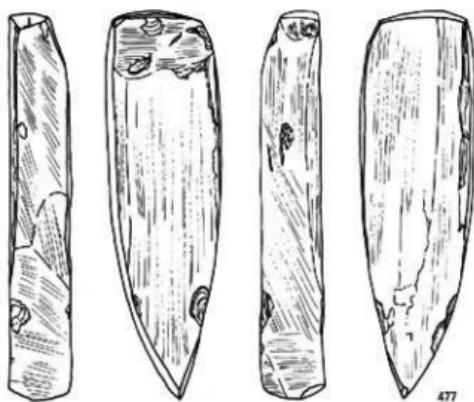
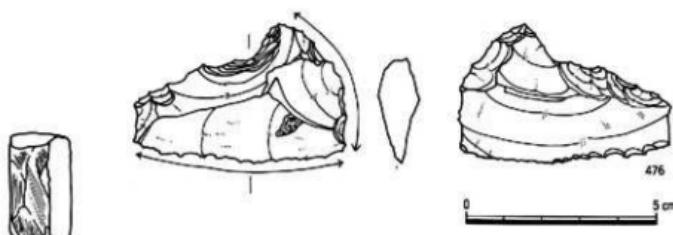
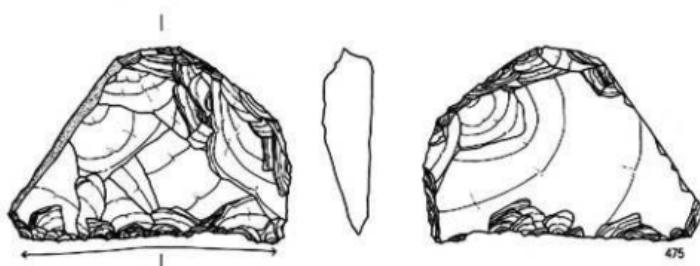
第90図 SK1039出土遺物実測図 (2)



第91図 SK1039出土遺物実測図 (3)



第92図 SK1039出土遺物実測図 (4)



第93図 SK1039出土遺物実測図 (5)



第94図 SK1039出土遺物実測図 (6) 464・465も口縁端部は肥厚するが無文である。466は端部をやや上方に拡張、468～471は口縁部の屈曲も、端部の納め方もやや曖昧である。473は体部、薄いつくりである。474は高台状の上げ底に特徴がある。なお、465・474は角閃石や長石が含まれた胎土から、讃岐地域からの搬入品と考えられる。

475・476はサヌカイト製のスクレイバー、475は下辺に両面調整の刃部を形成、476は下辺と右辺に使用痕が認められる。477は黒色片岩製の柱状片刃石斧。全面丁寧に研磨されている。478は砥石である。砂岩の自然縫の表面と側面の一部を砥面とする。

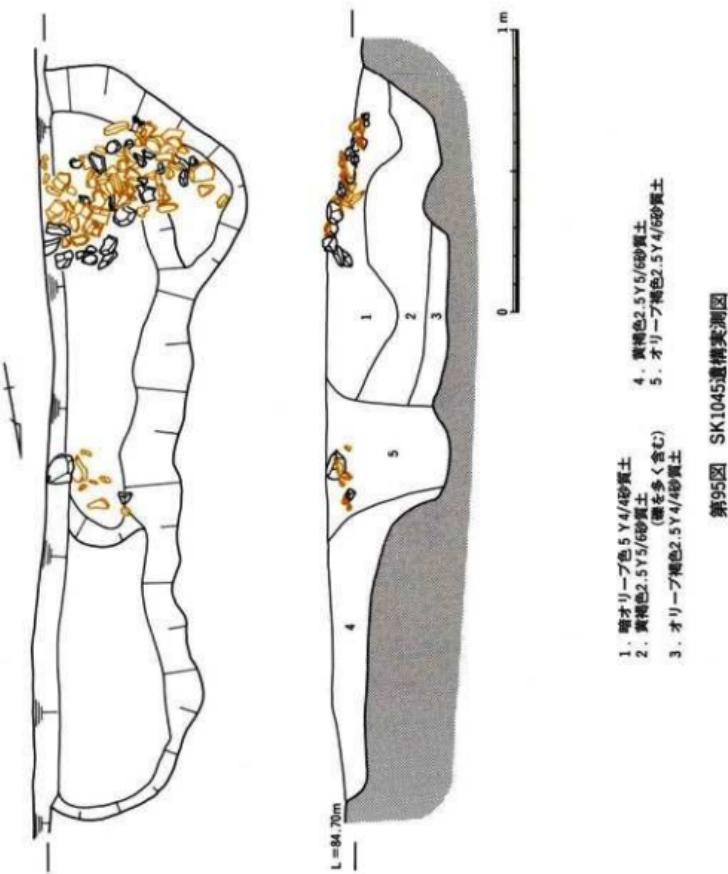
集石土壤 (SK1045) (第95図)

第1調査区 (Z-15) で検出された。約半分が調査区外に延びているが、規模はほぼ長軸 2.83m、短軸は検出部分で 0.45m、深さは 35cm を測る。主軸は南北を指し、不整な長楕円形をなすものとみられる。南半は一段深くなり、中央にピット状に掘り下げられた部分が断面で観察できる。覆土は 5 層に分層できるが、2 層と 4 層は対応するものとみられる。

砂岩角円礫と弥生土器が集中した形で検出されたが、これは土坑南端上面に限られる。覆土から黒色円礫が破碎された形で大量に出土している。また、炭化物粒を含んでおり、火の使用が推定できる。

口縁端部に刻目を持つもの (445～448)、体部上半に櫛描の直線文・波状文を施す 449 がある。443 と 444 は同個体の可能性がある。450 はやや外反気味に直立する口縁部、最大径部分のやや張った体部を持つ。451 は緩やかに外反する口縁部、端部に刻目を施す。452 も同様の口縁部と倒卵形の体部を持つ大型の壺形土器である。外面は主にタテハケ、内面はナデであるが、粘土板の外傾接合痕が明瞭に残る。453 は漏斗状の口縁部、口縁部下の 2 条の刻目突帯、角閃石粒の目立つことから、讃岐地域からの搬入品であろうとみられる。454・455・457 は壺形土器の体部、なめらかなカーブを描き、最大径は中位に持つ。456 は底部端に斜めに 2 孔づつ 1 対の穿孔がみられる。胎土も他の土器とは異質で砂粒をほとんど含まない。458～462 は底部である。平底が多い。

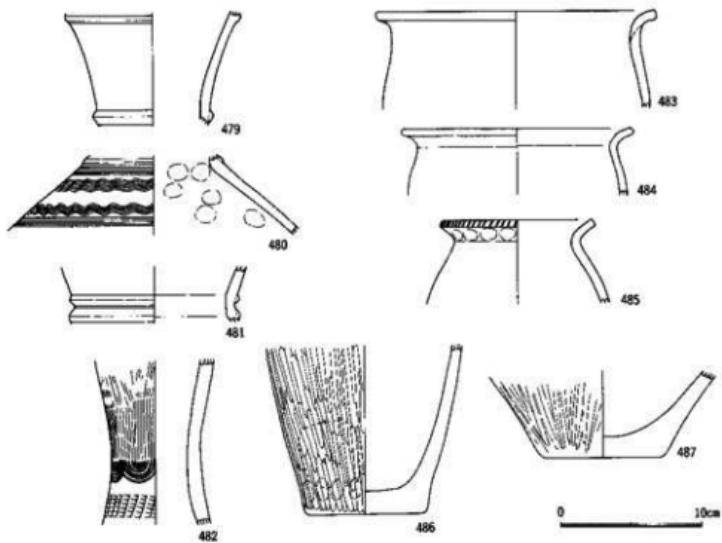
463～472 は壺形土器である。概ね「く」の字状に屈曲し、外反する口縁部を持つが、463 は口縁端部が肥厚、刻目を施し、ヘラ状工具による圧痕文突帯を頸部に巡らす。



出土遺物（第96図）

弥生土器片は555点、黒色チャート礫の破片が34点出土している。

479は壺形土器の頸部とみられる。頸部下端と上部に断面三角形の突帯を巡らす。480は描画の直線文・波状文を施した壺形土器の上半部である。479と胎土が似通っており、同一個体



第96図 SK1045出土遺物実測図

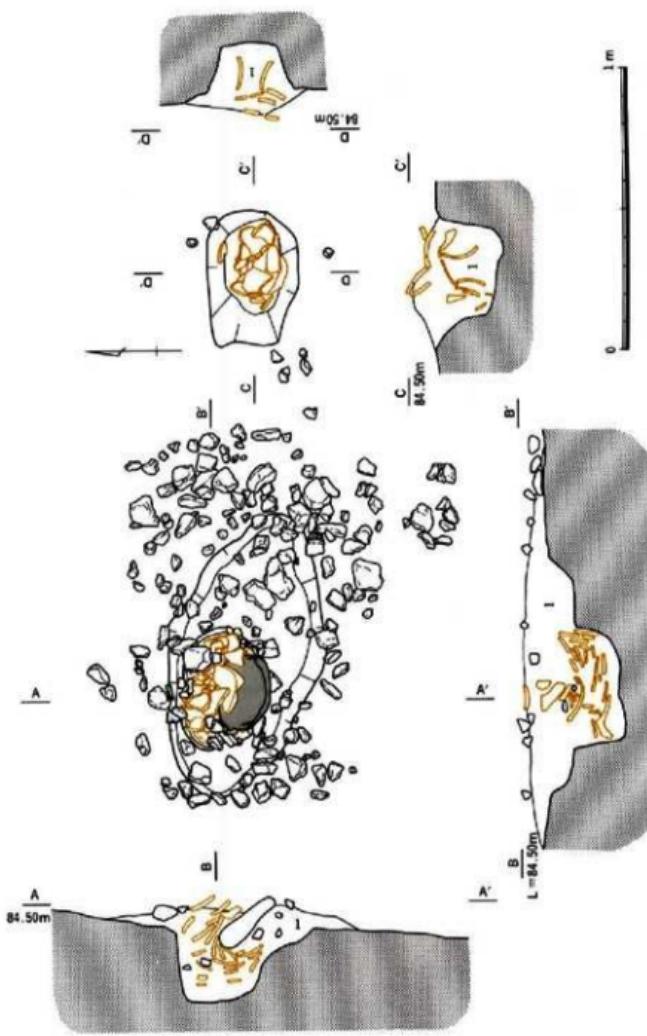
の可能性もあるが、接合面がなく、別の土器として扱った。481はやはり壺形土器の頸部、断面三角形の突帯を2条巡らす。482は細頸壺形土器の頸部とみられる。縦描の円弧文と簾状文が施される。

483～485は壺形土器、口縁部の屈曲は緩やかで、483はいわゆる如意状の口縁部に近い。485の口縁部は屈曲が「く」の字状に近く、口縁端部には刻目が施される。486は体部の張りが極端に少なく、筒状の鉢形土器の可能性がある。

集石土壙（SK1049）（第97図）

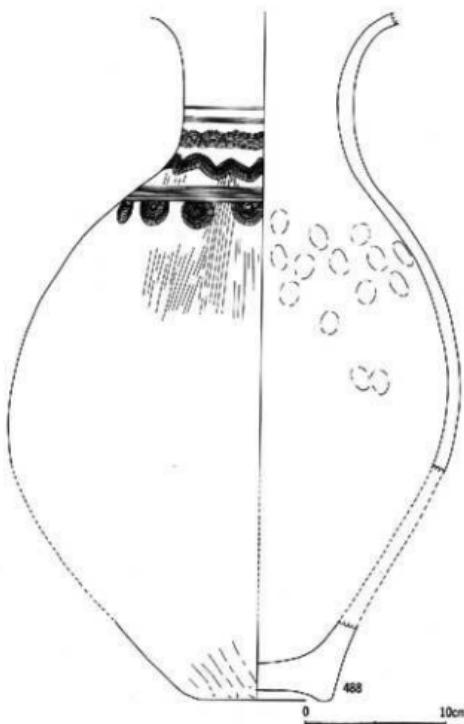
第1調査区（W-10）で検出された。2箇所に分かれるが同一の構造と考えられる。西側の上面に集石を伴うものをA坑、東側の集石部分からはずれるものをB坑とする。

A坑は長軸1.05m、短軸0.55mの長楕円形を呈し、中央部で0.43m×0.38mに一段深くなる。最深部で30cmを測る。砂岩角円礫の集石の中心に、円盤状の砂岩砥石を据え、その上に壺形土器488の底部が置かれている状況で検出された。砥石の下から破壊された土器片が折り重なるように出土した。砥石はA坑の蓋の役割を果たしたものとみられる。最下部では壺形土器489の底部が出土している。



1. 暗褐色10YR3/4砂質土
(網目の遺物は磁石をからわす)

第97図 SK1049遺構実測図



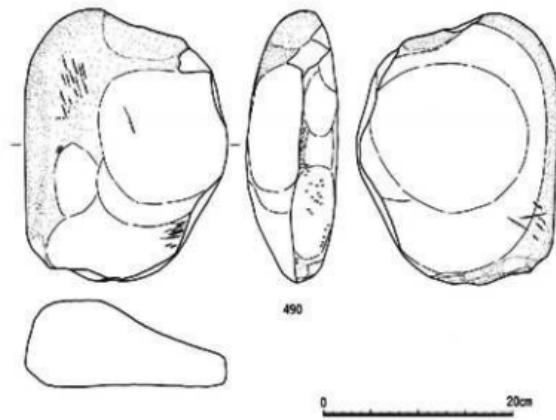
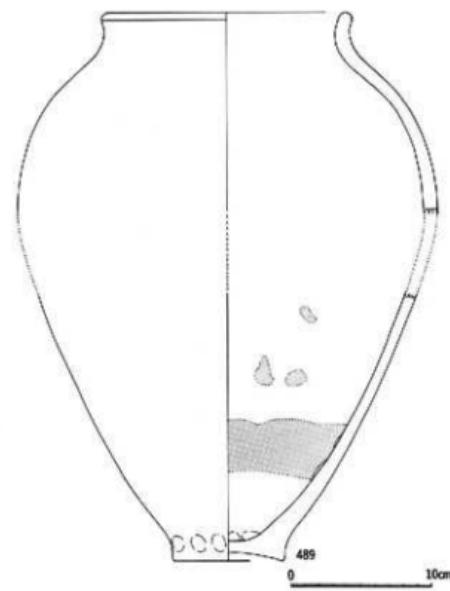
第98図 SK1049出土遺物実測図 (1)

中心間距離で1.5m東よりのB坑は隅丸方形状で長軸0.48m、短軸0.32m、深さは25cmを測る。底に壺形土器488の頸部を据置き、その上に破碎された壺の体部を重ねて埋置してある状況で検出された。こちらには被覆する縁はない。

両土坑で出土した土器は3個体分、488の広口壺形土器、489の無頸壺形土器、それに体部だけの個体である。これらの土器のうち489は概ねA坑から、488はB坑から出土しているが、それぞれの破片が交錯して出土している。また489には、焦げ付きのような炭化物の塊が体部下半内面にこびり付いている(第99図網目の部分)。

出土遺物(第98・99図)

弥生土器片は3個体分、破片数253点、砾石1点のみである。488は卵形の体部、直立する



第99図 SK1049出土遺物実測図 (2)